

となし、此を審美見となしたればなり。記者がシェリングの抽象理想主義を擧げて寫生派に比べしは、或は安ならざるべし。シェリングは偶然に美なるのみなる自然は藝術に法則を與へむこと思も寄らず。是に反して完全なる藝術の造り出したるものは、自然の美を判断すべき規則及標準なりと云ひしことあればなり。

是れ甚だ不適當なる批難と謂はざるべからず。總じて他の説を評せむは、他の言ひし所もしくは其言ひし所より必然に歸納又は演繹せらるべき結果に就て論ぜざるべからず。吾等はフキヒテが自然界を輕視したるの一點を捉へて、今の所謂寫意派の口吻に似たるものあるを注意したることあるも、未だ曾て彼が「主觀理想主義を擧げて」是を寫意派に等しと言ひしことあらず。シェリングが自然界に對して前人未だ曾て與へざりし所の審美的價值を附與せし點に於て、如何に今の所謂寫生派の所説に類するかを言ひしことあれども、未だ曾て彼が「客觀理想主義(若くは抽象理想主義)を擧げて」寫生派に等しとせしことあらず。甲の人砂糖の白きを以て鹽の白きに比せし時、この人は是を駁し、砂糖を擧げて鹽に等しとするは不可なりと言はば、是れ寧ろ失笑すべきに非ずや。鷗外は人を誣ひ且笑はするもの

也。さるにても、フキヒテの主觀理想主義を擧げて、寫意派に比ぶるを、妥當なりとせる鷗外は、寫意派を以て一の哲學主義となすにや。覺束なや。

鷗外若し予の説を評せむとならば、乞ふ予の説ける所を評せよ。シェリングが自

然界に重きを措きしは、彼が哲學たる客觀的理想主義に本く。絶對の中に於ける主客物我の合一は、一步を轉ずれば直に彼が套語とも見るべき「自然界の無意識的産物は人間の意識的製作に似たり」てふ命題を得べきは、何人も見るを過まらざる所、彼がフキヒテ一輩の主觀的理想主義に對して、客觀的理想派と稱せらるゝは、やがて彼が自然界に與へたる如是意義あるが爲に非ずや。シェリングが美術を以て形骸の中に物我を包容し主客兩界の完全なる調和となし、以て相對の中に現はれたる絶對有限の中に表はれたる無限となしたるは、美學史の一斑を解するもの、業に已に熟知する所、美學に篤き鷗外の言として、寧ろ甚だ明瞭なるに過ぐ。而かも是故に彼が精靈の發現を自然界に拒否したるを非とするの理由を見出し得べしとするものあらば、其人は未だシェリングが哲學を了解せざるなり、若し審美觀に於て、我の中に非我物を合一したりとせば、同一の理を以て、翻て非我の中に我を合一

す。と謂ふを得べきに非ずや。換言すれば精霊の中に自然を見るの吾等は同時に自然の中に精霊を見得べきに非ずや。彼が自然界に與へたる審美的意義も亦寧ろ甚だ明瞭なるに過ぐ。

自然界を以て精霊の發現となしたるが故にシリングを以て自然の模倣を推奨したるものとなさば是れ亦未だシリングを解せざる者なり。彼が理想派たるを失はざる所以の一は實に是點に於て所謂 Vorbilder 理想の思想を輸入したるに依る。歴史的眼孔を以て絶對の表現を觀じたる彼は自然界を以て完全と不完全美と不美との混合となしたり。是意味に於ては事實に於て存在する自然界(= Die in der That seiende Natur)は畢竟非實在(= Nichtseiende)のみ。然らば則ち完全なる美術の造り出したるものは自然の美を判斷すべき標準なることも亦甚だ明瞭なるに過ぐるに非ずや。

吾等はシリングが自然を以て美術を規束すべしと説きたりとは言はずりき。鵬外が美術を以て自然よりも完美なりとせるシリングが説をとりて吾等を難せむとするは甚だ疎忽なりと謂ふべし。獨逸美學の一斑を窺ひたらむものい何ん

も暗記すべき所のものを以て却て吾等の教を求む是亦甚だ迂なりと謂ふべし。

其二

吾等は又シルレル、シレーゲルの一輩が Stoff = Form 形式の方式の下に美術の思想を置きしは、やがてフヒテが主觀理想主義とシリングが客觀理想主義との兩端の調和を企てたるものと見るを得べきを注意せり。鵬外は是を評して曰く、

藝術にては、形もて質を減すと云ひしシルレルが頗るめてたき説と、藝術にては人空き形となり、自然のみにては人野にありて愛を失ふと云ひしフリードリヒ、シレーゲルが頗る虚誕なる説とを一樣に見て、シルレルもシレーゲルもフヒテとシエリングとの極端なる説を調和せるものぞといへるは、わが會得し難き所なり。

と。あはれ意外の批評を聞くものかな。希くは審美學者としての鵬外に對する吾等の尊敬をして却て吾等を誤らしむる勿れ。さるにても獨乙の美學史に精通する一學者の言として、あはれ意外の批難を聞くものかな。

シレーゲル(云ふまでも無くフリードリヒ)がフヒテの流を汲めりとは尋常の見にして、まことは是二人は共に其の審美説に於て第三者に負ふところありしな脱

近史家の齊しく唱ふる所なり。第三者とは誰ぞや、シムロロはなり。げにヤフ、ロ
テが審美説は所詮シムレルが審美説を自己の哲學に包容したるものに外ならず。
シレーゲルが希臘詩歌の研究は同じくシムレルが審美論に基けるものにして
ダンツルが言ひし如く、其文藝さへも似通へり。審美史家の或者がシムレルの繼
續者の中にシレーゲルを數ふるものあるは、かゝる因縁あればならむ。

是れ二者が外部の關係に就て言へるものなるが、更に其學說の内容に就て一瞥
せば、二者の間に更に親密の連絡あるを見出さむ。審美學史に精しき、鷗外の獨り
是を訝りしぞかへす、も訝かしきや。

『希臘詩歌の研究』の中にシレーゲルが口を極めて近代の美術殊に詩歌を難ぜし
は、果して何が爲なりしか。彼が希臘時代の理想的完美を Das Schöne (美)となせる
に對し、近代美術を Das Interessante (興) (是譯語當らず、暫く記)となしたるは、果して如
何なる意味なりしかを鷗外は知りや。古代圓滿の美、一度び地に墜ちて、美術は
私心の興と爲り了りてより、茲に無限の實在に對する向上的渴仰は初まりぬ。是
に於てか、文は野の終れる邊りに初まりて、更に新に客觀的完美の域に到るまで幾

多の階段を精進せざるべからず。所謂 Das Interessante は是階段の一にして、曾て
失ひし Das Schöne の理想境に達する一の準備に外ならず。Das Schöne (美)は即ち
Das Objective (客觀)なり。内容と勢力との均衡なり。内容ありて勢力無からむか、
若くは勢力ありて内容無からむか、是れ共に一面の偏輕若くは偏重を表はして、共
に非美若くは醜なるを免かれず。所謂 Das Interessante は是の如き状態を示すも
のなり。シレーゲルが是説を鷗外の好きなる表もて示せば左の如し。

内容 (内容無勢力) D. Interessante.
及 勢力 (無内容) Das Schöne

苟も審美學史を解するものは、誰かシレーゲルが是説の中に美の理想を以て心
力の調和的遊動に躍するシムレルが根本的思想を認めざるものぞ。シムレルが
所謂の心力の調和的遊動とは何にぞ。理論的形式と實際的實質の二個の動機の
均衡に非ずや。是れやがて希臘の昔にありて今は無く、却て是れ今の美術の理想
なりと云ふシレーゲルが客觀 (Das Objective) 若くは美 (Das Schöne) に非ずして何ぞ
や。是れ吾等が一個の審美學者として言説するには、歴史上餘りに明瞭なるに過

くるに非ずや。吾等は寧ろ鷗外が會得し難しとして、是の餘りに明瞭なる事實の説
明を吾等に求めたるを恨みとなす。

シレーゲルガ所謂勢力とは主觀の側に於て美術を形成する所の能力の義にし
て内容とは客觀の側にありて是能力によりて形成せられて美術となる所の實質
の義なり。是れやがて吾等が嘗て形成と實質と言ひしものと同じ、是亦注意すべ
き也。

吾等が鷗外に答ふるところ概ね右の如し。多謝す、吾等は是によりて審美學者
なる鷗外がハルトマン以外に於ける歴史的知識の一斑を窺ふを得たりと雖も、鷗
外が爲に計るに斯の如き疑問を發する代りに、シエリング、フヒテの前にあるのシ
ルレルが如何にして二氏の説を調和し得しかと云ふが如き問を起すの寧ろ無邪
氣なるには如かざりし。さても惜しや。

若し夫れフヒテ、シレーゲルか説として、鷗外の掲ぐる所のものに就ては言ひ聞
こえ、たきこと山々あれども、こゝは審美學の講壇にも非れば、只吾等に屬する他の
批難を辨ずるに止めつ。鷗外もし教る所あるを得ば乞ふ聽かむ。

(二十九年六月)

一葉女史の『われから』

文藝倶楽部の第六編は又もや一葉女史が『われから』と題する一佳篇を掲げぬ。
女史がけふこのごろは殆ど吾等をして加ふべき賛辭の選擇に倦むことを覺えざ
らしめむとす。

おのづからとは云ひながら、扱ても見事なる女性の觀察は、鬚眉作家のなか
に及び難きものありて存す。お美尾のことに就きては巧みに筆を省かれたれど
も、ありしにも増して明かに思ひ遣らるゝは、たゞの腕にはあらず。上野わたり浮
世の榮華を思ひ染めて、見る影も無き身に較べてはありし我にもあらず心狂ひて
與四郎との中、是より永く隔たゝりし。はては出處あやしき二十圓の金を名残に、
其子までを置き去りて跡無く消えしお美尾は、二十年の後に、派手作りにはたち下
とも見ゆる奥様となりて顯はれぬ。

そもや、お前母の性を受けつぎて、高品にきやしや、骨細の生れつき。家つきを冠

りの氣儘、よろづ派手好みに、下々の思ひやり厚く、情多く、嫉妬深く、氣の輕き割りに、は心細く、憂しと思ひつめては、一日一夜泣きつづけ、兼ねまじく、エ、まゝよとやけの上にては何事にも爲兼まじき、神經質の女性は、美尾のありし昔にくらべて、親子の縁淺からず、筆の跡床しうたとられぬ。「旦那様の身持ちは、那程まで、吾を袖にし給へども、女の身の悲しさは、あけて夫とも怨じ難ね思ひ、く、てつらや、く、の果は心にも無きあさましの舉動、ひ家つきとて許されず、浮世の外にわれから身を捨つる」お町の末路。吾等は讀み終りて、女子の身の憐れに、悲しう涙こぼれぬ。

吾等は一葉女史が筆の痕に、お町の身の上に十分の同情を認め得たるを多とす。お美尾とお町、與四郎と恭助、是間の因縁を冥想すれば、一部の世情歷々として鏡にかけて見るが如し。書生千葉がお町に對する隱然たる依戀の情は、下婢の間話の中にほの見えて、頼り少き天が下に、我一人の奥様の間に、一筋の情糸を遊ばしめたる作者の手際などに、くらしき程床しや。

會話の調子の品能くて、實らしく、地の文との繋ぎの穩かに、角目たぬ、さては圓

轉滑脱、痒き所に手のとぐくフレクシブルの書振、此等は一葉女史が獨得の長所なり、殊に女性の談話には一種云ふべからざる同情を湛ゆるあたり、殆ど天品の筆とも謂つべくや。

もとより一葉が作として賞めるとばかりあるでは無し。さりながら其佳處長處の應接は、殆ど人をして缺點を指示するの遑無からしめんとす。文藝俱樂部おさむる所の八編、光彩陸離たる「われから」の一篇にけおされたるの觀無きに非ず。「濁り江」や「十三夜」や、はた「わかれ道」「たけくらべ」や、顧へば社會は如何なる賞賛を以て彼等を迎へしや、文界に成功したるもの近時一葉女史が作の如きは、蓋し少し。吾等は明治文壇の爲に、是好女小説家を得たるを喜ぶと共に、滔々たる男性作家に向て、いま一段の奮勵を希望せざるを得ず。

(二十九年六月)

徳富蘇峰君を送る

「國民新聞」及び「國民の友」の主筆蘇峰徳富君は、去月二十日を以て歐米漫遊の途に就かれたり。

文學者として、政治的記者として、又著述家として天下又君の名を知らざるものなし。必ずしも學殖の深きに非ず、必ずしも議論の正きに非ず、必ずしも文章の工なるに非ず、而かも君は他の得て摸倣すべからざる君の因て、以て君たる所以の特色を有す。是を以て天下の人君を愛し、好て君に聽く。

蘇山の麓より君が懐にして來たりたる一片の放膽的時事論は、其論旨よりは寧ろ其文牘を以て天下の青年を動かせりき。君の奇才は洵に昭代の珍なり。今や君母國を離れて遠く海外に遊ぶ。所謂日本の眼孔を以て世界を觀、世界的眼孔を以て日本を察したるの結果として君はた何を齎して歸らむとするや。吾等は君が抱懷の獨り文字の上に存せざることを希ふ。

年少にして新紙の事業に従事したるは寧ろ君が畢生の過失なるなからんや。歐雲米雨徐に君が雅懷を養へよ。希くは英才に假すに時と力を以てせよ。成るる新聞事業を以て寧ろ君が過失とする吾等が君に對する囑望と尊敬の如何に大なるべきかを思へ。

君は生來蒲柳の質、幸に文學の爲國家の爲に加餐せよ。

(二十九年六月)

市川新藏

自己の感情と希望とを歌ひ、自己に慰藉と娛樂とを與ふるの故を以て、詩人に感謝することを知るの國民は、亦大に其の俳優に負ふ所あることを遺るべからず。

歌舞伎明治の大劇部を東京より奪ひ去りたりとせよ。帝城の士女是が爲めに惆悵たるもの幾十萬ありとするや。一場の愁嘆場に、其百結の袂を絞らむが爲には營々屹々として貯蓄したる幾月の餘贏を惜まざる食ふや食はずの其日暮しより、都大路の高樓に浮世を外なる姫御前に至るまで平生劇部に懸くる所の熱情執心は殆ど吾等の意想外に出づるものありて存する也。壁一重を浮世の境なる是別天地に、彼等が現實世界を解脱することによりて得らるべき慰藉と快樂とは、殆ど如何なる條件の下にも、彼等を索引するの力あるなり。

劇部の勢力のしかく熾盛なるは素より俳優の妙技に職由す。今假に團菊二優をば是世より奪ひ去りたりとせよ。劇部の寂寥落寞果して如何なるべしとするぞ。滿城士民の幸福の是によりて損殺せらるべきもの其の幾何なるを知るべか

らざるなり。今日の人團洲の繼續者を恟恟して已まざるもの、洵に偶然に非ざるなり。

あゝ團洲の繼續者乎。社會は彼に於て自己の咏嘆者を認め、自己の慰藉者を認む。輕じて一俳優と爲す勿れ。社會が今日民富の程度に比し、那の如き過大なる報酬を懸けて、敬重尊崇、毫も慊色なきを以てするも、彼の技藝が如何に吾人の幸福に關聯するものあるかを諒るべきなり。あゝ團洲の繼續者乎。幾十年の後吾等もはや巨眼厚眉の是翁を見る能はざるべきの時、吾等は何人に於て其遺風を樂むを得べしとするか。社會が缺焉として暗に忡傷する所のもの、洵に偶然に非るを見る。

團洲門下素英才に乏しからず。而かも老團洲の衣鉢を繼紹して多く其名を辱めざるの望を負へるもの、吾等の見る所を以てすれば、單り一新藏あるのみ。而かも方今唯一の團洲繼續者たるべきの彼は、一眼を失ひて已に俳優たるの資質を缺損したるを如何せむや。

好劇の士は夙に彼が伎倆を認識したるなるべし。彼の舞場に云爲する所才氣

汪溢精神常に躍如たり。時に舊格を守らず、往々自ら成語を改削するが如き、一部の劇評家は痛く是を証ると雖も、所詮死型以外に活動の餘地を求めむとする彼が有爲の資性の然らしむるところ、必ずしも師翁の胡蘆を描きたるのみに非ざるべし。青年血氣の俳優をして、寧ろ夫の摸倣、擬古、是れ務むる屑々たる儕輩の間に、一頭地を割するものに、非ずや。舞踊は我邦の演劇に缺くべからざるもの、幼少の時より是形体的技藝の過重なる教育の中に成長したるの弊は、我俳優の大多數をして精神的教育の缺乏に陥らしめ、其爲す所をしてしかく形式的、感覺的の一方に走らしめ、遂に那の如き没精神の技藝を演出せしむるに至る。吾等が新藏に於て、多とす所の一は、身彼が如く舞踊に、巧妙にして、而かもよく劇の精神、人物の性格に留心し、場に臨んで、先づ是を活現せむと務むること、にあり。彼が扮する所の人物のしかく生氣の躍如たるものあるは、實に這般一捻の用意に存す。夫の所謂壯士俳優なるものは、自ら學問あり、識見ありと稱すと雖も、其の技、生吞活剝、見るに足らざるは、畢竟彼等が全然舞踊の素養に缺けるの弊に坐す。新藏は、身舊俳優の中に、籍すと雖も、我演劇の將來に於て、新舊二素を調和するに、尤も適當なる俳優にてあり。

しなり。

人或は彼の平生傲岸人に譲らざるを譲ると雖も、斯の如き個人に關する所の毀譽は、毫も舞臺上の市川新藏の價値を上下するの力あるものに非ず。今や一眼を亡ひて病痾の中に落魄する所の彼に向ては、社會はむしろ其の不遇薄倖の爲に一

滴憐愍の涙を、潸くべきに非ずや。

帝京の士民は、恐くは是より永く是俊髦を歌舞伎座の舞臺に見ること無かるべし。團洲は其繼續者を失ひ、社會は其慰藉者を失へり。新藏先に誤て其死を傳へらる。然れども、一個の游蕩兒岡本某は、今尚活けりと雖も、團門隨一の秀才市川新藏は、已に其社會的、生命を亡へるに非ずや。新藏の心事を想へば、吾等はうたゝ憫然の情に堪へざるなり。

（二十九年七月）

『今戸心中』と情死

人の人らしきは其情にあり。吾は情に殉ずるの人を見る毎に、感究まり意切なるの餘り、其最後の尤も人らしきを想はずむばあらず。

天にありては、星地にありては、花人にありては、愛。是れ世に、美はしきもの、最ならずや。あらゆる死は、美はしきなり。されども、吾は愛に忍び戀に憧れて自ら天命を裁する所謂情死なるもの、甚だ美はしきものなるを想ふ。

道徳家をして其の言はむと欲する所を言はしめよ。哲學者をして其の説かむと欲する所を説かしめよ。而かも吾は遂に人生の脆弱を認め、盡軀の染汚を救はむとする宗教家が現世の中に其身を容るゝ所無き是憐れなる犠牲の爲に、其最後の住居をすら拒まむとするの意を解する能はず。吾は脆弱有漏の人間として、情死に向て滿幅の同情を寄するものなり。 Das Leben ist der Güter Höchstes nicht (生命は持ち物の最高なるものに非ず)。是れ悲劇と共に情死が吾等に訓ゆる所の福音にあらずや。人は生さんが爲に生まれ來りたる者に非ず。何ぞ必ずしも坐して自然の死を待つを要せむ。幸福は概はれ希望は亡はれ愛去り春逝き光消え喜滅びて猶且生き得べしとする乎。悲哀落莫絶望暗黒の中にありて、高遠無限の天を仰がば、人の當に爲すべきもの唯一あらむのみ。人は善を爲さむが爲に生まれたり。生命の最高の寶ならざるを知らば、彼は當に死すべきに非ずや。

其の死するや、孤影相吊して慷慨劍に伏するに非ず、怨嗟煩悶の間に處して一死に逃避の途を得たるにあらざ、食なく、家無く、天涯に漂浪して秋風路頭に踣死するに非ず。青春の愛情に包まれ、蝶の輕翅に扇がれ、鳥啼蜂舞の間、鴛愛、鸞戀の男と女と、安車の中に相擁し、九穢五濁の世を離れて、悠々理想の天地に遊ぶ。是の如きものを情死となす。

死と言はゞ則ち死。而かも是れ最も幸なる死に非らずや

心を潜めて想へ。吾れ人は何が故に今日生きたる如く、明日も亦生きむと欲するぞ。何故に吾れ人は今日今時を以て直ちに死すべからずとなすか。是れ決して他の故あるに非ず、詮ずる所、吾れ人が今日愛し、且愛されし如く、明日も且愛し、愛せらるべき或物を有すればに非ずや。是の如きもの必ずしも一個の人たるを要せず、一頭の飼犬にても可なり、一枝の花にても可なり、兎にかく愛は吾れ人が生活の第一條件なり。人生を經營する所のもの、萬千不同、數ふるに日も亦盡さずと雖も、吾人は實に是の如くにして日又一日其生活を持續し居るものに非ずや。情死は死によりて生を得るものなり。常に、悲惨なるべき生活の最後をして

世に最も麗はしく、樂しきものと爲すものなり。忠、孝、節、義の死には、自ら人を強ひ且人に逼るものあり。情死は尤も自由の死なり、一度び現實の繫縛を擺脫し去れば、望春の如く、喜海の如し。他にも自らにも尤も樂しきはげに情死なり。情死は脆弱無力なる人間が、其精一なる情思と專念とによりて、如何に廣大なる力を有し得べきか、又如何に無量なる歡樂を享け得べきかを、吾等に示すものなり。情死は自力によりて、尙永遠の解脫を望み得べきを、吾等に示すものなり。

吾等豈情死を羨むるものならむや。唯是の如きものによりて、日常一般の理義を以て律すべからざるものあるを想ふのみ。あはれ詩人の好題目、小説、傳奇家の好資料、人情の全能を表はし、現空二面の世界を示すもの、何物かよく情死の如きを得べき。愛を説くものは、遂に情死に到らざるべからず。情死は此世に於ける最も大に、且最も終りなる愛の發現なればなり。巢林子は愛の詩人なりき。彼が情死の詩人たりしもの、素より當に然かあるべかりし也。

廣津柳浪子が『今戸心中』は情死を以て其の主題となすもの、其價值に至りては、江

湖已に定評あるを以て、吾等今茲に贅せず。只子が明治小説には未だ多く、否殆ど絶て其類を見ざりし、是好題目に向て率先其筆を染めたるの功は吾等が子に於て甚だ多とする所なり。

遮莫吾等は「今戸心中」を讀みて、大に遺憾に堪えざるものあり。あはれ、明治今日の小説家は青樓遊女の汚れたる愛情に於ての外は其情死の題目を求むると能はざるか。青樓何物ぞ、遊女何物ぞ。吾等は一般人間の不幸悲哀に對して一視同仁の博愛を托することの甚だ詩人らしきを想はざるに非ずと雖も、而かも吾等は、同時に詩人が其詩人たるの名譽と品位とを、保たむが爲に、當に有すべき見識と覺悟とあるべきを信ず。元祿時代にありては、社會的階級の境域頗る嚴密なりしが故に、楊臺狹斜の地を外にして、人情の痛激なる活動を實驗するとの甚だ難かりし事情ありしを以て、詩人の題目多く斯の如き社會に關せざりしは、寧ろ自らなる勞なりき。而かも吾等が社會的道德の卑陋に就て恨無き能はざるなり。明治の今日愛情の題目として尙且青樓遊女を要すと謂ふものあらば、吾等は獨り其責を社會に歸する能はず。更に「今戸心中」の如きものを作らむが爲には、其作者は如何の經

歴を閱せざるべからざるを想へば、吾等は、うたい當代作家たるの士君子にとりて甚だ困難なるべきを想はず。吾等は詩人の閱歴に就て云々することの批評家の務にあらざるを知る。而かも明治文壇の道義の爲に奕々の情に堪えざるものなり。

(二十九年八月)

能樂會

近時中等以上の社會に、謠曲及能樂に對する嗜好の増殖し來れるは、著しき事實なり。謠曲に關する議論、能樂に對する批評等は、數々府下の新誌上に散見する所又一部の學者、高等官吏は已に能樂會を組織して、斯道の盛運を助成するの企畫を成せりと云ふ。

國民の前進するや、常に回顧の眼を着けむことを要す。彼は其過去の中に、其未來を同化せざるべからざればなり。一家族が其祖先の遺典を存するが如く、國民も亦彼等の先世が今日に残したる遺物を保存せざるべからず。人は現在に於てのみ生活するものに非ざればなり。是を以て國民の完全なる幸福は、其國民が會

て歴史上に享有したるあらゆる事物の共存俱在を要求すべし。吾等が古物保存に對する意見は實に是義に胚胎す。

吾等は能樂會の諸氏が意見の存する所亦是の如くならむを望む。

能樂の性質

序に吾等をして能樂の性質に就て一言せしめよ。是れ將來の能樂者が當に執るべき方針に就て多少の裨益あらむを思へばなり。

演劇は其喜劇に於て殆ど全く現實の世界に密接し其悲喜劇及悲劇に於て漸く實際の生活と隔離す。是れ其劇の性質上當に然るべきものありて存するなり。而かも其科白裝飾衣裳等は常に其劇曲的性質の許す限りに於て成るべく現在の事物に近似せむことを務む。然れども能樂に到りては則ち大に是と趣を異にす。管に現實に近似せむことを務めざるのみならず徹頭徹尾一種理想の境域に行動し現實を以て毫も爲す所無し。其舞臺には一の裝飾なく其道具は單に符號のみ。人は喜怒其色を變せざる一定固着の假面を被り其の言ふや通例の言語を以てせ

ずして一種の歌謠を以てし其の動くや日常の起居に倣はずして一種の舞踊に依る。斯の如きは能樂の外観なり。

吾等は能樂を以て一種の理想化精しくは抽象理想化を受けたる演劇なりと謂はむ。其故如何に。

そも歌謠は吾人の情想を尤も明晰に且尤も有効に表はさむが爲に技術が音聲の上に製作したる一の方便なり。通常談話の得て表白すべからざる激越微妙の心事は實に是方法によりて能く聽者の感情を動かすを得るなり。是れ理想化されたる言語と謂ひ得べし。假面は吾人が善惡賢愚等の性質を固定的に表はしたるもの通常の顔容に於けるが如く自在の變化を闕くと雖も其人の心性原態の如何を發露して尤も明晰なり。是れ亦理想化されたる顔面と謂ひ得べし。舞踏も亦人の行止をして尤も明白に符號的に其性行意志を發揮せしむるもの。是れやがて理想化されたる動作に非ずや。其他舞臺上のあらゆるもの皆然り。能樂は是の如き言語顔容行止舞臺によりて組織せらるゝものは是れ即ち一種理想化されたる演劇に非ずや。吾等は吾國の能樂が猿頭蛇足の怪獸的改革の累す所とな

らずして、其の純粹なる理想的状態に於て能く各部の一致を保ち得たるを喜ぶ。さはれ、是の如き種類の劇(吾等は系統上能樂を以て一種の劇なりとなす)は、人生の如何なる状態を表象するに適當すべきか。是れ吾等の一考を要する所なりとす。

歌謠を以て言語となし、舞踊を以て動作となすものに向て、吾人の同感を寄せむが爲には、吾等は想像の翼に駕し、人生以外の生活に其心情を接着せざるべからず。俗界のあらゆる錙鐵鎖尾より吾等の心を抜き、簡淨醇粹なる一種の世界に其身を處かざるべからず。そこには靈界の見得べきこと、猶現世の觸れ得べきが如く、感情意となり、直觀智となり、あらゆる權數、詐術、僞貌の痕跡を止めず、幽現、二面の世界をして渾然として茲に融會せしめざるべからず。是故に能樂の形式たる素と神祕的事物を包容し表彰するに適す。吾邦の謠曲が多く、佛教的精神を通して、幽明兩界の關聯を表はせしもの多きは尤も能樂の躰を得たるものなり。想ふに我邦の能樂は猶歐洲に於ける樂劇の如きか。觀聽するもの感激し、神集まり、靈躰やふやく一致し、形神やうやく交はり、恍然、嗒然、身は限なき空想の世界に導かるゝに至

りて、現實の規束は氷の如く解け去り、心は理想の洗禮を受けて、一種空靈の世界に往住す。是の如きは普通の劇が企て及び難きものにして、獨り能樂と樂劇の吾等に被らするの感化なりとす。吾等は是點に於てたしかに能樂の價値を認む。希くは事に能樂に従ふもの、漫然時流に累はされて、是の貴むべき精神を誤ることを勿れ。能樂は須らく保存すべし、猥りに進歩せしむべからず。吾等は古來の遺型を株守せるの能樂は、何れの時代に於ても、高尚なる嗜好を有する多少の翫賞者を有するを失はざるべきを信ず。

(二十九年八月)

脚本の批評法

吾等今の文壇の注意を促さむと欲するは脚本の批評法是なり。批評法と云ふと雖も、逐條其方法を述べむとは非ず。我批評家の一般に注意せざる一事を擧げて、其省思を煩はさむとするのみ。

戯曲脚本は何故に他の詩歌と志かく其形式を殊にするか。我脚本批評家は多くは一問に答ふることを逸せるなからむや。

戯曲脚本の目的は美術の一科として毫も叙事詩若くは抒情詩等のそれと異なる所無きなり。あらゆる美術の目的は其視點の異なるに隨て種々に解釋し得べしと雖も尤も廣き意味に於ては所詮美の感覺直觀的表象 (sinnlich-anschauliche Darstellung des Schönen) と謂ひ得べし。是目的より見る時は戯曲脚本は尤も進歩せる詩なりと謂ひ得べし。

何を以て是を言ふ。叙事詩及抒情詩にありては其表象の手段は主として言語なり。已に言語を以て其表象の手段となす故に其主觀の側に於て感覺し寫象し想念する所のものは主として時間的なり故に單に實在の一面を表象し得るに止まる。已に實在の一面を表象し得るに止まる故に其美に對する發現の方式分量等も亦自ら一面に偏依するを免れず。是を戯曲が演劇の幫助によりて吾人の前に呈露する所の審美的結果に比すれば其種類分量の多少明暗言はずして明なり。若し一事物の批評は其事物が目的とする所の全き意義と全き結果とに就きて立言することによりて初めて公正なる判断を下し得べしとせば猶歌曲の伴へる抒情詩を評するに當りて其歌曲をも併せ考ふるの必要あるが如く戯曲脚本の批

評はそが實際舞臺上に演出せらるべき時當に觀者に及ぼすべき全結果に就て商量する所無かるべからざるに非ずや。故に猶歌曲ある抒情詩の批評家には一般歌曲に就ての知識を要するが如く戯曲脚本の批評家にして其職責を全くせむと欲せば詩學美學の知識の外に演劇としての舞臺的結果に就て多少の知識を有せむことを必とすべきに非ずや。

もとより世には單に机上に朗讀せらるるを目的とせる所謂朗讀戯曲なるものあり。是場合に於ては批評家は其舞臺上の全結果を豫想するを須むずと雖も少くとも其科白に就ては默讀以外に於て注意酌量する所無かるべからず。而かも科白とは少くとも現今吾邦の場合にては實際生活とは多少相異なれ舞臺的事情に關聯して初めて其効果を有するもの故に戯曲脚本の批評家は何れの途演劇の實際に就て多少の知識を有せざるべからず。

單に小説傳奇を讀むの覺悟を以て戯曲脚本に臨むものあらば其人は決して是戯曲脚本の真相及眞價を認了し得ざるべし。知らず今の批評家の幾人か果して是覺悟あるべきや。

田山花袋の『わすれ水』

『國民の友』夏季附録は中に三篇の小説を輯む。田山花袋の『わすれ水』を以て壓巻となす。

蓋し『わすれ水』は嘗に國民の友夏季附録の壓巻たるのみならず、嘗に已に公にせられたる花袋の作中に於て最も優等なるもの、一なるのみならず、亦近時發行の群小説中に於て屈指の一たるを失はざるべし。

其人物や單に二人のみ。其場所や、只狹隘なる山村水郭のみ。其筋を言へば只一片相思の愛情あるのみ。然れども人を動かすには、必ずしも事の多きを須むず、必ずしも言の繁きを要せず。人生至深の情趣は、往々只胸臆最後の琴線に觸るゝことによりて解せられ得べきものあり。短篇小説の作家として花袋は實に是訣を解したるものに非ずや。『わすれ水』の一篇讀み了れば、涙滂沱として吾面を沾し、われは卷を掩て暫く仰ぎ見ること能はざりき。

初めわれ青松を追て水涯にさまよひ、白雲に伴はれて山巔にあそべり。自然の

樂は清風朗月と共に悠々として盡くる所を知らず。あるは水冷かに蔭綠なるほとり、一卷會心の詩集を繕て天地の間に放吟するが如く、あるは夜明に星稀なる時、片舟湖心に棹して、斷琴の友と囁くが如く、心のどかに意胖かなること、さながら、閑雲孤鶴にもくらぶべかりき。中ごろはわが心あやしき夢に壓はれし如く、言ひ難き一團の情火吾が胸に燃えひろがりて、吾れはこゝに吾が心の平和を失ひぬ。苦しきに非ず、悲しきにも非ず、されど譬へば秋風蘆葉に戰ぎて、孤月中天にさやかなる夕、一道の笛聲天涯の羈客を動かすが如く、又は五更夢さめて、孤燈隻影を弔ふの時、落寞寂靜の氣、冉冉として吾が心を壓し、情迫り感塞りて、覺えず顔を掩ふが如く、吾が心あやしう動きはては、涙潸然として零つるを忍ぶ能はざりき。終に及びては、陰雲中天にかゝり、希望の星影やうやく其光を失ひて、遂に黒闇の中に埋没し去るが如く、又は急霰亂雨、關春の芳を散して、殘紅瘦蝶飛て行く所を知らざるが如く、吾が心人生の悲運に打たれ、心事のいたく違ふを悲みて、俯仰感愴、慟して又哭せむとの思ありき。

是れわれ等が『わすれ水』を讀みゆける時の感情なり。われは滿幅の同情を捧げ

て是の可憐なる無韻の抒情詩に寄するものなり。
 乞ふ、われ等をして先づ其大幹の次第を叙べしめよ。
 木崎鐘一と云へる容貌秀麗の青年詩人は、さる地方の中學教師に聘せられぬ。
 山川風色、田園の閑居共にいたく彼が詩情に協ひて彼は平穩なる自然の中に樂し
 き月日を送り居たり。

間もなく彼は一の戀人を見出せり、そは禮子と呼ばれる十七歳の少女にして、其
 地の財産家なる矢貝なにかしの娘なり。山を愛で、水を賞したる彼れは、今は人間
 の戀てふものによりて心を悩ますの身となりぬ。されど言寄る術もあらなくに
 よりてもあはぬ片糸の合ひがたき身を啣ちつゝ、好き機會も待ち居しが、年はく
 れ、雪は消え、花草は萌え、花さへも散りかけしに、よき機會とては遂に來らて已みぬ。
 とかくする中、彼は家の務めの已みがたきありて、永く其地を去らざるべからざる
 の場合となりぬ。心狂はむまでに戀ひ忍びたる少女には、わが赤心の片影だに明
 かし得て、長へに相別れざるべからざる場合とはなりぬ。鐘一は「いたく熱したる
 さまにて身を起し、語らねばならず、語らねばならず」と、旋風の回轉するが如く、思立

ちたるが今は早や平生の嗜み深き心をも忘れ果てたるなるべし、其まゝ戶外に走
 り出てぬ。』

烟の如き春雨を衝きて、鐘一は少女の家の方に急ぎぬ。彼れは、今や情熱し、心狂
 ひて「その少女の姿だに見えなば、一散にかけ寄りて、藻掻くをも、かまはず、かき抱き
 てわがこの心を、残る所無く、打明けむと思ひけるなり。かくて少女の家の裏門に
 立つくしたる彼は、少女が姿をば見ずして、只其指先に弾かれたる妙なる琴の音に
 聞きとれぬ。

琴の音は熱したる情をなだめ、狂ひたる心を鎮めて、跡には悲しき涙のみぞ溢れ
 たる。鐘一は無限無量の感慨を胸一つにつゝみて、力なく、其家に歸りぬ。
 あくる朝、運命は彼れを、驅りて、永く少女と、彼れの間を、隔てぬ。

京に歸りて妻を迎へしが、氣合はずして別れぬ。母も此世を去りて、今は是身を
 累はすものもなし。鐘一は別れ去りてより二十年の間、片時と忘るゝことなきか
 の地の天然を見ばやと思ひ立ちぬ。なつかしき戀しき、かつて狂はむまでに憧れ
 てし、まことの愛は今も尙すこしも渝らざる、かの少女をも見むとてなり。

一弊簀、一破笠、雨に臥し、露に宿り、失はれたる戀の想に二十年の月日を泣きくらしたる憐れなる多恨の詩人は、くれゆく秋の風、尾花が末を吹わたる頃、かの里にたどり着きぬ。山の容、水の姿、昔のさまにかはらねども、ありし家は跡だに無し。人に聞けば、かの少女の家は、夙に其産を失ひしのみならず、渠女は思はぬ人に嫁ぐべく強いられて、今は又其夫にさへ見捨てられ、遠く村端に別れ居るなりと。鐘一は泣きぬ。

日暮秋風、かれは悄然として、渡頭に泣きぬ。「同じ船に、みにくからぬ、中年の婦人ありて、木崎様に、てお在さずやといふ。」その誰なるかを、知りし時の、かれの驚愕は、まことに譬ふるに物なかりき。戀しきかの少女の君にてありたれば、あはれ少女は、鐘一が少女を戀ひ焦れたるが如く、亦鐘一を戀ひ焦れ居たるなりけり。無慈悲、殘忍、酷薄なる運命は、二十年の久しき間、二人の愛情をばかくまでなぶり弄びしにも飽き足らず、今や相語り相抱くの機會を得せしめ、更に其の無益なる悲泣と、涕涙とを弄ばむとす。悲しき者は世なりけり。哀しきものは人なりけり。さながら、老蝶、秋にやせて、空しく、衰殘の黄花を擁するが如く、世にも憐れなる二

人は、世に背き、人に離れ、人生最後の幸福をば返へしがたき昔の記憶の中に見出さむとしたり。かくて、かれ等は、悲哀、絶望、斷腸の中に、僅に其の満足を求めたり。其の終りの談話は、まことにさく人の腸を九回せしむ。

何故に打明けては下されざりしと、お禮は言葉を重ねて極めて悲し氣なる顔色を爲しぬ。男は、覺然として、溢出づる涙を揮ひしが、おのれの君に告げざりしは、君の我に告げ得ざりし如く、極めて美しき戀にてありたるが故ぞといふや、否、女はいたく泣きて、君もまたしと思ひたまひしか。否、それのみに、あらず、御身の其心を知らざりしかりにて、おのれいこの一生を如何に暮なく如何に情なく過したるか、知れぬものなと、詳しくその一伍一什を語りしに、あゝ君も亦然なりしかとお禮は、打伏になりて、聲を擧て泣きぬ。今は堪え難くなりたるなるべし。されど、今宵はとやがて涙を秋、歡けて、絶々に、お禮は、又いふ、今宵は何といふ、嬉しき夜ぞ。君に此心を語り得し、日に、眼なく、嬉しと思ひしに、君の其心をさへ聞くことを得たるは、如何ばかり嬉しき事に候ふべき。妾はこの心を君に語り得ず、に一生涯を終るには、あらずやと、幾度悲みしかし、れぬ身なればと、又泣く。鐘一も、溢れ出づる涙を支ゆる事

能はざりき。

是れ『わすれ水』が吾人に語る所の大躰なり。

鐘一がお禮を戀ひ、お禮が鐘一を慕ふに到りし、因縁の淺きを咎むる勿れ。吾等の何人が戀てふもの、成立をば全く外部の事情によりて説明し得べしとするか。悲風慘雨、二十年の世路を閲盡して、尙青春の愛を渝へざるもの、眞に戀するもの、事情にあらずや。戀は尙電火の如きなり。吾等は其の由て來る所以を知らず、只其の現に然る所を認め得るのみ。

さはれ、是篇の表はす處は戀と云はむよりは、むしろ戀てふもの、人生に於ける運命の果敢なきことにあらずや。思へば、相思ひ、相慕ひて、遂に、一度も其志を告ぐるに由なく、楚雲、湘水、長く相別れて、天涯に放浪し、中夜人無き處、空しく往事を追懐して、世事の意の如くならざるを、悲むもの、果して幾、何ぞや。われ等の世に尤も悲しきは、語らでず、戀ならずや。生ける間は影の如く心を苦め、はては吾が汚れたる骸と共に、墓門の中に葬り了るに至りては、何物の悲哀か、是に如くなるべき。『わすれ水』はまことに人生至深の悲哀を歌ひたるものと謂ふべきなり。

今の小説愛を説くもの多し、われ等は其の淺きを惜まずして、其の清からざるを恨む。戀の清きものは世に尤も美はしきものの清きなり。澆季浮薄の塵の世に、名の爲に動かさず、利の爲めに走らず、つれなき運命の風波に揺られつゝ、身を以て其の清き愛情に殉ずるもの、いたりては、われ等は是を高しと言はず、又大なりと言はず、只其の甚だ美はしきを認めずばならず。あゝ美なる自然に圍まれて、人は獨り何ゆゑに醜なりや。『わすれ水』はたしかに愛情の福音を傳ふるものなり。

『わすれ水』は小説と言はむよりは、むしろ無律の抒情詩なり。美はしき自然の中に包まれたる、美はしき自然の子が、其生命もて織り成せるきぬの美はしきよ。われらと共に、花袋子が是篇に向て、滿幅の同情を表するもの、果して何人ぞや。

(二十九年九月)

第二期

明治三十年六月より
明治三十三年七月まで

我邦現今の文藝界に於ける批評家の本務

去ぬる年の九月、吾れ故ありて帝城を離れしこのかた文壇に負きしこと半歳餘
今や事志と違ひ、桑蔭の居久しきを得ず、茲に再び評論の筆を執りて讀者と相見ゆ
るの機を得たるは、吾が深く喜びとする所なり。

文藝批評のこと、豈言ひ易からむや。吾れ常に以爲らく、人文の進歩は批評の必
要を増し來る。社會萬般の變化につれて、思想感情亦漸く複雑となるに隨ひ、三世
を通じて一軌の渝らざるを求め、時尙日に新に衰、月々に革まるが中に、大勢推移の
跡を究めて世をして向背に惑はざらしむる所以のもの、是れ豈文藝批評家の務め
にあらずや。世は人を造り、人は又世を造る。理を以て事を律するの偏よれるは、
猶事によりて理を曲ぐるの正しからざるに均し。具に内外受發の趣を察して、一
は以て作家を戒勸し、一は以て時尙を提撕し、ともに、其の一大理想と立する所
に向て、不退轉の精進を勵まむこと、是れ豈文藝批評家の務めにあらずや。今や世
界のもろくの邦國は、既に其の精神的城壘を撤して、人文渾融の途漸く拓けたり。

人道の名の下に、科學、宗教、文學等の一切の文物は、方に其の世界的大同盟を組織するの機に迫りたり。同と異と素より相容れず、逼と殊と亦其の堂を同うするを望むべからずと雖も、彼此交通の結果、一國文化の上に表はれたるもの偉大ならずと謂ふべからず。是時に當りて人文相關の理を認めて治く世界文化の大勢を達觀し、こゝに國民的見地に據りて一國の文藝を批判する。是れはた文藝批評家の務めに非ずや。文藝批評のこと豈それ言ひ易からむや。

吾れを以て之を見れば、文藝批評の必要は蓋し今日より大なるは無し。明治維新このかた、歳を経しこと既に三十、而かも大東帝國の文學は未だ其の國民的立脚地を占むるの勢に達せざるなり。極まれば變じ、屈すれば伸び、局面常無く、行止定まらず。是れ一は素より外來勢力の頻繁多様なるに依るべしと雖も、そも一國の特質未だ萬殊の事物に對して、撰擇同化の活力を得るに至らざればなり。數年以來、殊に王師西に動きて暴清膝を屈してより、國民的意識漸く其の中正の發達を爲しそめたりと雖も、文藝の世界には尙頑迷の徒少からず。國民性情の如何を顧みず、偏見私好にまかせて、他の宏壯幽玄を稱ふるを事とするものあり。古を

尙び、今を卑め、ひたすら摸倣擬似を務めて、進歩の風潮を沮遏せんとするものあり。狹隘なる自家の閱歷を臚列して、以て寫實の旨を得たりと爲すものあり。世に離るゝを以て高しとするものあり。人を刺るを以て賢しとするものあり。幾多の識見無き小批評家は、幾多の識見なき小文學者と相提携して、益々として盲動するもの、實に今日文壇の現状に非ずや。素より高才達識の一世の師表と仰ぐべきもの無きに非ず、而かも尊大自重して、輕々しく衆俗を以て事とせざるや、われ寧ろ其の出處に就て恨無き能はず。あはれ、國民的立脚地に據りて、衆愚の紛々たるを打破し、公平なる比較的、はた含蓄的批判によりて、國民文學の旗幟を明かにする。是れ豈今日文藝批評家が最大本務に非ずや。

われの淺才薄識なる。豈是の如き任に當り得べしと謂はむや。唯獨逸國民文學の根據の確立は、實にレッシングが文藝批評に負ふ所少からざるを思慕して、敢て當代批評家の三省を求めたるのみ。

さるにても、當代批評家の文藝社會に於ける位置、及勢力の如何は、吾れをしてうたた浩嘆に堪えざらしむ。吾が觀る所にして、甚しく謬らずむば、世は文藝進歩の

保姆たる批評家の尊敬すべく感謝すべきものなるを忘れて却て彼等を輕蔑し憎惡せむとするならずや。是れ一は社會が批評の何物たるを辨知せず亦其の職能の効果を認識するを欲せざるの致す所ならむと雖も主として所謂批評家其人の無能無識なるに由らずむばならず。彼等の爲す所を見るに其の限界の偏狭にして識見の陋劣なる其の歴史的はた比較的知識に乏しき精微なる審美的知識及び賞鑑力を缺けるはた又國民性情を蔑視せる何れか今日の所謂批評家が通弊にあらずとする。己を持する斯の如くにして尙他の己を待つに至らざるを咎む其の痴寧ろ及び難からずや。

吾れを以て漫に他を刺るものとなす勿れ。見よ今日の所謂批評家が事とする所は小説に非ざれば新詩なり。一作出て一篇顯はるゝ毎に争ひとりて自家評論の資に充つること猶ほ餓虎の肉を争ふが如し。ひろく人文進歩の過程に鑑み一國文藝の由來する所に至りては茫乎として知る所少し。吾れは思ふあらゆる學藝文物は素是れ一體なり。偏に小説詩歌の一面を見て而して社會人心の推移を思はずむば其の説くところ争てか其の依る所を審にするを得べき。其の依

る所にして審ならずむば來によりて往を察する批評家が戒勸の旨義はそれ何んによりてか到達するを得べき。批評には回顧と共に希望を要し解析と共に綜合を要し説明と共に忠告を要す。是の如きは濶達なる文歴的觀察の下に於て初めて爲し得べきなり。新作出づるを待ちて徒に衆俗に和して漫然贊否の私見を闘はし而して其の餘を知らざるが如き寧ろ兒戯に類せずや。

精緻且確實なる審美學の知識は藝術批判の規準なり。蓋し美學なるものは素と吾人が審美的意識を説明する系統的知識にして三千年の歴史に於て人類の到達したる思想の最高産物の一なり。其の説くところ所生國民の性質に従ひて各々其の色彩を異にするものありと雖も其の原理にいたりては素平等遍通の性質を有するものなり。藝術批判の規準とすべきものは是を外にして何くにか求むべき。而かも美學は之を演繹的に説明する時は純理哲學の根據を要し之を歸納的に解釋する時は實驗科學の研鑽を必とす。若し夫れ其の發達進歩の跡に依傍して當來の趨勢を明にせむと欲せば是れはた純然たる人文の歴史に基かざる可らず。美學の事甚だ言ひ易からざるなり。且や其の説く所はた其の説く所に取る

べき所は平等なり、抽象なり。苟も藝術批判に應用して其の謬無からむを望まば、國民性情の特色に本ける歴史的研究に依りて、審に差等圓融の理を考へざるべからず。あはれ、今の批評家と稱するもの、果して這般の覺悟を有するありや。彼等の美學を論ずるもの、多くは徒に諸種の術語學語を挟みて、幽邃精緻を衒ふもの、所謂鬼臉を被りて稚兒を威すものに非ずや。美とは何ぞや。是れ美學全體を包含する一大疑問なり。今の大胆なる批評家は一言決し去りて快刀亂麻を斷つる概あり。而かも彼等の中自ら顧みて、自家美學の系統を擧げて、個中の數語より演繹し得べしと信ずるものあるか。斯の如き疑問に對して、慎重なる學者は常に斯の如き覺悟あらむを要す。今の批評家の多くは、自家素一定の所信なく、時に隨ひて漫に先人の所説を踏襲し、若くは恣に杜撰の臆説を捏造し、以て刻下の私心を立するの料に資するものにあらずや。吾れは是の如き似而非美學を喋々するものよりは、むしろ穩健なる常識に率由するの遙に安全にして且穩當なるを擇ぶ。

且夫れ、美學は哲學的思索力と美術的賞鑑力と、兩々相待ちて初めて、其の十全の研究を期すべきもの。彼に長じて此に短なるものは、冷淡なる理論家として、鑷解

銖拆の工を盡し得べきも、熱情ある嘆美者として、綜合渾化せる審美的意識を形成すること能はじ。學理は能く形式的に審美的意識の成立に對する、主客内外の規定を釋く。而かも審美的意識其物は直觀綜合の結果として、犀利鋭敏なる賞鑑力を待て初めて、其の實質を了することを得べし。是故に美學研究者は分拆と共に綜合を能くし、思索と共に直觀を能くし、批評と共に嘆美を能くせざるべからず。而かも是の二つのものは其の性質上、一個人の心性に於て兩立し難きを常とするもの、吾れは是に於て、美學の事、ま、言ひ難きを知る。今の紛々、美學を口にするもの、如き識者よりして之を觀れば、突飛無謀寧ろ憫殺すべきものならずや。世界的知識の缺乏が我が批評家をして公正かる比較研究に勝えざらしめたる。是れはた争ふべからざる事實なり。今や世界の思潮は我が邦に集注せり。人文の歴史は今や世界を通じて一團となれり。吾人は須らく世界大の眼光を破して、我が國民文學の位置及び天職を覺悟するの機會に臨めり。比較研究は實に是の目的を達するの鍵鑰なり。

然れども漫に比較と言ふ勿れ。比較とは以て比較せらるべき所のものを預想

することゝを忘るべからず。何にぞや。國民文學是れなり。國民文學とは何ぞや。國民性情に基ける文學即ち是れ。

吾れは我が批評家の國民性情を蔑視するを以て其の最大缺點の一なりと思惟す。吾が信する所によれば各國民族は各々其の完全なる發達によりて當に到着すべき殊特なる理想を有す。所謂る具體一元的發達は萬有の一體として國民の間に於ても亦然かあるべきを信す。是れはた歴史的研究上争ふべからざるの眞理なるに似たり。是故に吾れは想ふ先づ國民の性情に鞏固なる根據を與へ以てそが外來勢力に對する同化の活力を熾盛にし更に其の性の近き所に遵ひて補助成の效を累ぬれば庶幾くは最も有功にして且最も多望なる發達を見るを得む。是の如きは一國民が世界人文の過程に貢獻する最大なる効果ならずばあらず。是を以て文藝批評家が第一の本務は審に國民の性情を理解するにあり。比較と云ひ取捨と云ひ折衷と云ひ調和と云ふもの國民性情を外にすれば全然無意義の文字ならむのみ。國民文學の完成を企圖するの批評家が立言の地は須らく茲に存せざるべからず。

吾れは疑ふ今日の文藝批評家の多くは果して是の覺悟を有するか。彼等がゾルミキを説き、ダンテ、ミルトン、ゲーテを説き、ブラウニング、ロセッチを説き、古代希臘を説き、中古羅馬を説き、嘆美、艶羨、日を盡して足らざるもの、果して是の覺悟を有するか。吾れは一人の翫賞する所に向て容吻するの權利なし。唯文藝批評家として國民文學の進歩を事とするもの、當に是の如き覺悟無かるべからざるを想ふのみ。

上來説く所は素陳套殊に言ふに足らざるなり。吾れ今日我批評家の爲に之を説く、世人或は吾れの迂を笑はむも、識者はむしろ吾をして是の如き陳言を反覆せしめたる所以を悲まむ。吾れ豈に辯を好むものならむや。

當代批評家の多くのもの、不能無識は尙是に盡きざるなり。夫の二三倫黨の消息を掲げて互に賛同阿附を事とするもの、褒貶の利器を把持するを恃みて、私己の恩怨に報ふるもの、他と論戰して辭屈し、筆窘むや、當面又堂々の陣を張らず、陰に托すべきの機ある毎に冷笑暗罵を以て置に慰むるものは、た又誹毀讒謗を以て痛快とするの俗尙に投じて、鄙俚聞くに堪えざる言語を列ね、偶々士君子の一瞬に資す

るに過ぎざるを覺らざるもの、是等は多く言ふに足らざるなり。若し夫れ一人にして、數雜誌、若くは數新聞に筆を執り、甲雜誌の紙上に掲ぐる所は、乙雜誌の紙上に之に賛同し、丙紙上に説くところにして、他の駁撃に遇へば、則ち丁紙上に於て之を反駁し、以て他人期せずして之を辯護するの狀に擬し、嗚呼、相呼應して輿論と稱し、公議と唱ふるもの、其の實一人の筆に成るが如き所謂「掛持記者」の徒に至りては、吾れ實に言ふに忍びざるなり。是れ人を欺き世を陥るゝ好個文壇の詐欺師、破廉耻、沒道義の小人、素より多く齒牙にかくるに足らずと雖も、是の如き鼠輩の尙ほ批評家の假面を被りて、文壇の一隅に存在するに至りては、吾れは寧ろ我が文藝の社會に於ける道徳的制裁の薄弱、緩漫なるに恨み無き能はず。

さはれ、吾れは是の如き群小「批評家」を以て毫も爲す無きなり。一國文藝の發達に於ける批評家の責任や、極めて重極めて大。吾れ不敏なりと雖も、いさゝか自家の職責に顧みて多少の懷抱無からむや。吾れや才短く時に疎しと雖も、分に應じて責を知るに於て多く人後に落ちざらむを期す。吾れの樸樵の器を挾みて私かに孤負するところ唯是れのみ。

吾れは又文藝批評の眞價未だ多く我社會に知られざるを恨とす。吾れは以爲らく創作と批評とは兩々相並びて初めて其の完美の域に達し得べしと。難ずるもの或は言はむ、ベリクレース時代の雅典、エリサベス王朝の英吉利には批評無かりきと。是れ時勢を知らざるの説、歴史は正に是輩の蒙を啓かむが爲に其の誨を垂れつゝあるを見ずや。そも、文藝は一代思想の高潮に駕するに非ざれば、能く民衆の希望を繋ぎ、感情を慰めて、其の久きに耐ゆること能はじ。是を以て人文漸く進みて思想亦漸く複雑となるにつれ、文藝も亦た漸く其の面目を渝ふる、是れ亦ちのづからなる勢ならむ。古の詩人は世を觀じ、勢を察すること、甚だ力むるを要せざりき。そは社會の組織單純にして、一代の思潮亦甚だ觀易きものありければなり。今の作者は則ち然るべからざるなり。人生世態の錯雜糾紛を究めたるや、幾千年の歴史的發達を一面の現實にたゞみ、著落離合の跡容易に了知すべからず。古の詩人が幼稚なる直觀と、貧少なる閱歷に、憑據して社會の眞相を描破せむと擬す、其の無謀、寧ろ憫笑に堪えざらむや。まことや、詩人小説家の想を着くるや、素綜合を尙ひ、直觀を旨とす。然れども猶吾等の精神に於て、有意識の狀態は、無

意識の狀態を所依とするが如く、是の如き直観綜合は其の根據を精緻確實なる客観的觀察の中に有せざるべからず。然らざれば其の描くところはた其の唱ふ所自家の私情に本くもの多くして平等遍通の旨趣に於て缺くるところ少からざらむ。是故に今の作者は古の詩人と異なり。自家固有の熱情直観にのみ依頼せず、深く人生の實相を了知せむが爲には、進みて批評的眼孔を以て社會の事物を考察し、歴史的見地に立ちて當代思想の趨勢を思索せむことを要す。然らざれば一世の希望感情を發揮せむこと思ひもよらざるなり。

是時に當り、作者に向ひて最も聰明なる讀者を代表して、一代社會の精神を告白し、國民の性情に順ひて其の文藝の理想的圓滿に到達するの前程を啓示せむと務むるもの、是れ即ち文藝批評家なり。蓋し批評的觀察の作者に必要なこと、已に説ける如しと雖も、天才と思辯と素兩立し難きふし多し。且や一氣の神來に觸れて直情揮灑の靈筆を鼓するの瞬間は、多く靜穩なる心狀を離れて、動もすれば夢幻の境に徃往す。細心枯淡を旨とする批評的能力と、柄鑿相容れざるものあり。文藝批評家の本務は、是の缺陷を補充し、放埒なる作者をして、常に反省顧慮する所、あ

らいひるにあり。

既に時代と作者との間に受發の關係の成立せるありとせむか、批評家は更に一步をすゝめ、一世の好尚を率ゐて當に向て進むべき所の理想を啓示せざるべからず。所謂の一代思想の高潮とは、是の如き理想の全體に外ならず。夫の天才なるものは、畢竟是の理想を摸捉し、素象するの技工に於て、天稟の奇才を有するもの。若し夫れ是の如き理想を修養し、供給するは、主として文藝批評家の本務たり。

吾れはほゞ上の如き覺悟を以て評論の筆を執らむと欲す。行藏大に失して才識之に伴はず。實際と希望と或は相違ふものあらむも知るべからずと雖も、そは預め吾れの問ふべき所にあらざらむ。吾れもと文筆に嫻はず、婉言微辭は其の尤も拙なしとするところ。是を以て先には罪を我が敬畏せる諸先輩に得て、深く自ら慚悔する所あり。今や奕々として其の過を再びするあらむを恐る。然りと雖も、理は遂に曲ぐべからず、天下の理にして一人の理に非ざればなり。理の存する所は、千萬人之を沮むも吾れ徃かむ理の存せざるところは、千萬人之を勸むるも吾れ徃かじ。吾れは遂に夫の區々の私情に泥みて公明の争を爲す能はざる膽大豆

の如き輩に同ずべき所以を知らざるなり。
 吾等か燕言を陳べて發道の辭となす。

〔明治六年〕

明治の小説

第一 序 論

題して明治の小説と云ふと雖も明治の小説歴史を述ぶるは吾等の志に非ず。そは今日尙ほ未だ其時に達せざるを想へばなり。

蓋し世の歴史の過程ほど知り難きは有らじ。表面より是を觀れば、往來消長の跡簡明にして自ら秩序あり、強ち籀朱の分解を要せざるが如きものと雖も、其裡面に入りて備に其由來を尋ぬるものは、誰か筆を抛ちて望洋の嘆無からむや。げに社會は一大活物なり。個人下において之が基礎を成し、國家上に在りて之を統牽し、上下を通じて幾十層、各々其品を異にし、其性を別つ。若し夫れ其共同の生存を經營し、一致の幸福を維持する所以の因縁に至りては、遠くは民族の殊性、國土の情狀に關し、邇くは隨時偶然の事跡に係るもの、素より名譽すべからず。其間内外諸般の勢力相、交錯し、同異相離合し、差等相渾融し、前後に嗚呼するもの上下に引接するもの、左支右吾、一昂一低、茲に燦然たる歴史の織文を經緯するに至る。既に成

れるものを取りて是を觀れば黃紫の著落井然として一絲亂れず然れども其の成る所以の理に到りては梭を投ずるものと雖も未だ甚だ知り易しとせず。況むや傍觀者を於てをや。

歴史の言ひ難き理未だ茲に盡きず。是を過去に徵するに、人文の過程は猶海波の搖蕩して進むが如し。數十年若くは數百年にして其形勢を一變して所謂「時期」なるものを成すこと、猶彼の海水の一波又一波、進行の節に應じて其高低を更むるが如し。故に歴史は其「時期」に於て小紀元を劃す。當代の事實は一契點に至りて初めて其説明を求め得べしとなす。是を以て史家は其筆を執るに先ち其の將に説明せむとする所の事實の後にありて、是の如き契點の明に指摘し得べきものあることを確認せざるべからず。然らざれば彼は單に之を記述し得るも、決して之を説明することを得べからざらむ。然らば則ち吾等は如何にして是契點即ち所謂「時期」なるものを知り得べきか。

若し歴史にして果してジッソンが所謂反動の理によりて進行するものならむには、所謂時期は其兩極端なりと見るべからむ。然れども歴史の擺動には素一定

の限界無し。海波の峯頭が一波徑の長短を以て預め測知し得べきが如きものに非ず。彼の文藝復興と云ひ、宗教革命と云ふが如き當代精神の大運動はた大昂揚にありては、何人も直に其歴史の意義の重大なるを認ることを誤らざるべしと雖も、其時代の真相をして較著ならしむべき事情の未だ全く經過し了らざる時に當りては、何人の炯眼か能く其歴史的「時期」なると然らざるとを看破し得べき。過ぎ去りたる幾世に比して、殊に注意するの價值無きが如き時代も、將に來らむとする幾世を待て初めて、非常の關係を人文の全過程に有するに至るもの無しとせず。而して是の如き「幾世」の果して經過し了りたるや否やは、絶世の豫言者の史眼を有するものに非ざるよりは誰か之を能くせむや。

吾等は文明史を愛す。殊に形式に於て獨逸の所謂理想派史家の論述に於て取る所甚だ多し。そは史的事實の説明は完全なる演繹法によりて、初めて爲さるべきものなるを信ずればなり。然れども這般の事實に於て確實なる根據を有するなからむか、理想派史家と雖も如何にして安じて其大前提に依傍することを得べきぞ。吾等は貧少なる客觀的事實に基きて、妙巧なる一部の史論を草することの

甚だ容易なることを思はざるに非ず。唯是の如き歴史の、自家の哲學主義の説明に終ること、猶ヘーゲル一輩に見るが如きことあらむを憂ふるのみ。

さはれ、吾等は茲に歴史を論ずるものにあらず。唯明治小説の歴史は是の如き事情によりて其完成を今日に期すべからざることを讀者に告ぐるを以て足れりとせむ。

然れども、よし三世を貫きて其歴史的意義を究むること能はずとするも、明治の聖世は年を経ること茲に三十、小説文學亦多少の變遷無しとせむや。吾等は將來に於て如何の位置を有すべきかを知る能はずと雖も、過去の歴史が如何に當代の文學に影響せしか、内外の時勢と共に推移したる國民の思想の反映として、我文學殊に小説は隨時如何の態度を取りたるか。保守の反動と進歩の趨勢とは政治、宗教、哲學のそれと同じく、小説の世界に於ても亦如何に相拮抗、消長したるか。此等の問題に向ひてはさすがに説明の途無きに非ず。吾等が本論を草するは、唯這般の經過に對して大體の所見を誌し、かねて他日明治文學史を完成するもの、參考に資せむと欲するのみ。

王政古に復し、知識を世界に求めてより、國民の思想殆ど其面目を一新し、小説も亦全く舊時の觀を止めず。最近三十年の間、我邦上下の人心に影響したる改革の精神の激烈、且周到なるは、實に古今内外の史上に多く其例を見ざる所なり。然れども事物の變遷は、所詮歴史的發展なり。さらば明治の小説は過去の我文學と如何の關係を有するか。乞ふ我等をして先づ維新以前の文學を回顧せしめよ。

國民文學は國民的性情の發露せる一の形式なり。吾等は世界人文の歴史に於て各國民族によりて到達せらるべき理想的職能の各々特殊なるものあるべきを信ず。そは民族固有の本性が百般の外物を同化するの作用に於て多少の特質を有することを信じ、而して更に是特質を發揮し、完成することの、其國民にとりて尤も有益に、且尤も成功し易き事情あるべきを信ずればなり。蓋し桃李其壤を同うして遂に其樹を同うせず。國民的殊性の中亦自ら是の如きものあらむ。是れ國民心理學の攻究を待て初めて知悉するを得べしと雖も、吾等は各國民族の過去の作業に於て既に明に是を認めずばならず。性の赴く所自ら他の企て及ばざる所あり。恰も一個人が其の性の長ずる所に隨て其職能を盡すことの、社會に對し

て最も有益なるが如く、國民各々其殊性を自覺して是を發揮するは、やがて人道に對して最大なる貢獻を爲す所以にはあらざるか。セミチック民族と亞里安民族と其間に天職の差あること、猶亞里安民族とチュラニアン民族と其間に職能の別あるが如し。其文物の彼に長くして此に短きもの、素より鴨脚の接すべからざるが如く、鶴嘴の斷つへからざるが如し、それ何れを是とし何れを非とせむや。吾等は文學に於ても亦是理を見る。

國民の感情希望を唱ふものは、國民文學なり。國民は是に依りて其慰藉を求め、其安心を樂む。國民の性情に其基礎を有する文學は、永遠なる文學なり不朽なる文學なり、とは國民と其終を共にすべければなり。つらく各國文學の歴史を通觀するに、文豪詩傑、名を馳せ聲を傳ふるもの、一時に喧しくして而して永遠に寂しきは、多くは國民の性情を會心せず、私心偏好に任せて當眼を籠絡したるに依る。技巧倫を絶ち、情想亦世に超えて、遂に百年の知己無くしてやむ、亦悲しからずや。吾等は我文壇の今日に於て亦常に是憾無くむばあらず。

要するに我邦の文學は我國民の性情を満足する所のものならざるべからず。

是の如きは國民文學として有し得べき最高の價值なればなり。遍く世界人心に對して平等なる効果を有するものは知らず、凡そ文學の價值は國民的產物として、遂に國民性情の所依たるを免れざるべし。

二千五百年の文明史は一個のチュラニアン民族としての我國民の特質を最も明白に呈露せり。吾等は人種學上の殘量的エキスなるチュラニアン民族をば、決して亞里安民族の如く、單一なる人種なりとは思惟せざるべし。さりながら大陸、蒙古民族の特質は、均しく是島國人民の殊性たるは疑ふべからざるなり、即ち我國民は實際的なり、現世的なり。是世界を虚偽と做し、迷妄と觀じ、現象以外の彼岸に向て理想的圓滿の淨樂界を想望したる印度亞里安の宗教的觀念の如きは、我國民の夢にだも思ひ至らざりし所。我國人にありては、見得べく、聞き得べき是現實世界を外にして何等の世界あらざりき。由來宗教なるものは主觀的理想を外界に投射したるもの、理想的觀念に乏しき我國民は古來一の宗教若くは神話をだに有せざりき。一の古事記のや、宗教的なるに近きものありと雖も、之を印度、希臘、羅馬若くは北歐羅巴の諸神話に較ぶれば、吾等は其間に根本的差違あるを認む。吾等の

思惟する所によれば、古事記の載する所は決して所謂ミトロキイと稱すべからざるものなるに似たり。されば天然を人視し、宇宙を神化し、風雲月露の中に不可思議なる或物を冥想するが如きは、我邦の詩歌に甚だ稀なる所なり。況してや、ゲイテ詩中のモハメットが、日月星辰を望みて之を讚美し、更に是等を以て全能獨一の威靈に歸せむとしたるが如きは、我邦人の意識する能はざりし所なり。

Hebe, liebendes Herz, dem Erschlaffenden dich!

Sei mein Herr du, mein Gott! Du Allliebender du!

Der die Sonne, den Mond und die Stern!

Schau, Erde und Himmel und mich!

是を以て歐洲各國の詩歌は、何れも其起原を神話に發せしに違ひて、我邦の詩歌は直に人間を以て初まれり。神と人とのかけはしとも見るべき英雄の譚の如きも亦我邦に見る能はざりし所なり。

我國民は宗教を有せざると共に、形而上學をも有せざりき。怪力鬼神を語らず天命上帝を説かざりし孔丘氏の功利的學説は、是島國に於て絶好の知己を發見せ

りき。夫の天地人間に對して幽玄なる考察を下し、隱微なる感慨を托したる、中古の南歐羅巴に見るが如き、宗教的、はた哲學的詩歌は、吾國民の知らざる所なりき。是に於て古事記を外にして一篇の叙事詩を有せざりし我文學は、戀愛、教訓を離れたる一首の抒情歌を有せざりき。

外國の文化は如何の勢力を我人心に及ぼし、か。支那思想は儒教によりて、印度思想は佛教によりて、共に我未開の文化に汎濫したりきと雖も、我國民の同化力に富みたるや、幾もあらずして之を日本化したる。佛教の如きは、絶大なる政權の幫助によりて殆ど強迫的に傳播せられしにも係らず、印度思想の幽玄深遠なる宗教觀は、乾燥冷淡なる形式主義と、輕薄膚淺なる不合理的厭世の感情を鼓吹したるを外にして、又何等の注意すべき痕跡を止めざりき。流石に儒教は根柢より我邦人心を薰陶せり。そはチュニアン民族の血液は、功利教の繁茂すべき土壤に外ならざりければなり。

是を以て、上層より下層に普及するに隨ひて、佛教は漸く非印度的となれるに反して、儒教はいよゝゝ支那的となれり。中世以後本邦固有の敬神的國風と抱合し

て所謂武士道なるものを造るや、其根柢牢乎として抜くべからず、百般の文物是に胚胎し、永く我歴史上の一大勢力なりき。武士の面目を維持せむが爲に白刃を踏みて笑て死に就くは我邦人日常の事なりき。而かも眞に佛教擁護の爲に鼎鏝を辭せず、若しくは宗教的熱誠に驅られて生死を顧みざるもの、高僧名衲の二三を外にして、そも幾何ありとするや。單に表面上の事實より之を見るも、現世を度外に附する超絶的はた神祕的宗教の眞味は、我邦人の知る能はざるものなりしに似たり。

讀者よ、是の如く述べ來りたるが故に、漫に吾等を以て我邦文學を輕侮せるものと爲す勿れ。吾等は國民文學の眞價は國民的性情を満足するの多少によりて評定せらるべきものなりと思ふ。文學本來の目的は、詮ずる所人を娛ましむるにあり。吾等は是意味に於て實用を離れて文學の價値を認むるを欲せず。摩訶婆羅多と、羅摩耶那とは、印度亞里安民族にとりては洵に偉大なる詩篇なるべし。然れども、其想像の瑰奇夸大なる、其情感の幽玄神祕なる、チラニアンなる吾等の到底其蹤跡に依傍する能はざる所、徒に其怪異を驚嘆するを外にして、吾人の希望、安心と

相關せざるもの多し。是の如きは、吾等が國民の文學として何の價値やある。印度歐羅巴民族の宗教的叙事詩の如きも、彼邦の文物に心酔せる者流を除きては、我國民的性情と爲す所甚だ少きに似たり。是れ亦我文學として極めて價値無きものと謂はざるべからず。昔者ゴットシンド一輩の自國民族の性情如何を顧みず、偏に形式の精透と情感の華麗とに垂涎して、佛蘭西文學の輸入を務めしや、獨逸文學は實に其衰頹の極點に達したりき。是時に當りて若し所謂瑞西派のミルトンに關する抗議なく、クロップストックが其の『メシアス』を著はして、チロトン民族の意識に一大反省を促すこと無く、更に、レッシングが『文學書簡』を刊行して、國民文學の旗幟の下に、全獨逸の文壇を風靡すること無からむには、三十年戰以降の獨逸は何れの時に至りて其『國民文學』を有するを得べかりしや、殆ど知るべからず。夫の國民性情の如何を蔑視して、徒に他の雄渾跌宕を稱へ、幽玄高崇を賞するものに向ひては、身レツシングに非ざるも、吾等は『知識ある人夫』を以て之を目せむと欲す。

國民性情の文學に於て重すべきことは是の如し。況ひや我國民を以て假りに等しく蒙古民族なりとするも、歴史ありてよりこのかた、是秀麗明媚なる天然の間に

涵養せられたるを以て、さすがに大陸蒙古民族の如く、其知鋪張空驚に流れずして、着實穩健に、其情乾燥無味に失せずして、清妍婉微に、加ふるに、雄邁の資性と、敏活の機能とを以てす。よしや、玄々を夢み、幽冥を想ふの天賦に乏しとするも、熱情至誠の宿する所、何の處にか文學無からむや。春晝窓下百花開くところ、桃紅李白、それ何れを是非すべき。吾等は、斷じて言はむ、國民性情の同化し得る所は、即ち國民文學の生長し得る所なりと。

餘論はしばらく措く。今我邦小説の發達を顧みるに、西洋諸國と自ら日を同らして論ずべからざるものあり。神話に初まり、叙事詩、英雄譚に移り、傳奇を経て、遂に今日の所謂小説に至れるは、おしなべて歐洲に於ける小説發達の次第なり。然れども、神話無く、英雄譚無き我邦にありて、小説の起原として觀るべきもの、上古に於ける二三の卷談、夢野、鹿浦、鳥子の物語及び降りて神佛に關する縁記談等に過ぎず。延曆遷都以後は、上下の恬熙につれて、文運大に開け、拮据破格の漢文體を脱して、優雅典麗なる和文に成れる諸種の物語續出せり。即ち竹取物語を初めとして、宇津保伊勢住吉濱松落窪とりかへばや等より、源氏を経て、狹衣、多武峰等、其數少か

らず。殊に源氏、狹衣等に名のみ聞こえて、其書傳はらざるものに至りては、一々名舉に遑あらず。當時佛典漢籍盛に輸入せられ、上流社會の思想を影響すること少なからざりしを以て、是等の物語類は、竹取の如く、其趣向を蹈襲するが如く、甚しからざるまでも、自然人生に對して多少の悲觀をほのめかさざるは無し。然れども、其の資材とする所は、概ね月卿雲客の私事にして、其の骨子とする所は、王公貴人の戀愛談の圈套を出てず。是れ當時の作者も、讀者も、共に皆上流社會の人にして、其經驗の範圍の狹隘なるより生ずるおのづからなる結果なるべしと雖も、他方より之を見れば、我國民性情の真相の幾分は、已に明に茲に呈露せられたりと謂つべし。進て前後、保平の戰亂より、鎌倉時代に入りては、朝家の式微と共に文學も亦一時大に衰へ、源平盛衰記、平家物語、判官物語等の史談を除きては、小説として見るべきもの、鳴門中將、秋夜長等二三の物語ありしに過ぎず。蓋し藤氏の勢力頓に衰へ、權柄武士の手に移りて、殺伐武斷の氣風世に尙ばるゝに及び、政治社會の趨勢と共に、文學美術も亦公家戀愛の文縛を離れて、専ら武人干戈の功名を慕ふに至れり。彼の地獄草子の如き繪巻物と共に、大江山、戸隱山、鶴退治、鬼一口等の卷談、街説の是

時代にもてはやされしは、蓋し自らなる勢なるべし。然れども、天平美術の高妙は、最早や運漕諸慶の製作に見るべからざるが如く、源勢二語に見るが如き、優雅は永く其跡を絶ちたるが如し。

更に室町時代に入りては、福富文正鉢かつぎ等の繪卷草子の行はれしものありしが、素より殊に言ふに足らず。當時戰國の積弊を受け、天下の文學は、曠に五山の僧徒に依りて其餘喘を保つゝの勢なりしを以て、我邦文學の衰頹は、是時に於て其極に達したりと謂つべし。是暗黒時代に於て一種の光彩を我文學史上に抛ちたるもの之を謠曲となす。

若し我文學史中に於て佛教文學と稱すべきものを求むれば、そは即ち謠曲なるべし。そも、佛陀教の我邦に渡來せしは、室町時代を去る遠く千有餘年の昔時にあり、而かも無常流轉の人生を悲觀し、空靈幽冥の他界を憧憬して、是厭世宗教の特色を發揮したるに、近きものは實に謠曲を以て最となす。何故に佛教は室町時代の最後に於て殊にしかく其影響を文學に及ぼすことを得たりしか。主要なる其理由は極めて簡單なり。蓋し、苟も健全なる國民的性情の社會を支配する間は、

あらゆる外來の勢力は、之と同化するに非ず、むば、何等著大の感化を人心に及ぼすこと能はざるべし。鎌倉以降、干戈頻りに動き、民心其堵に安ぜず。足利將軍の末路に及びては、累世の積弊は根抵より社會の秩序を搖撼し、綱常地に墜ち、淳風美俗又見るべからず。人心離散して又拾收す可らず。久しく烽烟鼓響に戰慄せる國の民は、鬱憂の眼を擧げて、齊しく救濟の道を憧憬したりしならむ。是の如き時に當りて世間の無常を説き、有爲轉變の現世を厭離して、解脱成佛の淨樂を鼓吹したる謠曲が、一般人心に歡迎せられたるは、蓋し當然の勢ならむのみ。斯の如くにして、謠曲は、雪舟、雪村、一輩の禪學的繪畫と、兩々相並びて、我邦の文學及美術に於ける佛教的勢力の最高點を標示せり。

然れども吾等は思ふ。謠曲は眞に我國民性情を代表せるものに非ざると、猶雪村一輩の禪畫が美術的特質を發揮せるものに非るが如きを。吾等は謠曲を以て佛教僧侶が、我國民性情の罅漏に乗じて自家の情感を發露したるものなりとするの、寧ろ至當なるを想ふ。何となれば我國民は決して謠曲中の諸國行脚の僧によりて、其慰藉濟度を受くる亡魂幽靈の如きものに非ざればなり。

任他。謠曲はもと樂器の幫助により、一定の節調に應じて唱咏するものなるを以て、小説と云はむよりは寧ろ夫の舞本、淨瑠璃、草子等と共に音樂的文學と稱すべきものならむ。其他會我物語、鴉合戰物語、魚鳥平家鳥部山松帆の諸種の物語も室町時代の末に出てたれども、取出て、言ふべき程のものにあらず。

累代の戰亂に倦み疲れたる國民は、徳川幕府の下に三百年の平和を樂めり。是時代に於ける諸般の文學の隆盛は、今更絮説するの要無かるべし。是に於てか小説も亦一新紀元を開きぬ。蓋し今日の概念にや、相應はしき小説の歴史は、實に是時代に初まりしと云はむも敢て過言に非ざるべし。

徳川時代に於ける小説は其種類を言へば凡そ三種あり。即ち所謂浮世草子、所謂讀本及滑稽本是れなり。其時代を云へば假に二期ありとすべし。元祿を初期となし、文化文政を後期となす。是中讀本は鎌倉室町時代の演義史談より脱化せる實録と、近松以下の院本とを抱和して更に一部の趣向を構へたるもの。山東京傳、曲亭馬琴等を以て其主なる作者とすべし。滑稽本は俗に所謂草雙紙より出でたるものにして、繪巻物、御伽草子の系統を引けるものと見るを得べきか。式亭三

馬十返舎一九等をして其作者を代表せしむ。所謂浮世草紙は古來の物語を繼ぎて資料を俗間に取りたるもの、井原西鶴の作を云ふ。更に作者を以て時代に繋ぐれば、元祿は西鶴の時代にして、文化文政は京傳馬琴三馬一九の時代なり。是の他西鶴の餘波を受けて別に世態人情を寫したるもの爲、永春水あり、所謂人情本の作者なり。

若し是時代の小説を精説せむと欲せば、卷を重ね帙を革むるも尙足らじ。今其の二三の要點を指摘せむに、其の描寫の様式より之を觀れば、浮世草子滑稽本は寫實的にして讀本は理想的なり。其資料の上より之を見れば、前者は事現世に關りて平民的、後者は主として歴史に本きてや、貴族的に傾けり。前者は英語の所謂ノベルに近く、後者は所謂ロマンスに近し。蓋し狹義に謂ふ所の小説と傳奇とは、小説文學の二大種類なり。人生を觀察する方法の異なるに隨ひて、其描寫の方法亦自ら分れ、茲に外部の經過を主題とする所謂傳奇小説も、内心の作用を對象とする所謂心理小説との別を生ずるは寧ろ自然の勢ならむ。其人生を觀るや、前者は叙事詩の如く客觀的にして、後者は抒情詩の如く主觀的なり。若し一大天才あ

る小説家ありて、是兩者を熔鑄して一九となし、同時に主客兩觀の過程を示すこと猶戯曲に於て見るが如き作を爲るあらば、是の如き小説は形式上理想的圓滿に到達したりと謂ふを得べし。然れども實際の技工上、是の如き事の到底望み得べからざる以上は、是二種の小説の永く兩端に對立する亦已むべからざるものあるに似たり。故に吾輩は我一派の批評家が『傳奇小説は死にたり』と絶叫するの大早計なるを信ずるものなり後章參觀。

徳川時代にありては馬琴京傳はロマンスを代表し、西鶴春水はノベルを代表すと見るべからむ。然れども其完成の程度より二者を觀れば馬琴の歴史小説が傳奇として我古今の文學史上に獨歩するの偉觀は、百世の瞻仰すべき所なりと雖も、西鶴春水のノベルに至りては極めて幼稚なるものと謂はざるべからず。若し單に彼等の著作に對して峻嚴なる含蓄的批判を下さば、恐くは彼等は是名稱をだに價値せざるべし。唯吾等のしか呼稱する所以のものは、そが後年小説の發達に對して一縷の歴史的系統を繋住するものあるに依るのみ。

げにや西鶴が小説家としての眞價は、人情を穿鑿することの精微なるものある

に非ず、國民の情想を發揮することの愷切なるものあるに非ず、はた又一部人生の運命を描破して趣向の殊に巧妙なるものあるに非ず。只其世態風俗を觀察し、之を筆端に上すに當りて、着眼の銳利敏活に、描寫の逼真輕妙なる他の容易に企及すべからざるものあるが爲のみ。吾等は敢て彼が色欲の消長を描寫したるを以て人間の煩惱を觀じたるものとなすを拒まざるべし。然れども彼若し寫實家として不朽の名譽を保ち得べしとせば、そは只彼が世態風俗を觀察する着眼の非凡なるに歸すべきなり。何となれば彼の筆にする所の片々は、徒に彼が見聞したる肉慾世界の現狀を直寫したるに過ぎずして、概ね趣向無く、性格無き零碎の巷談街説に外ならざりければなり。

然れども西鶴の着眼及び文筆は、即ち是れ寫實的小説の着眼及び文筆なり。彼の後江島や八文字屋の氣質物あり、三馬、一九の滑稽本あり。春水の人情本あり。然れども其觀風の眼光と輕妙の筆致とは遂に遠く彼に及ばず。宜なるかな明治小説の第二期に於て寫實的傾向の一世を風靡する時に當りて、先づ元祿文學の大復興を見るに至りしや。

西鶴一度び寫實の門戸を小説界に啓きてより、其所謂浮世草子は幾多遊蕩子の摸倣する所となり、其積自笑を初として、箕山、鷺水、其角、丁意の徒より下りて、田螺、金魚、吉田の錦江、振鷺亭等の所謂洒落本の作者に至るまで、競て其流風を學び、多くは遊里教坊の痴情を穿ち、娼婦嫖客の内秘を傳ふるを旨とせり。是等は概ね簡短なる情話にして、素と一部の結構主旨の存するにあらず。文化以後に至りて、小説の風潮漸く一變し、争ひて新奇の事實を結綴して巧に複雑なる趣向を構へ、以て讀者の嗜好を惹かむことを務めたり。是れ素より時尚の變遷に應じたるものなるべしと雖も、是れ素よりして漸く荒唐無稽の譚説を餌釘して、婦幼の耳目を娛ましむるの風を生ぜり。是の如く、怪奇なる傳奇風、普く小説界を汎濫せむとする時に當り、一種異様の旗幟を擧げて、在來の小説に一大刷新を加へたるものを、曲亭馬琴となす。

歴史小説家としての馬琴は、世既に定評あり、吾等又茲に之を贅せざるべし。而かも彼れが徳川時代の小説史上に特殊の意義を有するは實に其勸懲主義に在り。蓋し馬琴は素深く儒教の精神に薰染し、常に世道名教を以て事となすもの、文化以

後の小説が競新街奇を之れ務めたるの極、徒に婦女童蒙の翫具となるに過ぎざりしを見て、深く潜に慨する所あり。其の所謂勸懲主義は在來小説の品位を高め、以て士人學者の閲讀に資せむとするの主旨に出づ。其作一度び世に行はれ、其該博なる學識と雄麗なる詞藻と巧妙なる脚色とを以て、勸善懲惡の大旨義を鼓吹するや、天下の荒唐なる草雙紙、浮艶なる浮世草子、無趣味なる實錄、仇討物等に倦厭せる時好は翕然として之に赴き、遂に一世の風尚を形成するに至れり。馬琴著す所の稗史小説は素より其趣向に於て必ずしも前代に優れりと云はず。其の寫す所の事實は多く怪奇不自然なるものにして、其の描く所の性格も亦鋪張夸大に失するの評を免れず。然れども、理義を以て首尾を貫徹し、到る所寓するに訓誡勸懲の意を以てす。懇て道理に拘泥し、事を枉げ、情を矯めて、尙且成案を遂ぐるの嫌なきに非ずと雖も、夫の狂言綺語を以て隨處當眼を喜ばしむることを之れ務め、孟浪散漫、説く所一致なく、理義無きものに比すれば、遂に優れしものと謂はざるべからず。是に於てか、文化初年以來の小説は其面目を一新せり。夫の狹斜洞房の事實を描寫せる鄙俚浮靡の人情本の如きも、勸懲の名義を被るの已むべからざるを以ても、

曲亭氏の勢力の如何に廣大なりしかを察するに餘あり。吾等潜在に惟ふ。馬琴の著作は尤も健全なる我國民の性情を代表せるものには非るか。彼が唱道せる勸懲教訓の主義は主觀的はた理想的潤色を興へたることによりて大に小説の意義範圍を狹窄したるの觀無きに非ずと雖も我國民の現實的はた功利的性情を投射して尤も明晰なるものに非ざるか。是の如き小説によりて慰藉を得教訓を受くるは即ち我國民の性情に尤も健全なる進歩の動機を興るものには非ざるか。彼が小説は今日より見れば素より幾多の缺點に滿つ。其描寫の方法は極めて幼稚なり。其人物の性格は極めて不自然なり。老農故事を説き、估客道を談ず、極めて笑ふべし。強ひて地を作り、務めて理を構へ、知を擧げて情を抑へたる更に極めて惜むべし。彼は到底明治三十年の寵兒に非ずと雖も其の精神主義に對しては我國民は永く彼が知己たるを失はざるべし。殊に彼が描寫したる武士道の如きは任俠義に勇む大和民族と共に永く埋没すること無かるべし。

遮莫吾等を以て傾向小説を推奨するものと爲す勿れ。そは別に説あるなり。

馬琴小説の勸懲主義一度び時尙を壟斷してより、我小説は殆ど全く淺近なる功利的方便の渦中に沈溺し、所謂純美術的詩趣は蕩然として地を掃ふに至れり。三馬一九春水一輩の戲作の遙に元祿初期の寫實小説に照應するもの無きに非ざりきと雖も、是れはた勢力微々として言ふに足らず。是の如くにして小説界は大政維新の大關門を超えて古來未曾有の新舞臺に入れり。

是を要するに、徳川時代に於ける寫實的小説の萌芽は夙に元祿の當時に胚胎したりきと雖も、其成熟を見むが爲には數百年の長日月を待たざるを得ざりき。超て百年幾多の戲作者、人情本作者の世に出づるものありきと雖も、未だ老西鶴の遺鉢を襲ふに足らず。況むや其の遺業を紹きて之を進むるをや。西鶴は實に寫實的諷諧家として空前絶後の位置を獨占せるものと謂ふべし。明治小説の第二期に入るや、春のや紅葉、美妙諸氏は遙に其系統を繼承し、大に寫實小説を振興せり。西鶴氏茲に於て初めて其後を得たりと謂ふべし。文化の初年浮世草子の血統殆ど絶えてより、傳奇小説盛に出で、次て馬琴之を振作し、種彦、仙果等の小摸倣者其後を承け、春水、一九一輩と双々相並びて明治の世界に入れり。維新前後の小説は殆

ど其衰頹の極限に達したりしが如し。

西鶴と馬琴は言ふ迄もなく徳川時代の二大小説家なり。今其歴史的位置を考ふるに、是二人は酷だ英國十九世紀小説史に於けるオウステン女史と、ワルタースコットのそれに似たるものあるが如し。そも一世紀のはじめ所謂ジャコビニズム衰へて時の好尚は漸く十八世紀の政治哲學的文學に背きし頃より、茲に英國小説の新潮流を催起せりき。ノベル作者として其劈頭に表はれしものをオウステン女史となす。女史は恰もスコットが十九世紀に於ける英國歴史的小説家の父なるが如く、十九世紀に於ける英國寫實的小説家の母なり。されど女史の小説が當代を風靡せしにも係はず、死後其蹤跡に隨ふものとは殆ど皆無なりき。當時國民の嗜好は他に一層有力に且一層通俗なる勢力を喚起し、そをして霎時英國小説壇の全權を握らしめたりき。是れ即ちワルタースコットの創始したる歴史的小説なりき。數十年の後は歴史小説の潮流漸く退轉し去りたる後に至りて、全く傳奇巷談を離れたる寫實的小説は、初めてオウテンス女史の後を享けて其頭を擡げ、漸く其勢力を回復することを得たりしなり。是れ西鶴の開始したる寫

實的小説が、一時馬琴の歴史小説の爲に壓倒せられ、明治に入りて辛や、土を捲て再來したるが如からずや。

幾度か比較せられたる馬琴とスコットとの類似は、大體に於て吾等も亦認むる所なり。二千年の間歐洲各國の産出せる歴史的小説は、其數幾何なるを知るべからず。然れども之を以てスコットが僅々二十年の間に述作したる所のものに比すれば、螢火の曙光に向ふが如し。是れ猶馬琴が一部の八犬傳能く本邦古來の物語をして顔色なからしめたると同均しからずや。若し夫れ十八世紀の韻文的傳奇に倦み疲れたる英國の社會が、更に浩瀚なるウェーバレーの散文的傳奇を歓迎するを辭せざりし因縁に至りては、固より種々ありと雖も、是れ老詩人が能くアングロサクソンの國民性情を把握し、道義人情に縁りて之を鼓吹したりしこと、亦其一因ならずむばあらず。是れ亦酷だ馬琴に似たりと言ふべし。但其結構の多様に、其人物の自然なるは、たまた其描寫の精緻なる等に到りては、馬琴到底スコットの匹儔に非ざるなり。西鶴は其史上の關係に於てオウステンに較ぶべしと雖も、其特色に於ては寧ろワイルディングに酷似せるものゝ如し。

我明治の小説は斯の如き時勢を承けて提起せられたるものなり。乞ふ章を繼ぎて其變遷の一斑を叙述せむ。

第二 明治小説の第一期

古より改革維新と稱せらるゝ時期を我邦歴史中に數ふれば一にして足らず。然れども我明治の改革の如く、短日月の間に深大なる變化を效したるものは未だ其例を見ざる所なり。小説も亦社會政治文學の一般の推移に隨ひて、古來未だ曾て經驗せざりし新潮流に乗ぜしは、素より自然の勢なり。

變化の急激なると、改革の殆ど根本的なるにつれ、我小説は一般社會の事物と共に幾多の異なる局面を経過したり。蓋し舊思想は破壊せられて新思想は未だ成らず。社會人心は未だ其根柢を有せず。國民的性情は新文明の光明に眩惑して未だ自ら省慮するの違あらず。同化の中心的活力は一時殆ど停止して、己を守るの本領なく、自ら立つの脚地無く、一に其指導を外來の勢力に仰ぎたるの時代にありては、社會の風尚嗜好も亦朝暮に改易せらるゝを免れず。若し是際其進退

左右に應じて一々其時期を別たば、僕を更ふるも及ぶべからず。且夫れ大勢の趨くところ自ら其軌なくむばあらず。紛雜の間尙一條の理文ありて、將來發達の針路を示すものあり。つら／＼這般の情狀を考察し、大小相商り、輕重相較ぶれば、明治小説の歷程を前後二期に分つを妥當とすべきが如し。即ち明治の初年より十八年に至るまでを第一期となし、十八年以降二十八年頃までを第二期となす。若し夫れ二十八年以下に至りては、事最近の過去に屬するを以て今日未だ明に其變遷の蹤跡を分つの時に達せざるが如し。

弘化嘉永このかた、内外の情勢穩かならず。人心洶々として又娛樂を文學にとるの遑少なかりき。維新の戰爭漸やく其局を結びしころより、閩國の民心は舊物打破の傾向に驅られて西洋文明の輸入に忙はしく、本邦古來の文學はすべて度外に抛却せられたる有様なりき。西洋文明は明治の初年にありては主として時の英學者によりて紹介せられたるを以て、もつばら英國思想なりしことは、最も注意すべき所なり。

是より先き、外國思想の我邦に入れるものに支那、印度の二種あり。儒教により

て代表せらるゝ支那思想は、其實際的傾向の我國情に適するものありしを以て、國民の思想を影響すると甚だ小ならず、一切の文物其感化を受けざるは無かりき。然れども其の保守回顧に傾き、退嬰自滿に安する支那的精神は、必ずしも敏活銳利なる我民性と相應はしと謂ふべからず。其の文化を停滯し、空形虛式の中に逡巡して、動もすれば過去の舊夢を慕ふて退轉せしめむとしたるは、所詮主として儒教の及ぼせる惡結果なるが如し。印度思想に至りては、殆ど根本的に我國民の性情に同じからず。世界に於て最も理想的はた宗教的なりと稱せらるゝ、印度亞里安民族が世界に於て最も實際的はた非宗教的なりと稱せらるゝ、蒙古日本民族に對して、色即是空の妙想を訓へ、寂滅爲樂の玄理を觀ぜしめむとす、寧ろ木に接ぐに竹を以てせむと欲するに均しからずや。吾等は佛陀教二千年の傳播も徒に枯淡なる形式主義を馴致し、厝に淺薄なる厭世思想を鼓吹したる、外何等較著の効果なきを見て、國民的性情の遂に動かすべからざるを觀するなり。且夫れ現世を蔑視し、彼岸を愉悅する佛陀教は、其の超絶的の點なるに於て、實に我國民の性情に背反したるのみならず、孔子教と同じく又大に國民文化の進歩を沮害せり。我邦二千年

の歴史が多くの處に於て是の如き非日本の思想に對する國民の無意識的反抗を表示せることは、炯眼なる史家の夙に看破せる所ならむ。

明治維新の初に於て、我邦に輸入せられたる英國思想は、支那印度の思想と大に其面目を殊にせり。若し國民性情に適應するの程度を數量的に觀ば、我はむしろ英國に遠くして支那に近かゝらむ。然れども英國思想は支那思想の我に反するの點に於て我に一致せり。何ぞや。其の進歩的功利主義是れなり。アングロサクソン民族は主として亞里安種に屬すと雖も、人種の混和風土の勢力は殆ど彼をして亞里安民族の主性を失はしめたるの觀あり。彼はチトン民族の空想を有せず、又羅甸民族の輕浮に染まず、彼は考察を喜ぶと共に、着實を尙び改革を迎ふると共に、保守を棄てず。荒唐なる形而上學は彼の知る能はざる所、然れども適切穩健なる常識は彼に於て、殆ど他に見るべからざるの圓滿を見る。彼は學問に於ては實験を重じ、事業に於ては功利を喜ぶ。一切の文物は現世の幸福を増進するの點に於て初めて貴重すべしとなす。是の功利的且進歩的なるの一事は英國思想の正に我國民性情に切合する所なり。殊に維新草創の際に於て、國民を擧げて銳意

社會の改善國家の富強を企圖する時に當りては、從來支那、印度の思想に於て見るべからざりし進歩の主義は、彼等が双手を擧げて歓迎せし所なりき。

是英國思想が改革の餘勢に乗じて進歩の精神を國民の間に鼓舞しつゝありし間に、そが純文學上に及ぼし、直接の影響の見るべきものとは、甚だ僅少なりしが如し。蓋し詩歌小説の盛に行はるゝには、なべての場合に於て、其國の富盛にして其社會の平穩ならむを要す。されば維新の際は社會の秩序を回復し、十九世紀の世界の大勢に適應する新文明を移植するの急務に迫り、上下を擧げて政治經濟の改善に熱中したる時なれば、純文學の如き物質的生活に須要ならざるものは、おのづから社會の注意以外に放擲せらるゝに至りしなり。故に明治十年以前の小説は、徳川時代の殘肴、冷杯を嘗啜して、僅に其餘脈を繋ぎたるの有様なりき。すなはち鶴亭、秀賀、假名垣、魯文、山々亭、有人、柳水、亭種、清二代、目春、水笠、亭仙、果等の著作は、其脚色より見れば、讀本草、雙紙の舊型を脱せず其思想より見れば、勸善懲惡の樊裡を出てず、其文、鉢より見れば、馬琴、春水、三馬、一九の糟粕を嘗むるのみ。殆ど一人の新機軸を出して是圈套を穎脱したるものあらざりき。是れ主として時勢の文學

を要せざりしの結果なりと謂ふべし。若し夫れ明治四五年の交、魯文の滑稽物が、當時の小説壇に獨歩したりし事實は、當代の粗笨なる人心が如何に眞面目なる文學を味ふに堪えざりしか、又維新前後の創痕につかれたる國民が如何に鄙俚なる諧謔の中に其鬱悶を慰めしかを想見するに足る。其西洋、藤栗、毛、胡、爪、圖解等は西洋文明に眩倒せる當代人心を倒照するの鏡として見ることを得べし。英國主義の第一の唱導者たる福澤諭吉氏が其功利的學風によりて舊弊を打破したる功績は、頗る痛快なるものあれども、其一種の新文鉢を創始して明治の時文に一生面を開きたるの外、殊に純文學に直接の關係なかりしが如し。魯文の作と共に一時流行せし松村操氏が戊辰前後の戰爭談の如きも、小説史上の事實としては殊に言ふに足らず。

然れども、他方より社會の状態を観察すれば、進歩改善の跡着々見るべし。政府は明治二年を以て府縣に令して小學を設け、昌平黌を大學にし、四年文部省を置き、大に教育制度を改善し、士官、農、商、百工、技藝より法律、政治、天文、醫療に至るまで皆其學校有らざるは無し。外に對しては盛に海外留學生を派遣し、内に向ひては大

に官費の學生を募集したる等、政府事業としての教育は頗る務められたりと謂ふべし。又定期刊行の新紙大に起り、其中には多少文學に關するものも無きに非ず。西洋書籍の翻譯亦盛に續出せり。即ち福澤、中村二氏の著譯を初として、歴史には萬國新史、泰西通鑑、地理、風俗には輿地誌略、西洋新書、西洋見聞錄、修身倫理に關しては勸善訓蒙、政治、科學には眞政大意、立憲政略、萬國公法、道理圖解、博物新編、天變地異、人身窮理等一々枚舉に遑あらず。殊に中江兆民氏が譯にかゝるルソーの民約論の如きは、一時大に社會に流行し、民權自由は少しく新知識を有する輩の間に套語となれり。語學殊に英語學も亦漸く榮へ、バックル、ギゾーの文明史は、博く學者の間に讀まれたり。又他方には、洋學の大流行に反對して、國學、神道の再興あり。久しく徳川幕府の下に殘酷なる待遇を忍びたる、所謂平田派の皇學は、今や極端なる開進主義の反動として、一部の人心を風靡するの勢を得、和文の研究亦隨て復興せり。

是れ明治十年前以前の狀況なり。見るべし、今や我邦は物質的改革の急務を了して、方に漸く思想界の改革に着手したることを。是れ純文學發達の過程に於て缺

くべからざるの階段なり。然れども詩歌小説の上に於ては未だ著しき影響を見ず、僅に魯文、應賀一輩の著作が小説史上に一縷の光明を保ちしを以て之を見れば、「議論より實を行へ、なまけ武士」的の感情は、尙舊に依りて社會の思潮を支配せしならむ。

明治十年に於ける西南戦争は、直接には何等恒久の勢力を文學の上に有せざりしに似たり。國民は尙其制度組織の改善と共に、國民的思想の固定に忙しく、多く純文學に關心するの餘裕を有せざりき。蓋し國民的思想及感情の一定せるものあるに非ずむば、所謂國民的文學は成立するを得べからず。維新このかた、英國思想に乗じて改革の途上に突進したる我國民は、今や殆ど撰擇なく收容したる諸種の異質文明に食傷せり。保守と進歩と、外國と内國と、政治宗教學問の上に於て互に相格闘せり。而して是等の衝突軋轢を調和し、同化する所以の唯一の勢力たるべき國民的性情は、世界的知識の缺乏の爲に未だ自覺の域に上らず。あはれ、是の如き時に於て聰明なる國民に安慰娛樂を供する文學は、それ如何にして生起するを得べき。

當時の小説は主として繪入新聞の續物として表はれたり。其の主なる作者は花笠文京、高島藍泉、染崎延房、條野傳平、古川魁、雷伊藤、專藏、須藤南翠、渡邊義方、宮崎夢柳、小室案外堂諸氏なり。然れども今日見るに足るものとは絶えて無し。是等作者の小説を掲載せる新紙の主なるものは東京繪入、繪入自由、繪入朝野、自由の燈等なり。但自由の燈に掲げたる宮崎小室諸氏の小説は、多くは民権革命を鼓舞する西洋小説の翻譯案、若くは翻譯にして、當時政治界の暗澹たる風潮を伺ふに足るもの、他の群作家のと自ら其趣を異にせるものありき。

この頃に前後して泰西小説の翻譯切りに出でしは、頗る注意すべき事實なりとす。其の二三を擧ぐれば、織田純一郎氏の花柳春話を魁として、關直彦氏の春鶯囀、藤田鳴鶴が繫思談、其他春窓綺話、梅蕾餘薫、經世偉勳等、他にも少からず。多くは其原書をリットン、スコット、デイスレーリ等の英國近時の歴史小説の中に求めたりしが如し。而して其譯者は概ね時の政論家のやゝ文字あるものにして、専ら文學に従事するものに非ず。蓋し是等の人々は、當時の最も教育ある讀者を代表せるもの、其頭腦の西洋文明に薰染しそめてより、在來及び當時の小説の荒唐陳腐なる到底

其の進歩せる嗜好を満足する能はざりしを以て、茲に指を外國小説の翻譯に染めしに至れるなり。主として其資をリットン一輩の歴史的はた政治的小説に藉りし所以の者は、其譯者が政論家たりしこと素より其直因を爲せしなるべしと雖も、そもく又當時社會の文學嗜好の幼稚粗大なる、未だ人情人生の精彩妙相を描破せる寫實的はた心理的小説の旨味を鑑賞すること能はざりしに因らずばあらず。然れども其の舊小説の陳套に満足せず、從來のとは異なりたる新しき或物によりて、其慰藉と娛樂とを求めむとするの進歩的傾向は、たしかに是の翻譯小説流行の現象に表はれたり。

翻て當時社會の状況を察するに、維新このかた引續きたる改革の精神も漸く靜穩中正に傾き、無謀なる進歩と、頑迷なる保守とは、互に自他の長短を覺識すると共に、十有餘年の仇敵は漸く其舊怨を解きて一堂に握手するの道に近けり。民約論的急進派も、彼我國情の差別を覺りて自ら戒省し、皇學的守舊派も世界の犬勢に鑑みて漸く其反動の氣焔を收むるに至れり。此と同時に科學、哲學のひらけゆくと共に、國民思想の範圍亦一層の廣さを加へ、英佛獨諸國の語學研究の進歩につれて、

泰西文學の知識亦たますます國民の間に播布せるを見る。而して今やスコット、ソルトンの譯者によりて、外國小説の規模結構の巧妙自然に近く、思想文章の精緻高尚なる、遂に本邦小説に卓越するものあるに驚きたる文學社會は、猛然として深く自ら省みる所あり。是に於て小説革新の機運初めて動く。柴東海が佳人の奇遇、末廣鐵腸が雪中梅花、間鶯藤田鳴鶴の文明東漸史、乃至少しく後れて矢野龍溪が經國美談等は、實に是風潮に乗じて出てたるものに外ならず。然れども是等の著作は、新好尚に對する一定の見地と明確なる意識を以つて現はれたるものに非ずして、單に在來小説の缺陷を補はむとするの消極的煩悶に過ぎざりしに似たり。是時に當り東西文學の比較研究によりて、我小説の過去現在を觀察し、詩學若くは美學の脚地に立ちて、在來の作家を論評し、且小説の性質理想を説きて併せて將來の方針を指示し、以て我小説の史上に一新時期を劃したるもの之を春のや主人坪内逍遙となす。

明治の小説は逍遙を以て過渡の時代に入れり。明治初年より其十八年に至る吾等が所謂第一期に於ける紛々たる小説は、汗牛充棟も管ならずと雖も、概ね徳川

時代の遺風を紹襲し、馬琴種彦の荒唐を學ぶものに非ずむは、一九春水の鄙俚に倣ふもの、然らざれば西洋小説を模して生吞活剝に陥れるもの、明治時代の小説として見るに足るべきもの殆ど之れ無かりき。逍遙一度び出で、其小説神髓と書生氣質とを著して勸懲主義の誤謬を極論し、寫實小説の嚆矢を開きてより一世靡然として之に赴き、小説壇の旗幟爲に一變せり。是れ素より時勢のおのづから然らしめし所なりと雖ども、そもく又世を擧げて舊習の夢中に昏睡し一人の能く舊圈套を顛脱する者無き時に當り滔々たる時に逆ひて一世の木鐸となりたるは、逍遙其人の識見亦非凡倫を絶えたるものあるに因らずむばあらず。蓋し氏の如きは百世の下永く我邦文學史上に於て獨得の位地を有すべき者なり。

小説神髓は一部の小説論なり。小説の變遷主眼種類裨益より立案、性格描寫の方法に及ぶ。其の主意とする所は、前にも言へる如く馬琴以來我小説作者の金科玉條としたる勸懲主義を打破して寫實を獎説するにあり。其の小説の主眼を論ずるや、先づ小説の主眼は人情にして世態風俗これに次ぐと喝破し、是人情の奥秘を穿ち、心裏の活動を描寫して周密精到ならむは小説家の本務なりとし、和漢の稗

官者流がひたすら脚色の骨髓に入らむことを務めて、寫情の皮相に止るを憂へず。此の如きは眞の小説と謂ふべからざるを説き、更に一步を進めて、それ稗官者流は心理學者の如し。宜しく心理學の道理に基づきて、其人物を假作すべきなり。苟にもおのれが意匠を以て強て人情に悖反せる。否、心理學の理に反れる人物などを假り出さば、其人物は已に既に人間世界の者にあらで、作者が想像の人物なるから、其脚色は巧なりとも、其譚は奇なりといふとも、之を小説と謂ふべからず。

となし、曲亭の八犬傳を例證として、其説を敷衍せり。曰く、彼の曲亭の傑作なりける八犬傳の八士の如きは、仁義八行の化物とて、決して人間とはいひ難かり。作者の本意はもとよりして彼の八行を人に擬して小説を爲すべき心得なるから、あくまで八士の行をば完全無缺の者となして、勸懲の意を寓せしなり。されば勸懲を主眼として八犬士傳を評するときには、東西古今に其類無き好稗史なりといふべけれど、他の人情を主眼として此物語を論ひなば、瑕無き玉とは稱へがたし。其故を如何にとならば、彼の八主公

の行を見よ。否、其行爲はとまれかくまれ肚の裏にて思へる事だに徹頭徹尾道にかなひて嘗て劣情を發せしこと無し。矧や一時瞬間と雖も心猿狂ひ意馬跳りて彼の道理力と肚の裏にて闘ひたりける例も無し。よしや堯舜の聖代なればとてかゝる聖人の八個までも相並びつゝ世に出でむこと、殆ど望みがたき事ならずや。

又小説作者たるものは、専ら意を心理に注ぎ、假作の人物と雖も、一度篇中に出でたる以上は、之を活世界の人と見做し、其思想感情を寫し出すに敢て自己の意匠に任せて善惡邪正の感情を挾むことを爲さず。只傍觀して其自然の狀態を摸寫するを主とすべしと説きて、寫實以外に小説無きを示し、更に勸懲小説を貶し、摸寫小説を掲げ、摸寫主意の小説には求めずして、諷刺諷諭の法をなはり、暗に人を教化するの力ありとす。我邦の小説作者は、こゝらの道理をさとらざるにや、ひたすら笠翁が語を師とし、小説といへば必ずしも事を凡近にとりて意を勸懲に發せざれば、叶はざる事のやうに思ひて、獎誠といふ摸型を造りて、強て趣向をそのうちにて、工風なさまくなしたり。いと鳴呼なるわざならずや」と論断せり。

是の如きは小説神髓の唱道せる新旨義なりき。其の説く所必ずしも正鵠を得たりと謂ふべからず。其寫實の意義の偏狹に失したる傳奇及ノベルの並立を認めざる心理的描寫を過重したる又心理的描寫の適用せられ得べき小説の如何なる種類なるかを究めざる理想小説の眞價を認むることを欲せざる今日より見れば疑はしきふし少からずと雖も是れはた舊來小説に對する反動として已むを得ざるの弊なりしならむ。若し夫れ淺近なる勸懲の定型を株守し善惡應報の圓滿なる結局を須要とし其人物も事件も徒に抽象形式に拘泥して具象自然を抛却せりし當代の小説界に對し寫實と自然との重すべきことを訓へ心情内部の陰密なる過程を穿覈することの外界事件の慘憺たる經歷を描くことよりも遙に小説の體を得たるものなることを示し我が昏昏たる小説界をして十九世紀文學思想の曙光に接するを得せしめたるものは實に是小説神髓を以て破天荒となす。

書生氣質は逍遙が小説神髓に説くところの理論に本きて寫實小説の紛本を世に出せるものと見ることを得べし。されば是小説は其審美的價値は措て問はざるも明治小説の新紀元を開きたる過渡時代の産物として極めて重大なる歴史的意義を有せるものと謂はざるべからず。逍遙著はす所の小説尙妹と春鏡内地雜居未來の夢等の數種あり。皆書生氣質と均しく寫實を主とせるものなり。逍遙一度筆を寫實小説に染めしより名聲倏ち都鄙に喧傳し其例を學び其跡を追ふもの亦比々として輩出せり。是に於てか舊來の小説は頓に其影を潜め世又勸懲を言ふもの無きに至れり。文體に於ても從來の馬琴春水三馬等の舊套を襲ふもの少く寫實に相應はしき種々の新體を創むるものあり。明治小説は是の如くにして其二期に入れり。

第三 明治小説の第二期

明治小説の第二期は一言すれば寫實小説の全盛時代なりと謂ふを得べし。二十年より二十八年の頃に至る前後凡そ十年に跨る。

是寫實小説の系統を尋ねれば前章にも一言せし如く遠く其源を元祿時代の浮世草子に發し中ごろ傳奇小説の爲にけおされて三馬春水一九等の戯作に於て僅に其俤を止めしを省きては明治十八年頃までは殆ど其形影を存せざりしが坪内

逍遙が小説神髓出でてより、俄に其勢を得、忽にして化政以來小説壇を壟斷したる傳奇小説を厭倒して、優に文學世界の重要なる勢力と化し來れり。言ふまでも無く、傳奇小説も亦西洋文學の影響によりて多少改善の效を奏し、一部の社會の嗜好を繋ぎしもの無きに非ざれども、勢甚だ揚らず、到底寫實小説に對壘して相拮抗する能はざりき。二葉亭四迷の浮雲は、是時代の先鋒として顯はれたり。

逍遙が書生氣質は、其根本的精神は素より寫實的なりしが、其文體、意匠等に於て多少舊傳奇小説の風ありしが、『浮雲』は、則ち然らず。其思想、文字共に、全く舊圈を脱し、眞個新時代の産物なるの觀あり。即ち人物の性情を主として脚色を主とせず、故に其規模、結構に於ては、從來の作に比すれば、遙に狭少なれども、而かも事皆人情の自然に基けるを以て、宛然一個の有機體を爲す。夫の強て理義を牽索し、附會杜選の趣向を專とするものに較ぶれば、其優劣の差、決して同日の論に非ざるなり。

越て二十一年、硯友社の一派、其機關雜誌『我樂多文庫』を發行し、盛に創作の筆を執れり。硯友社は當時明治時代の教育を受けたる青年文士の會合にして、其社員は概ね英語若くは獨逸語を解し、多少西洋學にも曉通せる才子なり。されば彼等の

作爲せる小説は、おのづから彼邦の風尚を貴び、叙事、寫景より文辭記號に至るまで、主はら洋風を模寫するに至れり。さしも寫實的傾向の旭日の勢ありし當時なれば、其作殊に青年讀者の間に行はれ、硯友の一社は、暗に文壇の梁山泊を以て、目せられき。其牛耳を執りしものは、尾崎紅葉にして、川上眉山、巖谷漣、渡邊乙羽、江見水蔭、石橋思案等、後年隆々の聲名を文壇に馳せたるもの多く、是社より出づ。されば硯友社は實に明治小説史に於ける一大勢力なりと謂ふべし。

同じ年に山田美妙が『夏木立』出づ。こは武藏野、柿山、伏等三四の短篇を合綴したるものにして、其文章は、硯友社一派と均しく、言文一致、躰なり。是書載するところ、意匠、嶄新にして、文字亦瑰奇富麗を極む。其景物を叙するや、盛に聯念、照繳の巧を盡して、之を脩飾し、切りに直喩、隱喩、若くは間々活喩等を使用して、讀者の奇を好むの心を樂ましむ。若し夫れ其想に至りては、遂に浮雲の渾然自然に近きに及はざること甚だ遠し。然れども、美妙の名是より人の知る所となれり。

硯友社及び美妙の作出で、より言文一致を學ぶもの漸く多し。美妙が國民之友附録に掲げたる『蝴蝶』、紅葉が新著百種に掲げたる『色識悔』、皆之れ二氏が當年の傑

作一時世人の喧傳せし所のもの、而して其文體を問へば、何れも言文一致體ならざるは無かりき。そもく、是の如き異様なる文體の起りたるは何故ぞや。蓋し文體は思想によりて規定せらるゝ形式なり。今や我文壇は古來未だ曾て有らざりし一種特殊の思想を経験せり。如何にして是自然の情想をありのまゝに描寫することを得べきか。寫實的小説は時尚の赴くところ、如何にして寫實することを得べきか。古來の文體は粗笨に非ざれば緩漫未だ縈紆九回の情理を曲盡し、寸鏘分銖の精微を描破して、其の眞に迫り實を盡すこと難し。果して然らば、吾等は如何にかして他の新しきかゝる目的に適應して遺憾無き文體を求めざるべからず。言文一致體は即ち是目的に對する一の試験に、外ならざりしなり。是文體は年を追ふて圓熟に赴き、今日尙小説の一文體として生存し、國文の範圍爲に一層の廣袤を加へ得たり。紅葉、美妙諸士が創始の功業、決して没すべからざるなり。

然れども言文一致體は、動もすれば含蓄餘情に乏しく、簡淨輕妙の姿少し。圓轉自在は、則ち之れ有り、と雖も、風韻雅致は、即ち未だし加ふるに、語尾句末、常に單調に流れやすきにつれて、自ら強健奇拔の風を缺く。且、通常の談話に、近きを以て、品位

足らずして、卑近に陥り易し。是に於て、か言文一致體の弊を認めたるものは、更に之を補充するに、足るべき新文體の工夫に、苦心せり。之れ紅葉露伴二子が西鶴調に基ける一種の雅俗折衷體を、糺造したる所以なり。是れ西鶴的文體が婉曲暢達にして、而かも遺勁に、文字淺近にして、而かも餘韻あるは、尤も社會的は、た平民的事物を直寫するに、適するが爲なり。露伴が風流佛及葉末集、紅葉が伽羅枕、三人妻以下の作、多くは西鶴躰によれり、是より言文一致躰漸く衰へて、西鶴躰漸く行はる。文躰に於ける西鶴調の流行は、端なくも、元祿文學の研究を、催起せること、及び、そが更に我小説に及ぼせる影響の如何は、歴史上頗る注意すべきことならむ。心形を制するが如く、ば形亦た能く心を制す。夫の筆を執れば、書を思ひ、絲竹を執れば、管絃を思ふは、すべての事物に於て、當に然るべき所なり。元祿文學の研究、漸く熟し、老西鶴の輕妙なる文致の、いたく我小説家を、感動せしめしや、又、そが花柳色情の社會を通じて、人間の煩惱界を描きたる、銳利なる寫實の筆を、味ひしや、更に、又、之れを、摸倣擬似して、文情の相應は、しからむを、求めしや、彼等は、果して、知らず、識らず、西鶴的思想の誘致する所とならざりしか。吾等は、少くとも、紅葉に於て、強ちに、然ら

ずと否む能はざるを認む。見よ紅葉の傑作と稱せらるゝ伽羅枕、二人女、三人妻等の如き其文筆の尤も西鶴的にして鍛鍊を累ねたるものは皆之れ花柳の痴情肉慾の世界を寫して尤も西鶴的なるものには非ざりしか。然るに降りて二十八九年の彼が作は文筆に於て全く西鶴を離れたると共に、意想に於ても亦全く西鶴を離れたるを見ずや。されば吾等は紅葉當年の傑作が文に於て西鶴的なるを問はず、只其想に於て其然るを悲まずむばあらず。

若し夫れ露伴は紅葉と等しく寫實の流を汲みて、而かも其趣を異にすること猶同じく西鶴に私淑して其文、那の如く異なるが如し。紅葉の小説は主として無意にして當眼の事物を觀察し、性に近きところに隨て之を筆に上ぼす。若し紅葉が假作的人物に於て作者たる彼の面かげ映れりとせば、そは彼が狹隘なる主觀の倒影ならむのみ。必ずしも一定の意志を挾て性を造らざるに似たり。露伴は則ち然らず。聞説むく彼嘗て人に語りて曰く、人々の特色無かるべからず。物に觸るゝ毎に化せられて自己の特質を沒了し、彼の紺色の如き曖昧雜駁の色となり去るが如きは、人の屑とせざるべき所なりと。惟ふに、彼が著作はあしなべて是

種の個人主義に據りて製作せられたるには非ざるか。吾等の見る所を以てすれば、子が作には常に一個の觀念と名くべきものを有す。例へば風流佛の如き、一口劍の如き、はた又五重塔の如き、皆之れ殆ど同一のモラルを以て之を貫けるものには非ざるか。即ち一念の強さは岩をも穿つべし、一念にして屈せず、撓まざれば、外來の勢力又吾を奈何ともすべからず、精神一到何事か成らざらむの意を鼓吹せるものと見るを得べからざるか。是の如く意を重ずるは、子が作に於て見遁し難き特色なり。是を紅葉が作に比すれば、やゝ單調一律の嫌無きに非ずと雖も、其一條の生氣全篇を通じ、凛乎たる道念の犯すべからざるもの存するの點に於ては、夫の散漫なる若くは狹隘なる主觀的寫實に比すれば、寧ろ遙に優れるものありと謂はざるべからず。然れども子が作特色あり、圭角あり、其文筆亦まゝ、嶮奇解し難きものありしが爲めか、一般社會の嗜好は紅葉に比すれば遙に其下にあるものゝ如し。とにかく廿五年の頃に至るまで紅葉は寫實小説の高潮に駕し、殆ど一世の風尚を占斷せるの觀ありき。

是時に當りて傳奇小説は紅葉露伴の氣勢に避易して一時其顔色無かりきと雖

も其命脈は決して絶えたるに非ず。須藤南翠が照日葵、黄雛、鷗、月夜、宮崎三味、桂姫、末廣、鐵鷹が南洋の波瀾、村上浪六が三日月、女の助、並に矢野龍溪が浮城物語は遙に經國美談の系統を紹きて、暗に寫實小説に對峙せりき。傳奇小説に與するものは、當代の寫實小説を以て規模偏僻にして雄渾跌宕の姿無しとなし、寫實小説を賛くるものは、以爲らく形骸の大なるもの精神必ずしも大ならず、性情の幽微を盡したるものにして初めて大小説と謂ふべしと。當時の世評は概ね寫實派に傾き、未だ二者各々獨得の長所を有して、永く小説界の双關たるべきものなるを覺るに至らざりしに似たり。

遮莫。さしも全盛を窮めたる紅葉一流の寫實小説は今や漸く衰頽すべき機運に迫りたり。そは所謂寫實小説其物の凋落せるにはあらずして、當時の小説に現はれたる言はゞ似而非寫實が自家破滅の原因を其中に包藏したればなり。真正の寫實は無私無我なること、須らく大自然の如くなるべし。彼に親しくして此に疎きことあるべからず。況むや已に近きものを揚げて已に遠きものを貶するをや。其の絶對平等の見地に據りて世相物性を看破するや、眞假なく、美醜なく、理想

として獎むるもの無く、非理として斥くるものも無し。渾然として天地の心に同化し、物と我と主客に於て隔つるところ無かるべし。是れ寫實の理想にして、詩人小説家は是境地に到りて初めて其圓滿を稱すべし。是の如き古來千百年にして一人無し。世の所謂寫實は單に自家の個性にして意識の中にあるものを除去し、冷然として等々の觀察を爲すものを謂ふ。よしや意識的個性は務めて之を排くことを得べしとするも、個人は遂に個人たるを免れず。自己の依て以て自己たる所以の性格は特質に至りては自我其物を滅却するに非ざるよりは、安ぞ之を解脱するを得むや。是故に人は遂に其主觀を離るゝこと能はず。意識的に純客觀的なるものも無意識的には純主觀的なるを免れず。是意味に於てあらゆる詩人小説家は其の寫實的なると否とに關らず、悉く主觀的なりと謂ふを得べし。只是主觀の大小廣狹は其品等高下の別るゝ所以なり。

今夫れ明治二十年より二十五年頃までの小説家は、そが先頭たる紅葉を初めとして、多くは狹隘なる主觀を有せる寫實家なりき。其觀察いかにも従前諸作家の較ぶれば疑も無く、自然實際の域に近けり、又そが作意の中にもあらはに勸懲褒

貶の意を寓せざりき。然れども是れ極めて偏窄なる主觀の眼孔を通じて見たる自然實際なりき。故に其作中に表はれたる人生世相は殆ど作家が主觀をば自己の貧少且偏頗なる閱歷に倒照したる小人生觀に外ならざりき。是れ豈永く經驗教育ある世人の嗜好を繫住して能く恒久なることを得べきものならむや。其の無味放埒に浮艶淫靡なる製作に對して社會は漸く倦厭の色を示し來りたりき。村上浪六が所謂撥鬢小説、黒岩涙香一派が探偵小説は是風潮の前驅にして、泉鏡花、川上眉山、小杉天外等が所謂觀念小説は其後殿たり。是を明治小説の第三期に到るの變遷時代となす。左に其大勢を略述すべし。

吾等の思惟する所によれば所謂撥鬢小説の一時非常の流行を極めしは、主として從來の寫實小説の柔弱平板、狹偏單調に對する一の反動なるべしと雖も、又其任俠剛毅にして而かも風流韻致に富める、三日月次郎、吉井筒女の助、一流の人物、性格のいたく我國民の性情と調和するものありしに依らずむばあらず。蓋し任俠義に勇むは我國民の特性にして、夫の武士道なるものと其本を同ふす。一言の然諾を重じて甘じて身命を抛ち、苟も己を知るものゝ爲には水火に入るを辭せず。濶

達物に拘らず、僞儻情に泥まらず、而かも一度び感激すれば一念赴くところ、鐵石を貫く。是れ豈我國民の情悦羨仰する所の人物にあらずや。夫の自由と云ひ、民權と云ふが如きは嚴峻なる形式によりて組織馴致せられたる、我が社會人情と容れざる所多し。然れば、俠客勇士の事蹟は上下を通じて嘆美措かざる所なり。浪六是俠客傳の久しく中絶せるを捉へて、茲に其奇矯、遒勁なる筆を鼓して之を描く、寫實小説につかれたる讀書社會の滔々として一時之に謳歌したる、素より怪むに足らざるなり。

然れども浪六の描くところ、千篇一律。文字の洒落、脚色の嶄新を銜ひ、又情操の拘すべきもの少し。其人物も亦面に磊塊不羈を裝へども、性格概ね卑淺に流れ、加ふるにまゝ、淫猥面を掩ふものあり。文字亦杜撰孟浪、生硬を以て意氣となし、晦澁を以て餘情となす。されば幾もならずして名聲地に墮ちたるもの、素より其所なりと謂ふべし。坪内逍遙が當時小説、學校撥鬢科の教則を早稻田文學に掲げたるもの、善く其弊を抉摘して痛切なり。其二三條を左に轉載す。

一本科の作家たらむものは、筆先にて人を殺すこと、練馬大根を切るが如く心得

べきこと、總じて死、自殺、血、美女、意氣地、磊落、不羈などいふ想像を斷えず念頭に蓄ふべきこと。

一總じて寛活なること、すごいこと、すばらしいこと、強いことに心を注ぎ、兼ねてやさしいこと、あはれなることに留心すべきこと、所詮剛柔の二面を常住の心得といたすべきこと。

一「鬼の目に涙」「一寸の蟲にも五分の魂」「武士は喰はねど高楊枝」「柔能く剛を制す」などいふ諺を、毎朝百遍づゝ唱へてよく／＼服膺すべきこと。

一言葉使ひは、モサ言葉を男子の理想的とすれども、今更に死語を恢復すべきものにあらねば、只精神を彼れにとりて今様の言様を用ふることに。

一總て奴といふ尾語を添へ用ひて、憎々しげに物すべきこと、「うぬ美人め」「うぬ天人め」「うぬ幸福め」「うぬ風流め」「うぬ文學め」の類なり總じて喧嘩口調をよしとすること。

撥鬢小説漸く衰へて探偵小説行はれし頃に到りて、小説は其墮落の極に達したり。勢極まれば必ず變ず。文學社會は是に於て端なくも最も健全に、且最も多望

なる風潮を小説界に喚起したり。何ぞや。歴史小説を求むるの傾向即是れなり。

吾輩は茲に歴史小説に就て十分の意見を吐露するの違なきを恨とす。其性質由來及び是傾向の原因に到りては、他日詳述するを期すべしと雖も、吾等は今世紀の前後に跨りて歐洲各國の文學世界を振盪したる所謂 *Romantik* の趨勢に似たるものあるを認めずはあらず。佛蘭西の大革命及び之に續きたる拿破翁の併呑主義に反對して、各國民族が其團結と平和を維持するの必要に迫りたるや、そが保姆となりて安慰と獎勵とを與へたるものは、所謂 *ロマンチック* 文學なりき。彼は *カンケルマン* より *ゲーテ*、*シルレル* 一輩に至るまで、多少感染するを免れざりし古代希臘の崇拜摸倣に反對して、中世紀に於ける羅馬民族の風尚を思慕し、當代社會の凋弊枯燥なる原野に、中古文學及び宗教の縹緲典雅なる花卉を移植せむと務めたり。是一種保守の反動が、*バイロン* 一輩の新思想に打破せらるゝに至るまで、歐洲文藝の世界に又ぼしたる効果の見るべきもの、一にして足らざりき。シレーゲル兄弟を初めとして、*クライスト*、*シャミッソー*、*ウーランド*、*リュックケルト* 等の獨逸に於ける。*カラムジン*、*ブシキヤン*、*レルモントフ* の魯西亞に於ける。*マンツォーニ*、*レ*

オバルヂの以太利に於ける。スコット及び湖上詩人の英吉利に於ける。はた又ラマルチン、ユーゴ、ゲーテの佛蘭西に於ける。皆是大潮流の所産に外ならざりき。今是を我邦に比ぶるに、事跡の大小素より同日の論に非ずと雖も、維新以來物質的勢力の増加は、我國民の詩的生活の範圍を削減し、人情は古代の敦厚溫籍に遠かりて、日に刻薄冷淡に流れ、風俗も亦隨ひて淳樸を失ひて、漸く浮華に赴けり。社會の鏡たる文學は、明に是を示しぬ。あはれ過ぎにして昔の慕はしきかな、已むなく、いは今を捨て、古を取り、乾燥なる功利の世に、高雅なる古の人を現はせよかし。是れ意識的には、た無意識的に一般社會が小説に對するの渴望には、非ざりしか。似而非寫實小説衰へて撥鬢小説起り、次いで歴史小説の出場を望みたるは、小説其物の性質自然の變遷なるべしと雖も、そもく又是懷古的風潮の暗流に乗じたるものに非るか。

然れども悲しきかな。明治二十七年の前後に於ける歴史的小説の渴望は、遂に醫せられずして已みにき。夫の『瀧口入道』の如きは、小説と云はむよりは寧ろ抒情的敘事詩として見るべかりき。村井、弦、齋、暎、塚、麗、水、塚、原、夢、洲、諸子が作には、殊に言

ふべきものあらざりき。是れ時か勢か、又は機未だ熟せざるが爲か。吾等つらく我邦の状態を察するに、後年に至りてロマンチック文學思潮が土を捲て再來するの時あらむか。明治文學の最盛期は、蓋し其後に來らむ。

吾等は本論を叙述するに當り、櫻庭、篁村、森、鷗外、須藤、南翠、巖谷、連、森田、思軒、廣津、柳浪の諸子に及ばざりしは、他の故あるに非ず。ロマンスト、ノベルとの消長は、明治小説史の大勢を決する主要なる事實なるを信じたるを以て、主として是に着眼したるに因る。篁村は其思想、文跡に於て寧ろ守舊派に屬するもの。其文藻は其脈を浮世草子、氣質物及び三馬、一九の戯作にとりて、更に明治の新衣を裝ひたるもの。輕妙洒脫他の摸倣すべからざるものあり。『堀出しもの』、『當世商人氣質』及び『竹載』の諸作は、舊文學の殿將として一種の異彩を明治文學に添へたるものなり。鷗外は素獨逸の文學に精通するもの、其着想、文致共に他に異なるものあるは、其の親むところに私淑したるの致す所ならむ。『舞姫』、『空象の記』、『埋木』等は、紅葉、露伴の外に獨得の風趣を保ちて、永く後代の珍となすに足る。且獨逸文學輸入の端緒は、實に子によりて開かれたるものなれば、讀書社會の子に負ふ所亦

少しとせず。南翠は、リットン卿の小なるものか。其の時と共に推移して文藝思想を改易したるの點に於て、歴史小説、罪惡小説、世話小説、冒險小説の作者なることに於て、其の脚本作者となりたることあるの點に於て、又其の俗間に多數の愛讀者を有したるの點に於て、酷だリットンに似たるものあればなり。巖谷漣は素硯友社の秀才、其の作る所清妍瀟洒情致きよくして高く、文字亦輕妙纖麗なり。可隣無邪氣なる少男女は、其の最も得意とする所「友禪染」がね丸「董日記」近くは「伽羅物狂」の如き、其得意の作ならむ。然れども子は遂に當時は紅葉と共に其狹隘なる主觀的寫實を顛脱する能はざりしもの、如し。森田思軒は外國文學の翻譯家として知らる。「探偵、ユー、ベン」「替使者」「月珠」「哀史」等は英文によりてユー、ゴ、ザ、エル、ヌ、コ、リ、ン、ス等の作を譯せるもの、文體は和漢折衷體なり。粗大の文字を以て能く情綴の意を傳ふるの才ありと稱す。其門末の輩はユー、ゴ、の輸入者として子を崇拜すと雖もロセッチにして初めてダンテを註解することを得たりきと聞き傳ふる吾等は、佛文を解せざるもの如何にしてユー、ゴ、の真趣を傳へ得たるべきかを驚くのみ。二十六年以前に於ける廣津柳浪は其名甚だ高からず。然れども「五枚

姿繪」の如きは、さすがに子が久しく囊中の物にあらざることを示して、遂に今日の全盛を豫告したるもの、如し。

任他浪六小説探偵小説、つぎ／＼に寂れゆきて、さしも渴望の聲高かりし歴史小説亦遂に出でず。明治の小説は、遂に其觀念小説を歡迎するの時期に達せり。

是時に當りて日清戦争起り、年を越えて尙戢まず。一般文學は一時社會耳目の外に抛擲せられたるの觀あり。然れど其の純文學に及ぼしたる影響は何等恒久の性質を帯びざりしが、如し。社會の上層より下層に至るまで、政治宗教學術の上に於て那の如き大勢力を有したる世界的戦争の大勝利が、詩歌小説の上には何等著大の關係無かりきと謂はゞ、是れ頗る奇怪の言なるが如しと雖も、吾等は我國民の審美的意識の實に斯の如きものなりし事實を認むるを奈何せむや。そも／＼我國の文學者は概ね超世脱俗の氣風を有し、文學の本領を以て、全然出世間的なるべきものとなし、人生世相に密着して、共に俱に向上精進の道を踏むべきものなることを思はず。是れ主として勸懲主義一度び仆れてより寫實的小説家及批評家の擧げ Art for art 主義を推奨したるの結果なりとす。其極彼等は道念宗教を無視

し、社會國家の時事的問題の如きは詩歌小説の材料として最も排斥するの傾を生ずるに至れり。甚しきに至りては實驗を名として不義を行ひ、恬然として羞耻せざる小説家あり、世人亦太だ之を怪まざりしもの、如し。是を以て廿五年井上博士の宗教教育衝突論が一世の耳目を聳動し、哲學宗教の間に健全なる國家的精神の成立を見るに至りし際にも、我濟々たる小説家は冷眼にして之を看過し去りき。王師海を越えて西に動き、一國を擧げて國家的精神の大運動を見るに至りし時も、二流以下の作家に成れる淺近なる戰爭談の少數を省きて、一人の愛國義勇を唱ふものあらざりき。吾に是の如き詩人無かりしのみならず、戰爭に關する著作を出すものを貶して際物師と云ふに至ては、吾等は殆ど言ふべき所を知らざるなり。是千載一遇の時機に臨みて一人のアルント無くケルメル無し、恨事ならずとせむや。

吾等は人生と爲す所無きの文學を要せざるなり。人生は一のみ。空靈幽玄なる理想を唱ふものは、何が故に且暮往來の世事を歌はざる。ゲーテが其母國の運命に冷淡なりしを以て誰かアルント、キルメル、ツケルト、ウーランドを詩人

ならずと謂ふか。 *Walschner* を唱へたるニコラウス、レーナウは熱心なる愛國詩人なりしに非ずや。吾等は我詩人小説家の社會國家に冷淡なるを見て、文國亡國論の強ちに齊東野人の語に非ざるを認む。

然れども去るものをして去らしめよ。戰爭文學は明治の小説史に於ける一のエピソードに過ぎざりき。残るところのものは依然として似而非なる寫實小説と浪六小説の殘影とに過ぎざりき。所證、觀念派は是虧漏を衝て時向を滿たすべく勃興せり。泉鏡花が「外科室」、川上眉山が「うらおもて」、廣津柳浪が「黒蛭蟻」等は其派の代表的著作者として見るを得べし。之れ實に明治二十八年なり。是に於て明治の小説は其第三期に入る。

吾等は茲に筆を擱くべし。觀念派の性質缺點、其の小説史上に於ける意義等は、今茲に述べざるべし。

觀念派の起りて後、小説界は如何に其局面を一變せしか。舊來の寫實家は如何に其影響によりて、心理的傾向を生せしか。深刻悲慘なる小説は、何が故に、特に是間

に起りしか。幾多の作家は如何なる氣勢に驅られて其のデビューを爲したりしか。殊に明治の才媛故一葉女史の天才は如何に當代を風化せしか。抑も、観念派は如何にして衰へたるか。如何に社會問題に關聯せる新小説は起り來るべきか。社會問題と自然派と抱合せるの結果如何に厭世主義の文學を催起するの傾向あるべきか。明治の小説は是展轉反側の間、如何に國民的性情に基ける國民文學を形成するの道に進みつゝあるか。是れ次に來るべき問題なり。他日を待て論述するの時あるべし。

(廿年六月)

所謂社會小説を論ず

上

何時何人が言ひ觸れけむ文壇時に社會小説の聲を聞くことあり。そも社會小説とは如何なる種類の小説ぞや。何の小説が社會の出來事を描寫せざるものぞ。今の所謂社會小説とは社會の如何なる出來事を寫せるものを云ふか。その明確なる概念を得むこと稍々難しと雖ども吾等の察するところに因れば社會進化の上に於て必然の結果とも稱すべき社會的勢力の不均なる分配に對する弱者の反抗をとりて其の主要なる資材とするところの一種の小説と見て大過なきが如し。

希伯來の經典の初めに晝と夜とを別ちし主義は均しく萬有發達の原理なり。

社會進化の過程に於ても平等無差別の發達は到底是世には見るべからざるなり。所詮是の限りある地上の資力の上には是の無制限の所縁を宿す自から競争無きを得ずおのづから強弱あらざるを得ず自から利害相異なるもの無きを得ず。自ら

適者生存し、不適者滅亡せざるを得ず。是れや、上は人生寄托の最高形式たる國家より下は一個人に至るまで、免れがたき制約なりと言ふべからむ。

今世紀に入りて、物質的文化が過重なる勢力を社會に得てしより、是の如き差別はいよいよ激しくなりて、社會的生活は多數劣者の幸福を犠牲にするに非ざれば、其の進歩の過程を繼續する能はざるの勢を示せり。幾多の宗教的はた道徳的運動は、是の缺陷を補充せむが爲に平等博愛の旨義によりて、其の事業を作興したりと雖も、嚴峻なる國家的制度の下にも、とより多く其の効を見得べくもあらず。一部の貧民、孤兒、及び不具者に對する幾分の保護は、政府の事業として爲されざるもの無きに非ずと雖も、是れはた多く言ふに足らず。社會進化の大勢は經濟問題と相並びて、文化の傾向を速むるにいたれり。

國民の利害を同一ならしむと稱せられたる貿易だに、輓近は漸く國家的となり國家、宗教の異同は、物質的利害を超えて、感情上、殆ど絶對の勢力を有し、人種の競争は世界の到るところに行はる。蓋し之れ十九世紀の末葉にいたりて、國家が其の生存の制約に於て、一生面を拓くの必要を自覺し、來りたるの結果に外ならず。今

や方に夫の世界平等主義の如きものを、前代の迷妄として埋葬し、了るべきの時期に到達せり。即ち國家主義の各國に唱へらるべき時期に到達せり。

國家主義は、國家を以て人生の至寶となし、隨て其の發達進歩を以て國民最高の義務なりとするものなり。もとより之れ個人を蔑視するものに非ず、却て國家の富強を以て個人の幸福の唯一の所依なりとするの確信に本く。是を以て國家主義は國家の幸福に對する貢獻の多少によりて、事物存立の意義及價值を認識す。國家は生命を有し、目的を有し、又之に對して實行の勢力を得むことを希望す。是の如き國家的大運動に一致して、其の行動を規定するものにして、初めて國民として、其の義務を盡し、其の幸福を享受することを得べし。是點より見る時は、平等博愛を旨とする所の一切の宗教及道徳は、所謂國家の友に非ずと謂はざるべからず。是見地に據りて、所謂社會問題と稱するものを見れば、則ち如何。吾等は毫も國家事業として、當に社會の劣者弱者を保護すべき何等の理由を見ざるのみならず、社會進化の必然なる結果として、國家的活動の勢力となる能はざるが如き、不能者に向て彼等に値せざるの利益を惠與するは、國家全體の幸福の上に於て、斷然有害

無益なりと思惟するものなり。感情の要求するところは必ずしも徳義にあらず。人生の組織其の複雑を加ふるに隨ひて、道徳に沈思を要し、義務は比較を要す。單純なる本能が道徳的行爲たるを得たるの時代は、永く既に過ぎ去れり。更に是の如き點より所謂る社會小説を觀察せば則ち如何。

下

今の所謂る社會小説を見るに、其の富者を描き、貧民を描き、犯罪の由來を描き、兇行の情狀を描くは善し。勞働社會の憫むべき困厄を描き、傭主資本家の惡むべき恣睢を描く、亦可なり。社會外部のもろくの關係が個人の内心に影響したるの結果として、幾多の偶生的罪惡の實現と、之に對する必然的迫害とを描く亦不可ならず。死活問題の嚴肅なる危機に際し、所謂る生存の意志が無限の制裁を有するの事實が、社會の缺陷として描かるゝ亦可なり。將又是の如き制裁に服従する個人の行爲が不徳不法として描かるゝ亦甚だ可ならずとせず。而かも一個の小説家として、人生世態の客觀的描寫を旨とするものは、至公至正なる見地に據り、當眼

の現象に惑はずして、社會的活動の真相に看到せむことを要す。社會問題を對象とする所の小説は、社會道徳に尤も密接なる關係を有する所の小説なり。是の如き小説の作家は筆を執るに先ちて自己の嚴肅なる實踐道徳に接觸せることを自覺せむことを要す。是れはた社會の一員として、文學者が當然恪從すべき須要の制約ならずむばあらず。借問す、今の所謂る社會小説を作る者は果して是の覺悟あるか。

吾等の觀る所に於て、大に謬らざるは、今の社會小説と謂ふ所のものは、作者が一種の私心に於いて、僅に社會生活の偏頗なる一面を描き得たるものに非ざるか。換言すれば、殊に社會の不幸なる階級に同情し、是の如き不幸の因縁を以て、外圍の境遇に歸せむとしたるものにあらざるか。是の如くにして、社會の組織、軀制に免れざる幾多の缺陷は、個人的罪惡の辯解として描寫せられ、隨て社會的勢力の過重なる分配を制し得たる一半の階級は、殆ど社會的罪惡の根蒂として觀察せられたるに非ざるか。是の如きは小説として、價値無きは素より論を待たず、吾等は社會道徳の不健全なる暗潮を代表するの文學として、大に之を排斥せざるを得ず。

等しく生を是世に享けて國家を共にし、社會を同うす、誰か同胞の不幸を見て之を憐まざるものあらむや。吾等は若し出來べくむば、一切衆生に向て平等の慈悲を分たむことを望む。然れども人は一定の歳時に生まれ、一定の方處に住す。生存の制約に於て極めて狹隘なる規定を受くるを免れず。是に於て事に先後の序あり、義務に輕重の差別あり。人情自然の發動に任じて、輒ち完全なる道德的生活を現せむこと、亦難しと謂ふべし。吾等は是點より、世の所謂、慈善的行為を以て、適當なる調攝の下に於て、非ざるれば、決して世人の思惟するが如き、道德上の價値あるものに非ざることを信ず。

世の所謂る社會問題を論ずるもの、動もすれば貧弱者を庇保せむとするの餘も、一に罪を富強者に塗抹し、進て社會制度の改革を獎勵せむとするの口氣に出づるもの少からず。是の如きは社會生活に對する或る根本的曲解に出づるなからずや。勞働、犯罪、土地、人口、貧民等の問題は、經濟上のそれに伴ひて、洵に憂世者の甚深なる省察を要する所なり。然れども是の如き問題の解釋は、更に他の高上なる問題の解釋によりて制限せらるべきものには非ざるか。吾等は國家主義を以て是

の如き高上なる原理なりと思惟す。

夫の無見識なる小説家者流が、個人の罪惡を外圍の境遇に歸し、以て社會の缺陷を排斥するを以て詩的なりとなす、尙ほ一面の社會觀たるを失はずと雖も、其の道念の卑近幼稚なるは、則ちむしろ憫むべしとなす。是の如くにして、催起し得たる下層人民の怨嗟反抗は、果して何物に終るべきかを思へ。嘗に彼等の生活状態を、進捗するに力無きのみならず、却て自己の放てる矢によりて、傷けらるゝ無くむば、幸なり。是れは、た決して他面に於て、富強者の反省を促がす所以にもあらざるなり。

若し道德を以て責むべきものを云はゞ、富強者須らく先にして、貧弱者須らく後なるべし。吾等は素より富強者に向て、道德上十分の反省を要む。而かも、強力即ち權利なるの社會にありて、是の如き反省は、貧弱者の服従によりて初めて得らるべきものにはあらざるか。吾等は社會進化の過程に於て、其の勢力の不均なる分配を受けたるものが、彼の強力に對して、應分の服従を示すを以て、彼等の幸福を享受せむが爲め、當然の要務なりと思料す。之れはた社會の秩序を維持し、人生の

幸福を進むるに於て缺くべからざるなり。
 今○の○所○謂○る○社○會○小○説○は○貧○弱○者○に○訓○ふ○る○に○服○從○を○以○て○せ○ず○し○て○反○抗○を○以○て○し○犯○
 罪○者○に○訓○ふ○る○に○悔○悟○を○以○て○せ○ず○し○て○遂○非○を○以○て○し○不○幸○者○を○導○く○に○救○濟○の○法○を○以○
 て○せ○ず○し○て○破○壞○の○道○を○以○て○す○之○れ○雷○に○社○會○道○徳○に○裨○益○す○る○と○ろ○な○き○の○み○な
 ら○ず○又○彼○等○の○爲○に○眞○摯○な○る○伴○侶○と○稱○す○る○を○得○ざ○る○な○り○

之を要するに吾等は今日の所謂る社會小説を歓迎する所以を知らざるなり。

(卅年七月)

支那文學の價値

支那文學の價値如何。今日に於て是の問題を提起す、吾人其の無益に非ざるを信ず。

近時青年漢學者の支那文學を論ずるもの甚だ多し。是れ學界の慶事なり。然れども人は各々其の學びたる所に偏し易し。獨り其の好む所に媚悦するは則ち妨げなしと雖ども、苟も往を料りて來に資し、我國民文學の發達に貢獻せむと欲するものは、須く胸襟を濶大にし、公正なる批判を以て之を評價せむことを要す。吾人は今の青年漢學者が是覺悟を以て其の筆を執らむことを希望す。

支那文學素より特性異彩を有す。然れども特性異彩必ずしも尙ぶべきものに非ず。其書冊の富贍、歴史の悠遠、詩文人の饒多、誰か之を争はむ。然れども之れ價値問題に於て何かあらむ。其の我文學と二千年間の抱合は、歴史上極めて重大なる意義を有すること素より明けし然れども、今日以後日本文學は尙ほ其文字思想を、支那老帝國に仰がざるべからざるか。國民文學の同化力以外に於て支那文學

は尙ほ其活力を持続し得べきものなるか。今や日本の文化は支那と其性質一ならず又其發達の方面に於て殆ど對角線的反對をなせり。是時に於て吾人は吾人の支那思想に對する態度を奈何すべきか。苟も本邦文學の前途に對して顧慮するものは常に這般の問題に想到せざるべからず。

是問題の解釋は即ち支那文學と本邦文學との未來の關係を決するものなり。吾人今支那文學の特質を觀察して是問題に關する吾人の位置を考定せむ而して是目的の爲に支那文化の一般の性質を瞥見せむ。

そもく自ら中國中華と號し、一切他邦を輕侮して戎狄蠻夷と卑めたる支那帝國は亞細亞大陸の東部に位し、面積歐洲より大に、人民は世界人口の三分の一に當る。建國以來凡四千年、其文學、歴史、經典は世界に於て最古なるものの一なり。

是老帝國の古代史を讀みたる人は、誰か其現状の未開、蒙昧に驚かざらむや。今日の支那と先秦兩漢若くは唐宋の支那と其人文の程度に於て幾何の差ありとするや。西歐羅巴の森林に羅馬の文化未だ其片趾を着けざりし時に當りて、已に榮然たる文物制度を有したりし國民は、伯林、巴里が世界文華の中心となれりし今日

に於ても尙ほ依然として其故態を改めざるなり。而かも其歴史は決して靜平無爲の歴史にあらず、革命相繼ぎ爭奪相追ふ。獨り其人文の停滞進まざるは何ぞ。支那は國老いたりと雖も年尙ほ穉し。否寧ろ小兒の狀態にして而して老耗いたるものなり。傳ふ、老聃母胎に止まる事八十歳、生れながらにして白髮なりきと。然らば則ち老子は善く支那の國性を體現したるものと謂ふべし。

支那の文化は何故に其歴史と共に進まざりしか。其國民の性質保守的なればなり。支那の人文は何れの方面に於ても自由の發展を爲さず、一種の形式に拘泥して常に回顧退嬰に傾く。而して是の如き形式は國民が初めて將來に實現せむとする所の理想にあらずして、却て既に過去に實現せられたる法制にあり。國民の正學と稱して一般に遵奉せらるるものは儒教なり。而して儒教なるものは何ぞ。孔丘が今を去る二千數百年前堯舜を祖述し文武を憲章し、即ち所謂先王の道を演繹して後世の典謨と爲したるものに非ずや。支那人は時勢の推移と共に政教の變遷すべきを知らず、一意成憲に法りて其教義を實行せむと擬す。故に上は國家より、下は個人に至るまで、其の理想とする所は唐虞三代の國家及び個人な

り。是に於てか儒教は一種の形式主義となり文化の進歩を策する一大勢力となれり。支那民族の人文が悠々數十世紀の間何等顯著の發達を爲さざりしは實に形式主義の馴致せる保守的精神に職由せずむばあらず。

儒教は實踐道德の主義なり哲學に非ず又宗教にあらず。是主義は支那思想の正統にして常に國民的活動の中心核子なり。其體制は内外氣運の變遷に隨ひて多少の更革なきにあらず即ち三代の文化姫周に到りて其頂點に達せしが秦六王を一にするや、儒書を焼き、儒者を坑にし、世漢に入りて徳教又振はず。偶々佛陀教の東漸に際して、人心靡然として之に赴きしが、儒教の精神は湮滅せらるゝにあらざり。宋に入りて所謂の宋學派は、儒佛二教の調和を試みしが、幾もなく所謂の古學派の物興となりて、茲に周初の儒學捲土重來の勢を以て支那思潮の眞面目を發揚せり。故に儒教は其終に於ても其始に於ても支那民族が第一の實行主義たりしなり。

然れども民性に適應せざる教義は決して一國の人心を支配すること能はず、儒教の勢力は素と支那民族の現世主義に本くを知らざるべからず。之れ哲學宗教文學、支那民族は恐らくは世界に於て尤も實際的の民族ならむ。

美術の何れも明かに證示する所なり。ア、イル、ヤ人種にありても、セム、若くはハム人種にありても、太古にありては其身邊を圍繞する自然現象の高大威烈に對して、抑畏崇敬の極、所謂の自然宗教を構成せしを常とす。然れども支那人にありては、是の如き自然宗教の著しきものを見ず。支那古代の文學に天命、上天、若くは帝(天)を言ふものありと雖も、吠陀教若くは希伯來教等に於ける神の意義と大に異なるものあり。寒暑晴雨の自然現象が神爲なりとして信ぜられたるは事實なりと雖も、神が自由の意志を以て作爲せるよりは、寧ろ人間の行爲に關聯して或賞罰的の意義を有せるものとして考へられき。即ち人間は自然現象の起廢に對して、一種の能動的勢力を有し、以て能く神意を制限し得るものとして、更言すれば、人間は能く神を驅使し得べきものとして考へられき。湯王が早魃に際し、剪爪、斷髮して六事を以て自ら責めたるが如きは、印度人が天を仰て、渴仰讚美の外、他意なきと同日の論にあらざり。詩書の謂ふ所の天は多くは之れ自然の法則を表示したるものにして、孔老諸子の所謂の道と同義なるに似たり。

支那古代の文化は北方に起れり。北方の地、荒廢落莫、概ね天恵に乏し。支那人

が天を畏れ之を拜したるは、是れ人情の自然のみ。然れども、是れ民族の實際的性質は、宗教心をも現實主義の使僕となし、神を拜する間にも實際の利害を遺却せず、天威を畏るゝの傍ら、其意を迎合して、預め吉凶禍福を卜せむ事を務めたり。易は即ち是思想を表せむとせしものに外ならず。是に於てか、支那人の宗教心は、其萌芽に於て切斷し去られ、來世未來彼岸を愉快するの念慮は、全く其跡を絶ち、却て功利求福の現世主義の發達に資するのみとなりぬ。

蓋し現世の不圓滿不如意に慊焉たらずして、如何にかして如意圓滿なる吾理想に描くが如き世界を實現せむと欲するは、宗教心の根據なり。而かも吾人の理想的な世界は、是れ現世に於て到底望み得べからざるを見るや、是の如き世界は現世を超越せる彼等の未來世に存在すとなし、之に到達するに一切現世の繫累を離脱し、專念信仰の力によるの外なしとなす。是究竟の理想界を異なれ、是れ佛陀教にも、基督教にも、其他一切の大宗教に共通せる要點なり。即ち一言すれば、宗教の要素は非現世的たるに存す。支那民族は非現世的にあらずして、絶對的現世的なり。之れ是れ老帝國に宗教なき所以なり。

現世主義は、一切現世に功利なき事物を排斥するの主義なり。故に現世主義の結果として支那民族は純然たる純理哲學を有せず。易の一經は尤も高遠なる哲理を含有すと稱せらる。其の宇宙の分出を説き、萬物の進化を論ずるの部分のみを取りて之を見れば、實に易は儼然たる一個の哲學なり。然れども、是れ理の爲に理を説きたるにあらずして、實は天地人三者の關係を明にし、以て天道に隨て人福を全ふせむが爲のみ。其の宇宙論進化論を説述せる根本的動機は、現實世界の功利に存せることは、繫辭傳を一讀せば昭々として明なり。

蓋し以爲らく、天地萬有の運行し、變化し、發達する所以の道唯一のみ。大極より天地剖判し、生死以て交はり、榮枯以て繼ぐ。皆是れ同一陰陽の理が時と處と位とに隨ひ、萬殊の事物に對應して其形を變じたるのみ。易の道則ち是れなり。是道に隨ふものは、昌へ、逆ふものは、亡ぶ。人事に吉凶禍福あり、生死悲歡兩々相對して、人は其間に展轉す。是れ即ち易道の順逆に依りて、二氣の反影を見るが故也。是故に身を全うし、生を壽うせむと欲せば、須らく是大道に順應せざるべからず。故に君子の安ずる所は、易の序なり、居る時は其象を觀動く時は其變を見る。是を以て

天より之を祐く吉にして利あらずと謂ふこと無しと。是れ進化論其物よりは明に。人生の實行主義を説けるものに非らずや。

孔丘は是思想の實際的傾向を最も明白に示したるものなり。吾れ生を知らず、焉ぞ死を知らむと云ひ、怪力亂神を語らずと云ひしは、現世主義の套語として見る可きものならずや。後世の支那學者が其學を以て正統の古學とせしは洵に偶然ならず。老聃の學は孔丘其他の學に比すれば多少純理哲學に關する思想を有し、又明晰なる世界觀を有せりと雖、而かも道德經八十一章の大意は、所詮世に處し生を全うするの道を講じたるのみ。其世界觀として見るべき分出論の如きも、其人生觀に於ける復歸主義將た厭世主義を演繹する上に、須要なる方便として提起せられしのみ。其實際的はた現世的傾向は恐らくは一步も孔丘に譲らざるべし。唯現世の幸福を求むる方法に於て孔は樂天的にして老は厭世的なるの別あるのみ。

且老聃の復歸厭世の教義と雖も、決して印度アールヤ民族が内面的考察によりて解脱を愉快したると同日の論に非ず。印度人にありては解脱を得る方便は唯

心的活動によりて法界を厭離し、もしくは之を滅盡するにあり。老聃にありては則ち然らず、唯大道の自然に結合し、從順し、若くは適應するにあり。故に涅槃も復歸も其形同じきも其實大に異なる所あり。是を要するに老聃の説と雖も其形式こそ多少の特色あれ、其精神に到りては純然たる支那思想の立場に駐まりたるものと謂はざるべからず。莊周以下の南方學者の説亦是樊籠裡を脱せざるなり。

夫れ然り。支那思想の中心たる儒教が支那民族に固有なる現世主義の上に立ち、盛に上代先王の遺訓を祖述したるの結果は、遂に一種の嚴峻なる形式主義となり、國民一切の活動を箝束し、其の自由の發達を拘制するに到れり。是に於てか、古の道に非ず、てふ一義は、殆ど無上命令として、其民族の行動を支配せり。其人文の停滞腐爛せる素より、其所ならむのみ。進歩の民は其希望を前途に認めざるべからず、過去を理想とする國民には退歩あるのみ、滅亡あるのみ。

文學も亦徹頭徹尾是保守主義の摸型の中に鑄造せられたり。且其淺薄なる現世主義は、詩歌の中に教訓を與へたれども、空想と詩趣とを與へず。激越なる感情も亦冷刻なる利害の秤量によりて、十分の發揚を見る能はず、是を以て概ね淺薄近

實に傾き詩的情熱を以て能く人心を昂揚するもの少ない。其の雄大悲壯と稱するものはむしろ其格調によりて重きを爲すものい如し。

支那最古の文學を詩經となす。若し一般書典の中に就て最も古きものを求めむか尙書の今文三十四篇若くは山海經を推さざるべからず。然れども純文學として先づ指を詩經に屈せざるべからず。

詩は素詠、嘆嗟の聲にして、人情自然の流露に成るものなり。然れども三百詩篇を通覽する時は純粹の抒情詩として見る可きもの甚だ少なく、多くは教訓の意を托したるものなるを發見す可し。偶々真正の抒情詩あれば後世の註者動もすれば之を附會して勸懲の意ありとなす(召南草蟲の如し)。男女の愛情に關するものも概ね家族制度より打算し來りたる教訓的儀式にかゝる、例せば關雎、葛覃以下然らざるなし。偶々王風大車の章の如き、男女自由の戀愛を述ぶるものあるも「豈不爾思、畏子不恥」と云ひ「豈不爾思、畏子不爲」と云ふに至りては形式主義に服従する意思如何に強固なるかを想見するに足る。之れ吾れ爾を愛すと雖も士大夫を恐るるが故に敢て共に走らずと云ふなり。又召南行露の章に「厭浥行露、豈不夙夜謂行

多露」と云ふも禮によりて情を抑ふるの意に外ならず、何れも現世の制裁を顧慮するの致す所なり。又鄭風鷄鳴の如きもしくは唐風綢繆の如き尙ほ何れも實利形式の一邊に偏し、決して自由なる人情の發揮せるものに非ず。其他人事を離るゝ題目を詠ずるもの甚だしく政治の汚隆を諷し、君侯の德澤を頌したるもの三百篇を通じて然らざるは無し。

是の如く支那民族にありては詩は徒に娛憂暢思の爲に作られしものにあらず。素實、實際人生と爲すあらむが爲なりき。されば孔丘の之を編纂したるも其意専ら教育政治の用に資せむが爲なりき。故に詩三百を誦し之に授くるに政を以てし、達せず四方に使用して專對ふる能はず多しと雖も奚ぞ以て爲さむと謂へり。功を論じ徳を頌するは其美を將順する所以なり、過を刺り失を譏るは其惡を匡救する所以なり。先王是を以て夫婦を經し、孝敬を爲し、人倫を厚くし、教化を美にし、風俗を移す。詩の成りたる所以、又詩の用ひられたる所以は畢竟是に外ならず。夫の情に發して禮儀に止まるは實に是教訓主義の自然の結果に非ずや。

源泉は以て下流を知るべし。後世に於ける支那文學は畢竟是實利主義、形式主

義の精神を繼承せるものなり。一般に論ずる時は、四千年の文學は遂に是舊圈を顛脱せざるなり。以爲らく詩は以て志を暢べ、文は以て意を達す。苟も名教に益なく、むば如何なる絶妙好辭と雖も、狂言綺語と擇ぶところ無し。是を以て士君子は文を屬し、詩を賦するや、先づ人心世道に裨益するの如何を思ふ。徒に工を弄し、文を舞はすは、文士の末技として輕蔑せられしなり。是故に戯曲小説の如き純文學に屬するものは、上代に發達せず、莊列の寓言を初めとして、穆天子傳、飛燕外傳より五朝小説に輯録する所少からずと雖も、多くは坊間の戯具のみ。士君子と稱せらるゝ上流社會に行はれたるものに非ず。元以降、明清二朝に亘りて雜劇、小説漸く流行し、水滸傳、三國志、西遊記、紅樓夢、桃花扇等の名著あり。湯若士、金聖嘆、李笠翁等の名家あり。然れども、之れ儒家正經の容れざる所、所謂填詞一道は、文人の末技なりとは、士君子が戯曲小説に對する、普通の意見として見る可きなり。故に小説の作者も務めて自ら抑遜し、博奕戯具を以て自ら比し、勸善懲惡を以て自ら辨せり。李笠翁が所謂淺薄の事を假りて、勸懲の意を發すとは、即ち是れ戯曲小説が依て文學として存在し得たる第一の條件に外ならざりしなり。

實利主義と共に一種の狹隘なる形式主義は文學を支配せり。之れ支那文學の發展を沮遏したる一の主因なり。詩歌も文章も共に一定の典型あり、苟も之に應ぜざるものは以て破格となす。素自由に達意を主とすべき散文にありても、起結照應等幾多の複雑なる桎梏あり。思想の自由なる活動も之に矜式するを心とするを以て、動もすれば空言、虛文に陥るの弊あり。古より大論策の支那文學に乏しきは、是形式主義與りて力ありと謂はざるべからず。支那には眞正の歴史的著述乏し、是れ亦其實利主義の影響する所なり。春秋以來、固より史を以て稱せらるゝもの何ぞ限らむ、然れども其の多くは歴史其物の爲に編述せるものにあらずして、或は世道名教の爲にし、或は王者經綸の用に資す。其材料の取捨、評論の上下、亦自ら公平無私なること能はず、所謂歴史の客觀的叙述は殆ど之を見ずと云ふも敢て過言に非るなり。已に實利の眼を以て一切を觀察す、是を以て其歴史は多く政治のみ、即ち王者興亡の變遷のみ、一藝、一學若くは一般人文の歴史に至りては絶て之れを見ざるなり。是の如きは獨り歴史に就て言ふべきにあらず、一切の事物概ね是なり。

支那は最も美術に乏しき邦なり。古代にありて特殊なる建築の様式を有せず。天を祭るは堂に於てせずして野に於てす。茅茨土階尙ほ帝王の居たるを妨げず。古代に於て人工の見る可きものは溝渠城池のみ。是れ耕作住居に缺くべからざるものなればなり。繪畫彫刻は後代の創始にかゝる。佛教の輸入と共に印度式の堂塔は初めて支那人に知られたれども、何等較著の發達を見ずして已みき。音樂は古より大に行はれ、詩書等六藝の一として獎勵せられたり。然れども音樂其物に對して美的欲望を満足せむが爲に非ずして、其目的は専ら教育にあり。即ち人心の物に感ずる所を節し、其性情を養ひて、道德に和順するにあり。孔丘の所謂詩に興し、禮に立ち、樂に成るもの、一として實行を旨とせざる事なし。

孔丘曰く、禹は吾れ間然する無し。飲食を非して孝を鬼神祖先に致し、衣服を惡にして美を蔽冕に致し、宮室を卑うして力を溝洫に盡す。禹は我れ間然する無し。吾人は是言の支那思想の精神を表明するに於て亦間然する無きを認む。社會の上層より下層に至るまで、是の如き精神によりて浸潤せられたる國土に、自由なる美術文學の發展し得べき謂れなきなり。

是を要するに支那民族の性質は極めて淺近なる功利主義の上に立つ。苟も實際生活の上に多少の利益を與ふるものに非ざるよりは、如何なるものも不急無益として擯斥せらるゝの傾きあり、則ち唐虞三代の古帝王、所謂る先王の遺業を體認し一切の行動凡て之を則とするは、支那四千年の歴史に於ける中心思想なり。是保守的精神は後世に至りて一個の鞏固なる形式主義となり、其歴史的情性は殆ど絶對無上の威力を以て國民の思情行爲を箝策するに至れり。是れ支那歴史に變遷ありて發達なく、回顧ありて前進無き主要なる所以なりとす。而して又是、老大帝國が世界人文史上に於てはた文學史上に於て極めて無意義の位地を占得したる所以なりとす。

以上論じ來りたる所によりて吾人は、はゞ支那文學の特質を究明し得たりと信ず。議論長きに過ぐるを恐れ、詳細の説を他日に譲り、吾人は茲に其結論を提起せむ。

曰く、支那文學の思想は我國民文學の進歩に裨益するものに非ず。歴史の意義を離れて其價值の稱すべきもの甚だ尠なし。我邦學者は支那文學の研究に對し

て純然たる歴史的立脚地を占得せざるべからずと。

(廿年九月)

春のや主人の『牧の方』を評す

劇文學の寂れたるや久い哉。脚本改良の音沙汰も何時しか絶えて、年毎にたち増りゆく大小の劇場に、假名手本忠臣蔵は今も、尙ほ獨參湯のきゝみを顯はしぬるけふ此頃、春のや主人が『牧の方』は如何ばかり吾等が心を強からしめたるぞ。

同じく文學の中にも、小説は兎にも角にも本邦今日の文明に隨れて進み行けるに違ひて、如何なれば劇詩脚本のたぐひのみは獨り斯の如く振はざるや。所詮は一般社會の趣味の卑きにつれて劇部の高尚なる新作を歡び迎へざると、及び誰やらが言ひはやしけむニキビの副産物なる抒情詩や、おのが三尺の書窓を其まゝ大世界の小説などの様に作り易からぬにも由るなるべし。

されば是數年の間に作り出されし脚本淨瑠璃のたぐひは、二三に止らざれども、武藏野も摘草にすればいと少しや。獨り櫻痴居士は歌舞伎の樞地に據りて、頻に新作を場の上せたれども、是翁が餘りに着實なる意見は、素より沙翁シルレルを

味ひたる批評家の望を充すに足るべくもあらず。かくて世に渴仰の聲のみ高くして劇文學の沈黙寂寥依然として故の如かりき。是の沈黙を破り、是の寂寥を驚かし、戯曲的文學の暗黒界に一道の曙光を照したるものは、即ち春のや主人が「桐一葉」なりき。讀書社會が舉りて是作を歓迎し、聲名一世に喧傳せる亦宜なりと謂ふべし。吾等の見る所を以てすれば「桐一葉」は素より絶妙の戯曲にてはあらざりき。されども其全曲の精神に於て、其性格の描寫に於て、其辭藻文體に於て、其他種々の點に於て、疑もなく近世戯曲の思想を傳へたる者として遙に在來の者に一頭地を抽てたる者なりき。春のや氏、今や此戯曲に於ける處女作成功の餘勢に乘じ、更に其圓熟重鍊の手腕を揮ひて、茲に此「牧の方」を公にす。勸懲小説百年の積弊を一朝に打破したりし往年卓犖の意氣を振興し、今日劇文學の運命を双肩に擔うて立つの雄姿は、そぞろに人をして奮起せしむるもの無からずや。吾等は春のや氏が志を壯として、而して其業を偉とす。「牧の方」を評するは、吾等の光榮とするところなり。

二

春のや氏が鎌倉時代の史料に藉りて、是戯曲を作りしは、吾等の第一に同意するところなり。

戯曲にまれ、小説にまれ、もと架空の事譚によりて人を娯ましむるを旨とすれども、明に吾れ人が確實なりとする所の知識に背くものは、吾れ人の眞實なる同情を惹起すこと甚だ難し。そは同一の名稱若くは外形の下に、全く異種の内容を含ませむことは、やかて人心の統一に反するものなればなり。されば何人も熟知する史上の事實をば、明らさまにつくり換へて、之を戯曲の資となさむは、戯曲家としていとく拙なき業なるべし。さらばとて、一々史籍にたどりて其事を寫さば、戯曲は遂に成り難からむ。歴史は詩學の法則通りに經過するものに非ざればなり。然らば全く空想によりて事例を假作せむか。是れ所謂る世話物に於てなすべきも、時代物には施し難きが常なり。そは時代物は、おのづから其資料として、外面的形式の廣大なる事件を要するを以て、歳時と方處とに於て限られたる史的事實か、若しくは歴史以前の傳説によるに非ざれば、吾れ人の依信を繋ぐに便りあしければなり。然らば戯曲家は其材料を何處に求むべきか。歴史上較著の事實にして

而かも其由來經行の湮滅せるか若くは通常人に知られざるが如きものを選ぶを最も可なりとすべきなり。換言すれば其首尾殊に其落着の悲壯なる形跡のみ著しく世に知られ而かも其因縁の餘りに明ならざるが如き事實を擇ぶべきなり。是の如くむば作家は明白なる歴史の拘束を免れ比較的自由に其詩想を構ふることを得べし是點に於て『牧の方』は史料の選擇其の宜しきを得たるものなり。

春のや氏が先年の著『桐一葉』が悲曲の形式に於て缺くる所ありしは氏があまりに正史に忠實なるの致す所にして所詮は史料が戲曲的材料として明白に過ぐるの致す所なり。是れ吾等が當時注意したるところなりき。『牧の方』は即ち然らず。徳川時代と鎌倉時代とは歴史の精粗明暗に於て同日の論に非ず。北條義時的人物事蹟の如きは優に専門史家の疑問を容るゝに足るべく、畠山一家の滅亡の如きも北條氏と源氏との關係につらなりて幾多の暗流を預想するに足る。殊に將軍實朝の性格は今日尙未決の問題なり。實朝果して在來史家の傳ふるが如く優柔不斷なる一介の貴公子に過ぎざりしか。宴樂に沈み詩歌に耽り毫も天下を以て意となさざりしか。其の作る所の歌豪宕の氣一世を風勵し超邁の概今古を凌ぐ。

是れ白面純袴の作としてはむしろ怪むべきにあらずや。其の渡来の船を襪装したりと云ふが如き果して單に奇を好む游蕩に過ぎざりしか。彼が奇怪なる最後の裏面には史乗載するところの外又何等の消息を存せざるか。正史的研究の結果は何れにせよ是の如きは優に詩人戯曲家の豊富なる想像を包容して一大悲曲を構ふるの骨架と爲すに足らざらむや。春のや氏は其『牧の方』に關聯して『源實朝』を出すべしと云ふ。吾等は奸雄義時の人物と共に此奇怪なる薄倖將軍の性格及び事蹟が如何に詩化せらるべきかを樂み見むと欲す。

兎にかく『牧の方』に於ける史料の選擇は大に吾等の心を得たる所なり。

三

然れども『牧の方』は獨立して完成せる戲曲に非ず。引續き公にせらるべき『源實朝』及び『左京兆』と三者相連りて初めて北條義時を以て主人となせる一部の史劇を構成すべしと云ふ。是事は『牧の方』を批評するに於て重要な制約なり。

想ふに春のや氏は是三者を合せてシレルルが『ワレンスタイン』と均しく三部曲Trilogieとならむとするものなり。故に是『牧の方』にありては其主人公は牧の方な

りと雖も、全篇の動作は茲に其終局を告げたるものに非ず。部曲の全體よりして之を見れば、僅に其端緒を開きたるものにして、其全部の主人公たる北條義時よりも「牧の方」中に、只其頭首のみをあらはしたる北條義時、深見興致、實朝卿の三人物は、別に「源實朝」と題したる續稿に於て、其の胴と尾とを描きいださむとす。其のうち、義時だけは「源實朝」にて、胴をあらはし、其の續編「左京兆」に於て、其の全身をあらはすべきものとす。

是を以て之を見れば、「牧の方」は由來一部完結の戯曲として見るべからざる者なり。故に其眞面目は、是三部曲完成の後にあらざれば、了知することを得べからざるなり。

遮莫戯曲家が是の如き方法によりて、一部の戯曲を成就するは、果して賞讃すべきことなりや。是れけだし詩學上の一大疑問ならむ。シルレルが「ワレンスタイン」のTrilogieは、何人も知る如く「陣營」に「シロコミニ」と「最後」との三者より成る。前の二者が、全曲の主眼とする所の「最後の」戯曲的效果を増大し、激動ならしめたる

上に於て、多少の力ありしは、素より論なし、然れども、是の如く特立せる幾多の部分、を以て構成せる全體は、果して能く興味の一一致を維持することを得べきや。Einheit des Interesses は戯曲最大の要素にして、かの Climax と云ひ、Höhepunkt と云ふものは、畢竟是興味の一一致を支撐し、興奮する所以に外ならず。三部曲の如きは、明に是利益を損殺するものに非ずや。「ワレンスタイン」は、獨逸史劇の白眉と稱せらるゝもの、而かも卓識なるメルケルは、此點より之を批難し、支離滅裂を以て之を貶し、其「陣營」の如きは Marionettentheater vor einem Tempel に過ぎずとなせり、(重要なる著作に就て一、女史に與へたる書) 吾等を以て之を見れば、之れあなたがち理無きの説にあらず。『陣營』が「ワレンスタイン」の罪惡の頭首を表はすは、猶「牧の方」が義時の陰謀の端緒を示すが如し。然れども、果して全曲の興味を分ち、統一を缺きたるの弊を補ふて、能く餘効あることを得べきや、之れ甚だ疑はしとなす。

よし又、單に「牧の方」をとりて之を觀たりとせよ。動作完からず、其後景には、僅に頭首を顯せる幾多の人物ありて、却て前面の事件を擲擄するの實あり。是の如きは讀者の注意を統一し、看客の同情を昂揚する所以に非ざらむ。

蓋し戯曲には一定の形式あり、是れ感興受發の理に本きて作者須要の制約を成すものなり。三曲部の如きは希臘以來の一體たるに相違なきも、之を分てば則ち支離之を併すれば則ち疣贅。人物の數事件の錯綜、場面の變化、時間の延長、皆共に膨大複雑に過ぎ、到底完全なる戯曲的効果を奏すること能はざるべし。吾等は是點に關して『牧の方』を賛美すること能はず。

四

春のや氏が戯曲に對する妥貼なる意見と、老練なる手腕とは、吾等の敬服するところ也。然れども、詩學上の形式論を度外視するの形跡が、氏の前年の著『桐一葉』に於けると均しく、是篇にも夥しく見ゆるぞ可惜らしき。『牧の方』の作者にかゝると告げむは嗚呼がましき業ながら、戯曲とは場に上れる人物の言語と動作とに縁りて、過ぎ去りたる事柄をまのあたりに表象する詩歌の一種なり。かく戯曲の中に現はるゝ事柄は、全く曲中の人物のはたらきの中に終始すべきものなるが故に、其由來經過を解せむが爲に、曲外に他の話説もしくは、註釋を要するが如き事柄は未だ以て戯曲的とは稱し難からむ。われ等は常に戯曲小説をば一個の有機體に

喩ふ。そは其活動の因縁のすべて自家によりて説明し得らるべきを謂ふなり。是れはた戯曲の形式上缺くべからざる要素の一ならずむばならず。『牧の方』はたしかに是要素を蔑視せるものにあらざるか。

試にあらゆる史的知識の北條氏に關するものを、吾等の腦裏より抽き去れりとせよ。而して是『牧の方』を一讀したりとせよ。吾等は疑ふ、我讀者の中、一篇の事實を明瞭に了解し得るもの、果して幾何あるべきかを。尼御臺所の義時、時政に於ける二品禪室の最後に關する、和田三浦比企及北條諸家の源將軍家に對する、もろもろの事件關係は、全篇活動の素地を成せるものなるに、作者は戯曲的動作によりて之を説明することを爲さず、殆ど全く是の如き史的事實の知識を預想に附し去りたるの觀あるは如何にぞや。もとより一篇を達觀し、分析歸納の方法によりて反覆檢覈したらむには、全曲の事理をたどりつくすこと、強ちに難しとは謂ふべからず。然かも、さりとては娛樂慰藉を旨とする美文學として相應しからぬ極みならずや。唯目前の感興に抑捺せられ、全體の精神に亘りて、抽象的觀察を下すことを知らざる、滔々たる俗客は、不可思議、不合理の如何なるものをも、容認して敢て怪まざ

るべしと雖も、多少教育あり嗜好高き人々の觀劇眼を如何にすべき。

試に是の如き非戲曲的預想の例二三を指摘せむに、時政が吳羽の前の辨疏に對して「スリヤ全く世上の浮説をしづめむ爲め餘義無きはからひ、義時は申すに及ばず、尼公にも疑念はなきよな」と云ひ、はた吳羽の前が「此流言の源は、禪室さまに加擔のともがら同志打させうず結構にて、申し觸らせし苦肉の策略」(第一段第三)とは、何事なるか殆ど解すべからず。第一段第一に於ける往來の雜説は、讀者をして預め這般の消息を了せしめむとの作者の注意に出でたるは勿論ながら、かくのみにては受とれじ。『若君様の千幡さまが御膳さなかに俄の御立』を以て、世上の浮説を鎮むるの方便なりと云ふ、亦解し難きに似たり。牧の方の怨言に「邪推にも事を缺き千幡君を毒害なし、あの政範を將軍家の跡目になさむ企とは」云々(二の三)とあるに及びて、始めて騒動の原因を確め得たるが如しと雖も、是の如き説明を得るまでの三場は、如何に過ぎ行くべきかを思はざるべからず。さるにても殊に義時が千幡君を御所につれゆきしは何故ぞ。これ第二段の第三、及び第五段の第二に於ける義時の獨白を了せる後に非ざれば、是間の關係甚だ明なりと謂ふべからず。加之

是獨白すらも、其意義極めて茫々、餘意多くして摸捉し難きを恨とす。千幡君を救ひ出したる理由の如きは、遂に明に知了するに由無きが如し。政範の最後は腰越の宿に起れり。而れども政範が朝雅、重保等を隨へて腰越に宿せし理由は、第四段の末に於ける朝雅の白に「只こゝに一つの難義、左馬の介は御臺所御迎の正使なるに」云々とあるにてほと知るべしと雖も、御臺所御迎と本編との間に何等の關聯あるを見ず。は無關係の事件を拈出して、政範最後の如き局面一變の所依となす、巧なりと謂ひ難きに似たり。殊に第三段の第一に於て、次郎重政が「幸ひ平賀の右衛門佐どのも、こよひはいまだ腰越宿り」と云ふが如きは、徒に讀者をして怪訝の念を起さしむるのみにあらずや。政範の死を聞ける牧の方の愁傷に「敵と目ざすべき怨の的があるならば、此の悲しみの半分は、怨にまぎれて忘れうもの。當の敵を求むれば、所詮は我が身、我が心」とあるより、之を察すれば、是老夫人は其愛子の最後を以て自己の野心を諫止するの至情に出づと信ずるものゝ如し。さるにても牧の方は如何にして是事あるを知り得しや。吾等は是の如き判斷の經由し來るべき十分の言動を發見すること能はず。

是の如き因縁の不明なる動作は尙是外にも少からず。吾等を以て之を見れば、作者の想を構ふるに當りて其想像の中に浮動せるものは、北條初代史の全局面にあらざりしか。而して作者は是の如き史材の中に牧の方を中心として表面に顯はれたる事實のみを攝取して以て是戯曲を成し、には非ざりしか。吾等が本篇を讀て先づ感ずるところは、是戯曲中の動作は、是曲中に終始し完備するものにあらず、他に吾等の知らざる此の如き動作を操縦し弛束する一種の動機の存在することなり。是を以て吾等の想像は、絶えず曲外の或物によりて拉取せられ、注意自ら一致せず、感興亦おのづから散漫たるものあるを免れず。是れ「牧の方」の爲に大に惜むべしとなす。

五

牧の方の性格は其個性の明晰なること、其一致の維持せられたる事より是を見れば、さすがに善く描かれたり。

然れども個性の明晰一致の維持は、形式上、須要の條件たるに過ぎず。是二者を有するもの、凡て必ずしも巧妙なる戯曲的人物と稱するを得ず。其性情の單複、人

品の高下、智力意志の大小強弱と、其個人的性癖と錯綜紛糾して發展し、窘塞する情狀を曲盡するにいたりて、自ら難易あり、工拙あり。夫の心容狭窄、隨て感ずれば、隨て動き、極めて簡單なる動機によりて、其云爲を左右せらるゝが、如き器械的人物は、必ずしも老手を待て、摹寫せざるなり。

而して吾等は如何なる人物も、均しく悲曲の主人公となり得べきを信ずる能はず。吾等は是點より、春のや氏が前著「桐一葉」に於ける片桐且元の性格を難せしことありき。今や同一の批難を以て、是牧の方に臨まむと欲す。

牧の方は尋常一般の婦女子のみ。其の子の愛に溺れて非道を企つ、是れ形式上尤も悲曲的たるに庶幾し。然れども、渠女は是の如き大謀を成就する所以の材、幹を有せざるなり、知淺く、慮短かく、意亦強からず、是を以て其嫉妬、嗔恚は尋常婦女子の嫉妬、嗔恚のみ。第一段の第三、もしくは第四段の第二に於ける憤怒及狂亂は、赤條々たる感情の活動のみ、些の顧慮なく、些の蘊蓄なし。其の他の爲に抑捺、掀弄せられて陰謀の方便に使用せらるゝを外にして、牧の方自身の性格に於て悲曲的勇者に相應はしき何等の活動を見ず。第二段の第二に於ける變心は、尋常婦女子の涕

涙に陥りて、意志の薄弱を示めせるもの、因循姑息ならずとせむや。堂内の密談によりて、弑逆の大望を見合せたるらしき、政範の死をさへて、畠山父子の復讐に餘念無かるらしき牧の方が、末段に至りて更に當初の大望を果さむが爲に、猛進す。其變心の動機はもとより、依て以て、其大野心あるを得たりし所の愛子の死後に於て、尙其大野心を繼續するの情理、殆ど解すべからざるものに、あらずや。もし又之を以て性格の一致を失はざるものとすれば、牧の方が堅持耐久の稟資に乏しき、いよ、是の如き悲曲の大陰謀を、醗酵するに、適せざることを、證するものに、非ずや。之を要するに、牧の方は、是の如き大悲曲の勇者たらむには、其性格あまりに單純に、あまりに淺薄に、又あまりに平凡なるに、過ぐるなり。渠の女は、須らくシルレルに於ける、テルツキの如く、イサベラの如く、マルサの如く、若しくは沙翁に於ける、マクベス夫人の如くあるべかりしなり。

牧の方の性格が、しかく非悲曲的なるの結果として、精神氣魄の全篇を通じて、壯大雄烈なるもの無く、人をして骨鳴り肉躍る底の感情の大昂揚を見る能はざらしめしは、惜みても猶餘りあり。蓋し悲曲の快感は、其勇公に對する吾人の同情に、職

由す。彼が英邁なる氣質と、剛健なる意志とを、挟み、滔天の非運に、反對し、抵抗し、煩悶し、没落するの情狀は、洵に、吾等の情想を、激揚して、吾等をして、吾等が精神中に、一種の異常にして高尚なる調趣を、意識せしむ。吾れ悲曲を讀みて、終宵卷を、措かず、勇者と共に、感動し、沈思し、嗟嘆し、憤慨し、天理人道を、敵として、斃れて、而して、已む。吾れ自ら、顧みて、恍惚として、一種超絶の理想界に、往住したるの思ひあり。是れ、吾等が、ワレンスタインを、讀み、マクベスを、讀み、マリヤステアルトを、讀みて、得たるの感情なり。あゝ、牧の方、何んぞ、獨り、其興味の、索然たるや。

六

主人公たる牧の方の性格が悲曲的に非ざること、は、略々之を述べ、畢りぬ。然らば、其副人物は如何に。

北條時政は、牧の方の感情の、少しく温和にして、性質のやゝ率直なるもののみ。舐積の愛に溺れて、思慮なく、勇斷なき、一介の老武士は、暴亂の女主人公に、配して、其性格の對比の著しきを見る。左馬權介政範は、十四の幼童として、は言動あまりに大人びたるの嫌なきか。著者は、何故に、殊に是弱年を、須要とせしにや。一編九と

の肖似を利かせむが爲なるべけれどもさりとは術なきの極ならずや。平賀朝雅はほゞ義時の小なるものか。稻毛父子を願使し、牧の方を操縦し、己が大望に資せむとして、たまたま義時の大逆謀に羅蔽せらるゝを悟らず。義時の遠謀を較著するに力ありと雖も、單調一律の弊無きか。牧の左源太、輝英は、始終疎忽者、狼狽者として現はさる。然るに牧の方を初め、用意愼密なる稻毛入道まで飽迄之を信用し、安じて『大事の御使』を托したるは如何に。畠山重保及照子の前に至りては、作者苦心の十一の効果だに現はれ得ざりしを恨みとす。

さるにても照子の前の戀路の果敢なきよ。冷々淡々己を見ること路傍の人に異ならざる重保に對する、至深至切なる愛情の花は、照子の爲に如何なる果を結びしぞ。あはれ七夕の雷雨にそぼ濡れて、腰越驛の渠が愁訴は、思ひきや重保の一喝に却て斷命の縁とならむとは。あゝ、照子は、何が爲に戀せしか。忠實なる折枝と可憐なる照子との一命を犠牲にしたる是戀には「オ、其心は、是の重保、よう、推量して候ふぞや」の一言にして、瘞し去らむには、餘りに痛はしく、餘りに激しき者ならずや。想ふに照子は満足して死したるべし、されど讀者は平かならざる也。

更に想ふ、照子の戀は、全曲と何の關するところぞ。吾等は是不愉快なる一條の戀愛談を以て、敢て『牧の方』の疵贅となす。オフツリヤも蜻蛉も、是の如くにして死せざらん。

直に過ぎたる重保は、尤も興味なき忠義一圖の朴直漢として、其性格の一致を保てり。然れども其の果敢なき最後の讀者を不満ならしむること、猶照子のそれの如き也。

全曲に於ける統一の缺乏は、其人物の行動をして多く不圓滿不自然に陥らしむ。是れ洵に恨とすべきなり。然れども吾等を以て之を見れば、更に他の病源の存するあり。何ぞや。作者が舞臺上の結果を顧慮するの過ぎたること、是れなり。

七

戯曲は舞臺上に演ずべきものなれば、常に舞臺上の關係に注意し、其調和を失はざらむことは、劇詩家の尤も必ずすべき所なる、素より論無し。然れども其爲に戯曲そのもの、要性を傷くる様の事あらば、具に其事體の輕重に鑑みて、其左右を決せざるべからず。世には朗讀戯曲 (Lese drama) なるものあり。是れ舞臺の繁累を離

更に想ふ、照子の戀は、全曲と何の關するところぞ。吾等は是不愉快なる一條の戀愛談を以て、敢て『牧の方』の疵贅となす。オフツリヤも蜻蛉も、是の如くにして死せざらん。

直に過ぎたる重保は、尤も興味なき忠義一圖の朴直漢として、其性格の一致を保てり。然れども其の果敢なき最後の讀者を不満ならしむること、猶照子のそれの如き也。

全曲に於ける統一の缺乏は、其人物の行動をして多く不圓滿不自然に陥らしむ。是れ洵に恨とすべきなり。然れども吾等を以て之を見れば、更に他の病源の存するあり。何ぞや。作者が舞臺上の結果を顧慮するの過ぎたること、是れなり。

七

戯曲は舞臺上に演ずべきものなれば、常に舞臺上の關係に注意し、其調和を失はざらむことは、劇詩家の尤も必ずすべき所なる、素より論無し。然れども其爲に戯曲そのもの、要性を傷くる様の事あらば、具に其事體の輕重に鑑みて、其左右を決せざるべからず。世には朗讀戯曲 (Lese drama) なるものあり。是れ舞臺の繁累を離

れたるものにして、近世是種の名作家少からず。之れはた戯曲の一體として是認せらるべきものなり。今夫れ朗讀戯曲として瑕瑾少きものを強ひて舞臺に上せむが爲に種々無理なる改易添刪を施すが如きとあらば、是れ一舉兩損と云ふべからむ。

吾等は「牧の方」が是の如き、不利益なる舞臺的調攝に富めるを惜む。

八

吾等は春のや主人の技能を推重するに於て、敢て人後に落つるものに非ず。然れども吾等は遂に是「牧の方」を賞賛する所以を知らざるなり。一段一齣をとりて之を讀むときは、文に抑揚あり、場に變化あり、人をして卒讀を覺えざらしむと雖も全體の上より一個の戯曲として之を見るときは、遂に散漫の譏を免れ難かるべし。戯曲的形式に缺如せるは、實に其根本的缺點として吾等の切に作者の反省を乞はむと欲するところなり。

是篇を以て「桐一葉」に優れりとするは、一般の世評なるが如しと雖も、吾等は決して爾か思惟すること能はず。却て後者を以て遙に前者に優れりとなすものなり。

「桐一葉」にありては、全篇の動作に統一の骨子あり、興味的一致亦おづのから維持せられ、人物の點染、景物の摹寫亦往々にして詩致あり。蜻蛉、淀君の如きは兎にも角にも出色の人物なりしを失はず。之を「牧の方」の散漫にして詩趣に乏しきに比すれば、復に優秀の作なりと謂はざるべからず。

然り、吾等は「牧の方」を以てまことに詩趣に乏しき戯曲なりと想ふ。照子の前は如何に是戯曲に於て終始せしか、何ぞ其の落窶たるや。七夕の大雷雨は、情景相稱へりと云ふべからず。吾等はむしろ其舞臺上に紛雜騷亂を來したる外、何等の効果あるを認めず。末段目前の琵琶歌、橋殿の一刹那は、事素と好個詩的の資料なりと雖ども、事迫らず、情到らず、徒に蘊藻吹嘔の趣ありて、江湖秋濤の觀無し。「牧の方」の最後の如きも、亦茫昧突如の嫌なきか。恰も是れ紙窮し墨燥して、更に筆を染めたるもの、檢括に過ぎて通脱に乏しきは、蓋し免れざるの勢なるか。

以上は備を求むるの餘り其缺點を列ね來りたるのみ。たゞ／＼他の美を成さざるに類する無くむば幸なり。蓋し他の著作に對して二三の弊所を抉摘するは甚だ容易なることなり。讀者は幸に吾等が是批評を以て、直に春のや主人が高著

の全價値を標定したるものとなす勿れ。夫の白壁の煌々たるもの時に、一塵のぶに曇る。主人亦吾等が僭越の言を赦せ。

(三十年八月稿)

坪内逍遙が『史劇に就いての疑ひ』を讀む

坪内逍遙は史劇に關する意見を本月五日發行の早稲田文學に載せ題して『史劇に就いての疑ひ』と云ふ。其説吾人の見る所と異なるものあり左に其疑點を擧げて氏並に江湖の教を請はんと欲す。

逍遙が是論は史劇の性質に就いて最も重大なる結論を含む。氏の文牽引附會に忙はしく爲に其委曲を審にするに及ばざるを恨とすと雖も其の究竟の見地は史劇の目的は史劇眞意を詩化するに存すとの一言に歸着すべし。氏は是斷案に到着するに左の如き論理をたどりたり。

氏は先づ沙翁の半叙事詩的史劇が劇の形式上不具の作なるを認め而して他の五大悲劇に於ては畧々悲劇的形式に限投するを得たる沙翁が何故に特り其史劇に於ては斯る背則の作を爲し、かを訝り史劇の本領は多少他の劇と殊なるが爲

に、沙翁の天才は之れを看破し、其の本領を發揮せむが爲に態とかゝる特殊なる形式を取れるにはあらぬかと疑ひ、是形式上不完全なる史劇が列國劇壇に歡迎せられ、多くの批評家に賞讃せらるゝは、單に因襲の惰力、單に沙翁崇拜の騎虎の餘勢なるかと反問して、暗に先の疑を然定するの意を表はしたり。

氏は次に筆を起して正面より史劇の性質に就いて説を作して曰く。

史劇とは我が所謂活歴劇の如く、正史若くは野史の事蹟を只そのまゝに安排して、正史の地の文を科介に改め、人物の語を的として劇に物したるに非ず。さりとして近松等の淨瑠璃の如く、元和を建仁とし、家康を時政とし、ほしいまゝに史上の名稱を用ひて、ほしいまゝに立案構思せるもの、即ち詩想の自在を得む爲に名のみを過去に借れる空想の作も、正當の史劇とは稱すべからず、前者は劇詩として取るべき所なく、後者は劇詩としては、或は取るべきも、史として、一分の取るべき點無きに似たり。詩は史の侍婢にあらねども、史も亦詩の爲に濫用せられて、故なく其名稱を犠牲にせざるべからざる約束無し。史學上に寸功無くして、ほしいまゝに史と稱する、亦た一種の妄稱ならむ。

是意見を確かめむが爲に、沙翁批評家ド、ハ、デン、及びウルリチを引用し、更にウルリチの言に隨て氏の説を明にして曰く、

史劇の目的は史的事件の隱微なる眞意を描破するにあり。所謂史の眞意は管子倫理的なるのみならず、其倫理的なるところやがて其詩的なる所なり。されば史の眞意を描くは、詩の本領に外づれたる事を爲すに非ず、……史には自然の大法に従へる一道の發展あり、是大勢は人間の存する限り、隱顯弛張して連續し、其因果は綿々として世波の底に起伏し、預め期待すべからず。而して是不可思議なる隱微の因果は一面倫理的として見るべきと同時に、一面詩的として見るべきもの也、否此間に大なる詩的消息ありと言はざるべからず。夫の沙翁が其の國史劇を前後連絡したるものとして作したるは、豫じめこゝに意ありての沙汰なりと斷じ得べきに似たり。

氏は是ウルリチの言によりて、史劇には悲喜劇以外の一種特異の本領あることを斷じ、沙翁の史劇が通常戯曲の例規を離れて形式上不完全の觀あるは、畢竟是本領を全うせむが爲に、故らに適當なる方便を求めたるに外ならずとなし、更に史劇の

價値に就ては、

史劇は其性質上、のづから劇の正則に背く所無きを得ざるべけれど、其の人間事相の尤も遠大深微なる隱微を傳ふるの點に於て、他の作の能くし得ざる所を能くし、件の缺陷を補ふて餘りあるに非ずや。

と論斷せり。

是論斷を爲したる後、氏は更に筆路を轉じ、氏が著作にかゝる史劇「牧の方」の形式に對する世評數條を擧げて、一々之を辨解せり。而して是數條の世評を代表するに多く吾人が嘗て本誌に掲げたるものを以てせり。即ち「牧の方」は北條義時を主人公とせる三部曲の一段なるが故に、吾人は是三部曲の形式を以て一切戯曲に缺くべからざる感興の一致を妨害したるものなりとなし、左の如く論難せりき。

戯曲には一定の形式あり、是れ感興受發の理に本きて、作者須要の制約を成すもの也。三部曲は希臘以來の一躰たるに相違無きも、之を分ては、則ち支離、是を併すれば、則ち疣贅、人物の數、事件の錯綜、場面の變化、時間の延長、皆共々、複雑、龐大に過ぎ、到底完全なる戯曲的効果を奏すること能はじ。

逍遙は之に對して直に反問して曰く、
 高論まことに至理なるが如し、只疑ふらくは此の評は直に移して沙翁の國史劇全體の批難としても恰當なるが如し、如何。
 と。吾人は又「牧の方」が場面以外の幾多の史的知識を預想するを難じて、左の如く云へりき。

戯曲とは場に上れる人物の言語と動作とに縁りて、過ぎ去りたる事柄をまのあたりに表象する詩歌の一種なり。かく戯曲の中に現はるゝ事柄は、全く曲中の人物のはたらきの中に終始すべき者なるが故に、其由來經過を解せむが爲に、曲外に他の話説若くは註釋を要するが如き事柄は、また以て戯曲的とは稱し難からむ。我等は常に戯曲小説をば一個の有機體に喩ふ、そは其活動の因縁のすべて自家により説明し得らるべきを謂ふ也。
 氏は是に對して亦直に反問して曰く、

高論まことにことわりなり、予も尋常の悲喜劇に於ては毎に是の如くならざるべからずと思へり、但し此の評は直に移して、沙翁の國史劇全體の非難とし。

ても恰當するが如し、如何。

是の外氏は性格作意等に關して辨解する所ありたれども、史劇の形式論に關する論點の主腦は是二ヶ條に存するを以て、茲に暫く之を省く。

如上の梗概によりて知らるゝ如く、逍遙は是論の前半に於て、史劇の本領に就て大體論を爲し、後半に於て其自作の是の如き覺悟に本けることを示して、「牧の方」の形式に對するの批難は、やがて沙翁の國史劇全體に對する批難なることを明にせり。而して是前半に於ける大體論の歸結は所詮左の二條に存するが如し。

(一) 史劇の目的は史的發展の隱微なる眞意を描破して之を詩化するにあり。
 (二) 史的發展の眞意は、歴代史劇の形式によりて初めて能くし得べし。故に史劇は僅々五七齣を限りとせる他の劇詩の常型に背かざるを得ず。

乞ふ吾人をして氏が是論斷の如何なる程度まで眞理なるかを檢覈せしめよ。

吾人先づ逍遙に問はむと欲す、史劇は史か將た詩かと。是簡單なる一問題の決定は、直に氏が論據に向て最も明白なる光明を抛つべし。

史劇是れ史か將た又詩か。若し史なりとせむか、徹頭徹尾史的眞實の圈套を脱

するを得ず。史劇と歴史と何の擇ぶ所ぞ。夫の正史の事蹟を安排し、其地の文を科白に改め、其人物の語を臺詞となしたる、今の人の所謂活歴劇なるもの、正に史劇の正體なりと謂はざるべからず。史劇若し詩ならむか、一個の美術として詩にはおのづから詩の本領あり、隨て詩の形式あり、一切の資材が其内容たるを得むが爲には預め是本領、是形式に對して絶對的服従を表せざるべからず。是時に當りて詩中に用ひられたる史的事實も亦一の詩的空想たらむのみ。史的發展の真相を示すもの世に幾種の歴史あり、史劇に待つもの要なき也。唯劇詩の一體別に史の字を冠するものは、吾人の見る所を以てすれば、史的發展の發揮を離れて別に用あり、所詮史劇は詩なり、史に非ず。是二者は全然別種の意義を以て結合し、之が主體たるもの常に詩ならず、むばあらず。逍遙は史劇の概念に於て、殆ど一にウルリチの説に依傍したるが如し。然れども氏は一個の重要な點に於て、ウルリチの説に反し、が爲に自家撞着を醸したるは、惜むべし。ウルリチは素ヘーゲル派の哲學者なり。ヘーゲル歿後其の凡理論の萬有神教的傾向を擺脫して、二神教的哲學を構成したりと雖ども、其ヒストリスムスに於ては遂に其先人を踏襲せるを免れず、故

に史的發展に於ける神の天啓を説き、精靈の實現を信じたるの點に於ては、全然ヘーゲル派の眞面目を暴露したる也。其の歴史を過重し、一切の事物は史に關して其價值を有せりと思惟したる亦怪むに足らざるなり。彼れの史劇を觀するや、言ふまでもなく是の點よりせり。故に史的發展の隱微なる眞理を以て理想の發現なりとし、更に茲に理想の發現として詩と史との一致を認めたる、素より其所なりとす。故にウルリチは史劇を解釋するに他人の有する能はざる便利なる立場を有せり。何となれば彼にありては史も詩も共に理想の發現なるが故に、其間に自然の融合一致の存在したればなり。故に史の眞意を描くは即ち詩の精神を寫すなり。故に『史の眞意は常に倫理的なるのみならず、其の倫理的なるところやがて其の詩的なる所なり』。故に彼れにありては史即詩、眞の史劇即ち是れ眞の詩劇なり。故に曰く。

詩が史的理理想を取るは、即ち是れその正當なる所有を取ることなり。詩が史的事實に依傍するは、勿論其事實が理想を表現する限りに於て、即ち是れ自家の法則に事ふる也。自ら歴史に調攝するは、即ち是れ自家の本領及び目的に

随ふ也。

(In taking up the historical idea, Poetry is only taking possession of its rightful property; in attending to the historical subject-matter, so far as the latter expresses the idea, it is but serving to its own laws; in accommodating itself to history, it is but serving its own nature and purposes.)

ウルリチは是の如き自家の純理哲學に胚胎せる詩史一致の設想より、沙翁の歴代史劇がなせる劇詩的形式の蔑視を是認せり。彼が是説の是非は、ヘーゲル派が純理哲學の荒唐にして信憑するに足らざることの知れ渡りたる今日、更に尋究するの要なしと雖も、一個の説としては、兎も角も首尾一貫して其調和を得たりと謂はざるべからず。

吾人は初め逍遙が自家の説を立せむが爲に、一言の批評的注意なくして、全然ウルリチの説を引用し來りたるを見て、或は氏が何時の間にか、ヘーゲル派の哲學を信奉せるに非ざるかを疑ひき。是「不可思議なる隱微の因果は、一面倫理的として見るべきと同時に、一面詩的として見るべし」と云ひ「史劇は一面に於ては叙事詩よ

りも深く、一面に於ては家庭劇よりも廣く、其の人間事相の尤も遠大深劇なる隱微を傳ふるの點に於て、他の作の能くし得ざる所を能くし、形式上の缺陷を補ふて餘りあるに非ずや」と論ずるを見て、其詩史一致論をば那邊より把握し來れるかを叩かむと欲したりき。然れども氏の周到緻密なる論理頭腦は、是の如き大膽なる設想を信じ得ざるべきを想ひ、更に氏がウルリチと共に引用したるドイデンの語と『牧の方』を公にせしは三部曲の如き特殊なる形式の上に一種の詩趣あるを信じたりとの氏の自白とに顧みて、氏の意見の詩史一致よりは、寧ろ兩者の調和に存するを臆測せり。吾人が氏の史劇論の歸結の第一條として「史劇の目的は史的眞意を描破して之を詩化するにあり」となせしは、是を以てのみ。詩史一致論の立場より見る時は、史的眞意即ち是れ詩的本領なるを以て「之を詩化する」の一句は、畢竟贅疣に屬す。只夫れ詩史の分離を調和するの必要ありて、茲に初めて詩化の用を見る。逍遙にして、若し其の一意祖述したるウルリチと共に、ヘーゲルの歴史論の立場に住まるものならむには、徹頭徹尾詩史一致論を執らざるべからず。而して、史的発展の理想即ち是れ詩的精神に外ならざるを以て、史劇の中に認識する所の

詩趣は其内容の上に存せざるべからず。然るに氏は是重要なる契點に於て全くウルリチとは別種の意見を抱けるものゝ如し。氏の言に曰く、

『桐一葉』を著はし、『牧の方』を公にするや、其劇詩としての價乏しきことは、予みづから之れを知れりき。其形式上の缺點は若し之れを矯正せむと欲せば、予にして改めむの心あらば、之を正すことも難からざりし也。されども、予は其特殊なる形式上に一種の詩趣あるを信じたりし故に、敢て美學家の説に背きて、竊かに初めより數段曲を作らむの腹案を抱きたり。

此を以て是を見れば、氏は史劇の詩趣を以て其劇詩の常規を離れて統一なき叙事的の形式の上に存せりと思惟せりし也。氏は詩の内容の最も醇粹なるもの、即ち史的發展の理想に詩趣ありとなすウルリチが説をば、全く其形式に關して解釋し、是參差起伏散として統一なき形式上に詩趣存すとせざるなり。是れ明に詩史の分離を認めたるものに非ずや。而して是分離論は、氏が些の異見を挾むこと無くして引用したるドイデンが言によりて更に一層の分明を加へたるが如し。ドイデンの言に曰く、

劇詩を以て眞の史劇たらしめんとせば、史の皮相の事實に執着して其本領たる劇詩の生命を妨遏すべからず。劇詩の法則は正史の事實よりも重ずべき也。二者相容れざる時は後者を棄て、前者に従ふを至當とす。されど二者能く兩立し得べくむば、決して其のいづれをも犠牲とすべからず。史に忠實なることは、尠くとも其の作を圓滿ならしむるに肝要なり。

是れ明に詩史の分離を認め、劇詩の法則の正史の事實よりも重ずべきとを説き、隨ふて二者相容れざる時は劇詩の法則に忠ならずむが爲には正史の事實に背戾するを辭すべからずと主張せるものなり。是れウルリチのとは全く反對せる説に非ずや。逍遙若しドイデンの語を更に數行の後まで引用したらむには、是反對は更に一層明亮なりしなるべし、即ち彼れ(ドイデン)曰く、
沙翁の技巧上の大手腕は、殊に史的事實と劇詩の法則との調和に表はる。而して『ジョン王』が歴史として他の國史劇に見劣りせらるゝは、劇詩の法則が要するよりも多く正史の事實に執着せしが爲のみ。

吾人は逍遙が是の如き全然背馳矛盾せる二様の意見を臚列して、均しく賛同の

意を表したる真意の那邊に在るかを知るに苦むと雖も、吾人は前に述べたるが如き臆測によりて、氏の旨趣の存する所は、むしろドイデンと共に詩史調和論にあるべきを信ずる也。

逍遙にして果して、吾人の思惟するが如く、詩史調和論を執るとせば、次に來るべき疑問は、是二者の孰れを主とし、孰れを賓とすべきやにあり。二者能く兩立し得べく、むば誰かその一を犠牲として強ちに偏頗の譏を招かむや。然れども史は詩の法則通りに發展する者にあらず、よし是ありとするも是の如き場合は、所謂絶無希有の例ならむのみ。史と詩との衝突は原則としては遂に避くべからざる也。

逍遙は是場合を如何に裁断せんとするぞ。

ドイデンは明々地に詩法至上主義を唱へて茲に其論點の統一を求め得たり。ウルリチは由來詩史の衝突を認めずして、却て其一致を認めたるを以て、其間素より主客の別なく調和の勞無し。然れども逍遙は、苟も自らヘーゲルの歴史哲學の立場に在ることを告白せざる限りは、決して是の如き大膽なる神祕的意見を有するものと認めらるゝを得ざるべし。氏が一面に於てドイデンを紹ぎ、他面に於て

ウルリチを述べたるは、所詮論理の混亂と思想の朦朧とを示めいたるものに過ぎずと雖も、是詩史衝突問題に關しては、遂に究竟の論斷を與へざるべからず。吾人は氏が一層精透なる意見に接せむことを樂む。

然れども吾人をして更に氏の説を揣摩せしめよ。氏は素よりウルリチが説を祖述して其根本たる哲學主義に及ぶものには非ざるべし。唯何かなしに史的發展の真相に詩趣あることを認め、而して是詩趣を發揮し、人間事相の尤も遠大深劇なる隱微を傳ふるを以て史劇の本領となし、而して是本領を以つて其形式の缺陷を補ふて餘りありと思惟したるならむ。形式の缺陷は詩法の忌む所、而かも史的真相の發揮は是損失を補充して餘りありとなす。之れ明に詩史の一致を認めざるの見、ウルリチが史的理想の上に何等完全の詩形を認めざるのと、おのづから其趣を異にす。是點に關しては、氏はドイデンと共に詩史の兩者を以て各々其獨立の範疇を有し、獨立の法則に従へるものとするなり。然れども史を主とし、詩を賓とするの點に於ては、氏はドイデンを去りて、ウルリチに就きたるものゝ如し。要するに、氏が説は二者の折衷と見て大差無からむか。唯後文に歴史劇の詩趣は、其内

容たる理想に存せずして、却て其の特殊なる形式に存すと言ひて、左なきだに如何はしき論理の一致をば、全然破却し了りたるは、氏の爲に殊に惜むべしとなす。想ふに之れ濃墨の誤謬に過ぎざるべきか。

上來述べ來りたる所によりて、吾人はほゞ逍遙が史劇論の性質を領會し得たるが如し。氏は第一詩史の獨立を認め、第二史劇に於ては史を先にして詩を後にしたり。吾人が含蓄的批評を去りて超絶的批評に移るに當り、先づ再び劈頭の疑問を提起して逍遙の明答を乞はざるべからず。曰く、史劇は史か、將た詩かと。

史劇は史か、將た詩か。逍遙は其の必然なる論理的結果として、史劇を以て史と爲さざるを得ざるべし。何となれば、氏は劇詩の法則に背戻しても、史的發展の隱微を傳ふる、是れ史劇の本領なりと明言したればなり。

眞し、さらば史劇を以て假に史なりとせむ。然れども吾人は更に請ひ問はむ、所謂史的發展の隱微を傳ふるもの、歴史哲學若くは人文史と史劇と孰れとが勝れたるぞ。人文史の目的は、人類社會一般の發達を其精神的方面より觀察し、其外面に現はれたる政治、經濟、宗教、文藝、その他もろくの事物に對して、其成立變遷の説

明を與ふるにあり。極り無き局面の變化を通じて、動かざる發達の原理を究明し、人類活動の主腦を把へて、縦に是を歲時に繋ぎ、横に是を方處に照し、精神的及び物質的全範圍に亘りて、社會發達の真相を描破するにあり。所謂「人間事相の尤も遠大深劇なる隱微」とは、人文史の對象とする所を外にして、何處に存すべしとするか。史劇の本領果して是史的發展の隱微を傳ふるに在らば、而して是目的を達せむが爲には、劇詩の法則の如きは顧みるに足らざらむには、史劇家は何か故に科介、臺詞、舞臺上の約束、脚色、修辭等もろの詩的繁累を打破し、去りて一向直に人文史を著さるや。吾人は史的發展の隱微を解せむが爲には、人文史を有す。何ぞ更に史劇を要せむや。史劇家よ、乞ふ輕々しく「史的發展の隱微」を言ふを己めよ。史的活動の係はる所、悠遠廣大、其隱微と云ひ、精神と云ひ、理想と云ふもの、人文萬般の形式に對して、慎重細心なる科學的攻究を施したる上に、非ずんば、如何てか會得するを得べき。之れはた人文史が今日最高至難の科學たる所以にあらずや。所謂隱微なるもの、五七齣もしくは五七段の史劇若くは史劇の連續によりて解釋せられ得べしと思惟するが如きは、畢竟詩人もしくは詩人的批評家の空言のみ。思

想の單純殆ど他に比すべきものを見ざる也。

史劇を以て史的發展の隱微を傳ふるに在りとするの論は、學說として立ち得べき者に非ず。逍遙は進て、ウルリチが詩的一致の歴史哲學を奉ずる能はず、退てはドハデンと共に詩主史從の説に執着すると能はず、好て自ら是の明白なる矛盾の中に困頓するに至りたるは、惜みても猶ほ餘りあり。而して尙ほ沙翁の壘に據りて、批評家の彈射を避けむと擬す。吾人竊に氏が平生の謙讓に肖ざるものあるを疑ふ。眞し然らば、吾人は更に進みて是の城壁の如何ばかり強固なるかを試みむ。今や吾人の説を述ぶるの機會に達したり。吾人は史劇及び歴史小説の本領に關して、我が畏敬する逍遙と大に其の見る所を異にするを悲む。先に「牧の方」を評するに當り、吾人いさゝか意見を述べて左の如く曰へりき、

戯曲にまれ小説にまれもと空想によりて人を娛ましむるを旨とするものから、明に吾れ人の確實なる知識に背くものは、吾れ人の眞實なる同情を惹起すること甚だ難し。そは同一の名稱もしくは形式の下に、全く異種の内容を含ませむことは、やがて人心の統一に反すればなり。されば何人も熟知せる史

上の事實をば明らさまに作り換へて、以て戯曲の資料となさむは、戯曲家としていとく拙なき業なるべし。さらばとて一々史籍にたどりて、眞を寫すことのみ務めなば、戯曲は遂に成り難からむ。歴史は詩學の法則通りに經過するものに非ざればなり。然らば全たく空想によりて事例を假作せむか、是れ所謂世話物に於て寫し得べきも、時代物には施し難きが常なり。そを如何にといふに、時代物は其資料として、外面的形式の廣大なる事件を要するを以て、歳時と方處とに於て限られたる史的事實か、若しくは有史以前の傳説に據るに非ざれば、吾れ人の依信を繋ぐに便りあしければなり。云々。

吾人の見る所によれば、詩は其の詩たる性質上全然空想の美術たるべきものなり。詩劇の類に史劇なるものある、吾人素より之を認む。然れども其人物事件等は正史中の人物及び事件として用ひらるべきものにあらず、其の一度び詩中の物となるや、茲に全く史的眞實との約束を遮斷せられて、偏に空想の料として拈貼せらるべき也。是の如きは詩劇の獨立詩法の權力の必要なる要求なり。是點に於て吾人は全くドハデンと見る所を同じうす。苟も詩的法則の獨立を妨げざる

限りに於ては、一切の事物其資材となるを妨げず。何ぞ獨り史のみに限るべき。苟も詩的法則の要求に乖離するものは、一切の事物其資材となるを得ず、何ぞ獨り史のみに限るべき。人動もすれば謂へらく、苟も史にして史的といふ殊稱を有し得むが爲には、其史の主題に於ける史的眞意を發見せざるべからず、隨ふて善く當代の人情風俗を觀察して、其眞實に違はざらむを務めざるべからずと。之れ取も直さず、詩形を備へたる歴史のみ、是の如きは初めより正史を取るに如かざるなり。夫の史劇もしくは歴史小説によりて當代の人情風俗を見むことを望むものは、其標的とする所に非ずして史なり、何にぞ初めより人文史もしくは其他の史乘を繙かざるや。逍遙謂へらく、

詩は史の侍婢にあらねども、史も亦詩の爲に濫用せられて故無く其名稱を犠牲にせざるべからざる約束無し。史學上に寸功無くして、ほしいまゝに史と稱する又一個の妄稱ならむ。

之れ何たる奇論ぞや。名目の争は當眼の詩論と何の關する所ぞ。氏の論法を擴張せば、小説は小なる説ならざるべからず、レゼドラマの如きは言語上矛盾の

名稱たるを免れざるべし。是の如きことを争ふは殆ど兒戯に類せずや。遮莫史なる名稱がしかく神聖にして犯すべからざるの理由はた何こにかある。

吾人の見る所を以てすれば、史劇と稱する劇詩の一種が、物類萬種の中、特に史的事實を資料とするは、他の故あるに非ず、主として劇中の事件の「實らしさ」を維持せむが爲のみ。

夫れ人情は虚偽に動かさず、一切の文學が人心を動かし得べき第一の制約は、實に其の「實らしさ」にあり。其外面の形式のみより之を見れば、自然世界に有り得べからざる幾多の瑰奇夸大を包有するにも係らず、巧妙なる詩歌がしかく人心を感動し得るは、其内面的精神の逼真自然、即ち茲に所謂「實らしさ」ものありて、知らず識らず吾人の肺肝を把擒するに依る。今夫れ劇詩は縦に抒情詩の幽情微韻を捉へ、横に叙事詩の宏壯偉大を攝り、以て過去に於ける人生の活動を現在の舞臺に演出せむと擬す。其感興の大いなるを得むが爲めには、自ら事局の大いならむを必とす、是際劇的動作の「實らしさ」は如何にして支撐せらるゝとを得べきか。其内面的精神の自然發展は、其動作の「實らしさ」に缺くべからざるは勿論なり。然れども是れ

のみにては足らざらむ。そは家庭的劇詩の事一人に係るものならむには、其歳時方處は之に關する固有名辭と共に、全く空想の所生たるを妨げじ。而かも事例令へば、邦家の興亡にあづかり、英雄の運命にかゝるが如きものならむには、正史の保障を待つに非ざれば、吾人の依信をつなぐに頼りあしからむ。何となれば、吾人が有せる過去の知識にして、苟も邦家の大事に關するものは、正史之を填充して、又尺寸の遺漏を貽さざればなり。是を以て劇詩にして、壯大なる事局を描破せむと欲するものは、勢ひ史劇の形式を取らざるを得ず。故に吾人は信ず、史劇は一派の學者等が思惟するが如く、史的發展の隱微を傳ふるを旨とするものに非ず。隨ふて當代の人情風俗等を體現するを尙ぶべきものにも非ず、其名稱及び或場合には事實を史上に借るは、只劇的動作の「實らしさ」を支撐する所以の方便のみ。

然らば史劇家は如何なる種類の正史中に其の資料を求むべきか。之れ本論の主題に非ずと雖も、序なれば簡單に吾人の意見を述べむ。即ち歴史上顯著の事實にして、而かも其の由來因縁の湮滅せるか、若しくは、其首尾、殊に其の落着の悲壯なる形跡のみ著しく世に知られ、而かも其經行の餘りに通常人に明ならざるが如き

事實を以て、最も恰當なる史劇的資料とすべし。是の如くなれば、一面事實の「實らしさ」を失はず、而して一面自由に其詩想を構へ、事例を括視することを得べし。

レッシングが是點に關する説は、一見吾人のに反するが如しと雖ども、其實他の方面より略々吾人と同一の意見を吐露したるものなり。其言いさゝか世の史劇論者の蒙を啓くに足らむか。彼れは先づ史は全く詩に隸屬すべきものなるを説き、次に、詩人は如何なる點まで正史の事實に拘はるべきかを論じて曰く、

詩人が一の史的事實を資とするは、是の如き事實が單に興りたるが爲にあらざ、唯、當眼の目的に對して、空想の所生も之に優る能はざるが如くに興りたるが爲なり。……歴史を依信するに足れりと思はしむるは、何者の力ぞ。そは内部の「實らしさ」にあらずや。然らば即ち「實らしさ」が全く何等の證據もしくは傳説によりて確實にせられずとするも、將た又今日未だ吾人の知識の到達する能はざる程のあらゆる者によりて立證せられたりとするも、そは何れにても等しからずや。夫の演劇が英雄の事蹟に關するを必とするは、謂はれなき事ならずや。是の如き歴史は、史の務なり、劇のあづかり知る所に非ず。

吾人が舞臺の上に學ぶべきとは此の人若くは彼の人が何事を爲したるかに非ずして、或特殊の性格を有せる各人が、或特殊なる境遇の下に何事を爲すべきかにあり。故に詩の目的は史のそれよりは遙に哲學的なり、夫の劇を以て英雄の讚辭と爲し、又は國民の自負心を鼓舞するの用に資するものは、是れ劇の威嚴を墮すものと云はざるべからず。(Humb. Dramat. 19. Stück. 3. Juli 1797)

レッシングは内面的眞理を重じたる餘り、一切史劇を用無きものに貶し去りたるは、吾人が劇的事件の「實らしさ」を支撐するの方便として之を保存すべしと説けると多少の差ありと雖も。詩史關係の根本的問題に就いては、全く吾人と見る所を同じふす。吾人はレッシングと共に沙翁の史劇に就て英國史を學ばむとするともがらの迂濶を笑ふもの也。

吾人の畏敬する逍遙は、其形式に於てはむしろ缺陷多き沙翁の國史劇が今尙ほ列國の劇壇に歡迎せられ、數多のシェイクスピアンに激賞せらるゝを見て、個中必ず是缺陷を補充して餘りあるの價値存すべしと信じ、而して是の價値は「人間事相の尤も遠大深劇なる隱微を傳ふ」の點に存すと爲し、更に進みて是覺悟を以て其

史劇に筆を染めたりと云ふ。吾人學尙ほ淺く、未だ沙翁が十二史劇の全體を讀破して、其の所謂の史的發展の隱微なる者を感傳し、逍遙と共に其神韻を讚美する能はざるを恨みとす。然れども之を諸々批評家の言に聽くに、彼等の何人か五大悲劇を超えて、國史劇を賞讚したる者ありや。沙翁當代の英國は、丕基漸く定まりて、國民的感情の昂揚殆ど其頂點に達せり、國史劇は是國民的意識の結成を體現したるものや、がて是れ英國人を喜ばしむべき好題目に非ずや。加ふるに、八面往く、所として可ならざるなき沙翁の大手腕を以てす、グレシダ、カリオラスを激賞するの批評家は、何を厭うて之を貶すべきぞ。然れども、彼等の何人が、其形式の缺陷を認めざるものぞ。レッシングがコッドシッドの佛蘭西崇拜に反對し、沙翁を以てコルテ、ユの上に置きたるの理由は、其形式にあらずして、其精神にありき(文學書十七卷)。其史的眞理を發見せよと唱へたるブルテ、ルが劇詩說に對せる彼れが論難は、直に移して沙翁の史劇に擬すべかりき。フライターハは英國劇詩が獨逸に齎らしたる脚色の弊を以て、一部は沙翁の史劇に歸したりき。吾人は逍遙に反して沙翁を云々せむと欲する者に非ず、然れども沙翁の國史劇が賞讚せられたるの故を以て、一向に

其の不完全なる形式をも併せ摸するの可なるを見ざる也。若し沙翁が國史劇の價値は逍遙が思惟せし如く所謂史的隱微を傳ふるの點に存せずとせば如何。英國當代の一沙翁にして初めて成し得べく後世沙翁に十倍するの天才も施すに由なき或一種の事情の纏綿せりありとせば如何。況や國史劇は沙翁が上乘の劇詩にあらざるの事實は即ち國詩劇の中自ら沙翁の天才を拘束し妨害し他の五大悲劇の如き大成功を爲すを得ざらしめたる事情の存在を意味するものに非ずや。逍遙好むて是難局に投じ以て其詩材を試む壯は即ち壯なりと雖も却て自ら功名の前途を杜絶するものに非ざる乎。吾人潜在氏の爲に惜まざるを得ざる也。終に終み沙翁の國史劇に對するハルトマンの批評を聴かむ。其の識見流石に讚美感嘆之れ事とする紛々たる凡評家と異なるものあり。敢て逍遙の精讀を請はむ。曰く、

眞の劇詩的經過場面及び側話あるにも係らず、カルデロン及び沙翁の史劇は、叙事詩的劇詩と名くるを至當とす。之れ是等の作に歳時及び方處の一致の缺けたるが爲にあらずして筋の一致及び一貫せる振張及び昂揚の缺けたる

ばなり。即ち猶ほ希臘劇詩が主として抒情詩的体制を示すが如く、是等の作は叙事詩的体制を表はせばなり。……げにや沙翁は其の當時英國劇壇の根抵を成せる神祕劇の裝置を超越し能はざりし如く、是の種の劇に都合好かりし敘事詩的体制を離脱する能はざりし也。故に是思慮なくして單に沙翁を摸せるもの、失敗するは是れ沙翁にありてのみ容認し得べき叙事詩的散漫と支離とを併せて摸倣するによる。ゲーテの『ゲッツ』グラッペの『百日』は是

例なり (ハルトマン美學卷二、七五九、七六〇)

是の外史劇に關して言はむと欲するところ多々ありと雖、文長きに過ぐるを恐れ茲に筆を擱く。本文論ずる所は史劇の本領より延いて詩史二者の關係に及ぶ。蓋し詩學及び美學上の一大問題なり。吾人は茲に鄙見を陳して逍遙の再思を煩し併せて先輩諸氏の意見を聞かんことを望む。

(三十年九月)

小説革新の時機

(非國民的小説を難ず)

凡そ文學を興へざるの世は則ち是れあり、文學を要めざるの世は則ち是れあらざる也。唯夫れ缺けたる所必ずしも充たざるものに非ず、往々事志と違ひ物其願に稱はざれば、茲に懊惱煩悶の病を生ず。吾は思ふ今の社會は文壇に對して是病に罹れるに非る乎。

吾が見る所を以てすれば、今の文壇は何れの方面に於ても落寔を極めたり。青春の意氣は殆ど消磨し去りて老衰の死相何處にか現し來らざる。さながら紅花綠葉の面影はゆく春と共に名殘なく、黃茅白草の秋風に搖落するを眺めて、厖かに懷を遣るが如し。夫の詩人小説家と稱するともがらは、猶蛺蝶秋に瘦せて風の冷かなるに堪へず、厖に衰殘の黃花を擁して、昔日の夢を繰返すが如しとも見るべきか。あはれ人の文學を要せざるに非ずして、世の文學を興へざるや、茲に一世の人をして缺焉として悲む所あらしむ。是れ抑も誰が罪ぞ。吾れは文壇革新の時機

の方に迫り來れるを見る。

試に見よ、文壇の大半を占領せる小説文學の現状、今將た如何にぞや。過ぐる二十年の進歩は實に驚くべきものなりしが、斯かる進歩は尙ほ將來に於ても持續せらるゝの望ありとするか。顧みれば、坪内逍遙が『小説神髓』と『書生氣質』とを以て初まれる明治の小説は、一轉して二葉亭の『浮雲』となり、硯友社の『我樂多文庫』となり、更に美妙齋の『夏木立』となり、寫實主義は茲に一代の風尚を成したりき。紅葉、露伴二子、是寫實主義の高潮に駕して、覇を壇坫に稱すること幾年。其の偏狹なる寫實の漸く世に厭かるゝや、所謂撥鬢小説となり、探偵小説となり、更に一轉して所謂觀念小説となりき。然れども觀念小説の主觀的傾向、亦永く時尙を維持するに足らず、其怪奇と深酷とは幾くもなく拋棄せられ、文壇に寄與せし所は唯其心理解析の一事のみ。爾來所謂社會小説の將に起らむとして、未だ起らざるあり。作家の中或は一脚を觀念派の殘墟に住め、一脚を客觀派の舞臺に投じ、彷徨爲す所を知らざる者あり。或は寫實主義の舊趾に據りて、而かも其偏狹なる主觀的傾向を擺脱せむと務むるものあり、所謂先進大家の輩は概ね想涸れ筆澁り、徒に舊套を綴補して

新衣を裁せむとするのみ是を以て千篇多くは一律に出づ。所謂新進作家の多くは其の幼稚なる閱歴と學識とに依りて其の清新の詩情を發揮せむと務むと雖ども未だ人生の大觀を得ず或は以て少年少女を喜ばしめむも未だ以て一世の風尚を壘斷するに足らざる也。其の未熟なる人生觀に本ける主觀的潤色の如きは偶々觀念小説の轍趾を襲ふに過ぎざるのみ。願ふに逍遙か小説神體の一編を以て寫實主義の大旗幟を翻へし。在來小説の荒唐失體を道破し天下の文壇期年ならずして翕然として是に赴くに當りてや明治小説の前途洗々洋々としてさながら海の如きものありき今にして是を思へば殆ど今昔の嘆に堪へざるなり。

さはれ吾れは今日の小説を以て十年前の小説に劣れりとするものにあらず唯其發達の經行を依傍し來れば前途の甚だ荒寥ならむことを憂ふるのみ。或は問はむ進歩せるもの、將來に望なきを得るか。吾は即ち一個の最も簡單なる事實を以て敢て讀者の注意を促さむ。今の小説の最も賣行好きものと雖も其部數三千を出でずと云ふ是れ果して何事を意味するものぞ。吾を以て見れば是れ即ち今の小説が國民的ならざるの一證なり。あはれ四千五百萬人の中購讀者僅に

三千を超えずとせば是の如き小説は國民の生活嗜好幸福と殆ど爲すなきの小説に非ずや。今の批評家小説家の言ふ所を聞けば是れ社會的嗜好の卑きが爲なりと。吾は今の社會の有する文學趣味を以て高尚なりと思惟する者に非ず然れどもおしなべて今の小説を了解する能はざる程卑き者とは思はず。換言すれば今の世に今の小説を了解するものが僅に三千人を超えずとは思惟する能はざるなり。却て思ふに批評家小説家が是の如き理由を以て今日の文學を回護せむとする事即ち是れ今日の小説をして是の如く落窶たらしめたる原因には非ざるか。

吾は又我が日本を以て文學的書籍の購買力に於て爾かく無能力なりと思惟する能はず現に一傳奇小説を著して洋行費を獲たる人すらありしに非ずや。苟も其の性情の要求に満足を與へ得るものならむには國民の是を求むる豈啻に三千に止まるべけむや。そもく了解と満足とはおのづから別種の概念なり。現在本邦國民の知識の程度にありて今の駄小説の意義を了解する能はずとは到底吾が想像し得ざる所なり。唯是によりて其の性情の満足を得ざるが爲に爾かく國民の顧みる所とならざるのみ。吾れは茲に到て國民的性情の遂に動かすべから

ざるものあるを見る也。

坪内逍遙が持ち來せし寫實主義の改革が我が小説史上の一新時期なることは言ふまでも無し然れども氏に次て來りたるもの一意は主義を遵奉して其他を知らざるに及びて茲に寧ろ其弊を見き吾を以て是を見れば明治二十年以後の小説は其進歩と共に漸く國民性情に遠かれり是れ今日の極衰を致したる所以也而して是極衰の萌芽は實に逍遙が『小説神髓』の一卷に包藏せられありしなり。

蓋し明治十八年以前の小説は概ね徳川文學の遺鉢を繼承し馬琴種彦の荒唐を學ぶに非ざれば一九春水の鄙俚に倣ふもの然らざれば西洋小説を摸倣して生吞活剝に陥れるもの何れも時節後れのものにして明治新時代の産物としては甚だ幼稚のものなりき。東海鳴鶴龍溪鐵腹諸子の多少新思想を以て筆を小説に染めたるもの無きに非ざりしと雖ども其著作は新時代の新好尚に對する一定の見地と明確なる意識とを以て現はれたるものに非ずして單に在來小説の缺陷を補充せむとする盲目的煩悶に過ぎざりしに似たり。是時に當りて東西文學の比較研究によりて我小説の過去現在を觀察し詩學もしくは美學の立場より小説の理想

を説き以て將來の方針を案定したる者は我が坪内逍遙なりき。實に從來傳奇小説の荒唐を喝破し寫實主義の甘露門を開き世を擧げて舊趣味の中に困睡し一人の能く勸懲主義の陳套を顛脱するもの無き時に當り我が昏昏たる小説界をして十九世紀文學思想の光明に浴することを得せしめたる逍遙が功績は永く史上に赫灼たるべきなり。而かも吾れは敢て言はむと欲す氏が『小説神髓』の中には我小説今日の落窠を來すべき禍根を包藏せりと。何を以てか是を言ふや。

『小説神髓』説く所に二面あり一面は寫實主義の唱道にして他の一面は勸懲主義の打破なり。何をか寫實主義の唱道と云ふ人情を以て小説の主腦となし世態風俗是に次ぐと云ふ者は是れなり。以爲らく小説家の本務は人情の奥祕を穿ち心裏の活動を描寫して周密精到なるにあり。夫の和漢の稗官者流が偏に脚色の骨髄に入らむを務めて寫實の皮相に止まるを憂へざるは是れ眞小説に非ざるなり。又以爲らく夫れ小説家は猶ほ心理學者の如し宜しく心理學に基きて其人物を假作すべき也苟も自家放誕の意匠によりて強て人情に悖戾せる人物を作り出ださば其脚色は如何に巧妙なるも未だ以て小説と稱するを得じ。何となれば是の如

き人物は、作者が想像裏のものにして、人間世界に實在せるものに非ざればなり。是を以て八犬傳の八士の如きは、寧ろ仁義入行の化物にして人間に非ざるなり。更に又以爲らく、凡て小説家たるものは、専ら意を心理に注ぎ、假作の人物と雖ども一たび篇中に出てたる以上は、之を活世界の人と見做し、其思想感情を寫し出だすに、敢て自家の意匠に任せて善惡邪正の感情を挟むことを爲さず、唯其自然の状態を摸寫するを主とすべし。

是の如きは、『小説神髓』の寫實主義なりき。勸懲主義の圈套を脱する能はざりし當時にありては、是れ實に破天荒の意見なりき。脚色の末節に拘泥して寫情の何物なるかを知らず、抽象の理義に泥みて人物の個性を思はず、殆ど教訓の外に文學の意義を認めざりし文壇に向て爲されたる是寫實主義の唱道は、我が小説文學の進歩の上に如何に浩大なる利益を與へしや、素より言を待たざるなり。唯是寫實主義の必然なる結果として、實世間と小説との截然たる分離を見るに及びて、茲に其弊を見る。先に吾が所謂禍根なるもの即ち是れなり。

蓋し『小説神髓』の寫實主義は、他方より見れば即ち文學獨立論なり。己に所謂る

寫情を以て小説の神髓となす、世と人との關係の如きは素より其の度外視する所なり。己に所謂る人物事件を作るに於て自己の意匠を用ひて善惡邪正の感情を挟むことを爲さず、只傍觀して其の自然の經行を摸寫すべしとなす。是間實世間をして毫絲の累を及ぼさしむるを許さざるや、素より論無し。是れレッシング一輩の文學獨立論と何の擇ぶ所ぞ。是獨立論の爲に先づ打撃を被りたるものは即ち勸懲主義なり。以爲らく、我邦の小説作者は是理を悟らず、ひたすら笠翁が套語を株守し、苟も事を凡近に取りて意を勸懲に發するに非ざれば、則ち小説の體を失へりとなし、預め獎誡の摸型を造りて強て脚色を補綴す、甚だ笑ふべきなりと。

吾れは是寫實主義の唱道と勸懲主義の打破との一部に於て、儘に動かすべからざる一個の小説論を見る。然れども、そが文學の絶體的獨立を道破し、全く實世間との關係を遮斷したるの點に於ては、吾れ遂に是に同ずること能はず。げに逍遙自らが實世間の道義を蔑視せしに非ざること、彼れが『寫實小説』には、求めずして諷刺諷誡の法備はり、暗に人を教化するの力あり」と説けるにても明なるべし。然れども是れ寧ろ小説の偶然性として見たるもの、必然性として推獎したるに非ざ

るなり。吾れの目的は逍遙が論旨に就て是非せんと欲するに非ず唯是の如き小説論が明治十八年以後の我が文壇を風靡したるの結果として如何に遂に今日の落寞を招致したるかを審にせむと欲するのみ。

逍遙以後の小説家が有せる小説の概念は所謂小説神髓の寫實主義によりて鑄せられたるものなりき。二葉亭四迷の『浮雲』を初として美妙紅葉露伴以下の著作の何れにも勸懲主義は其片影だも現はさざりき。美妙の『夏木立』『胡蝶』露伴の『風流佛』『葉末集』『紅葉の』『色讎悔』『伽羅枕』『三人妻』以下硯友社諸氏の作は何れも純粹なる寫實主義の小説なりき。素より是等の著作の中或は『求めずして』諷刺諷刺の暗に人を教化するの力ありしならむ而かも是の如きは作者が初めより預期匠作したるものに非ずして寧ろ偶然の結果に屬す。彼等の作意の根柢を叩かば實世間と文學との關係に就ては毫も意識する所無く唯漠然として文學獨立論の單純自由を利とせしならむ。想ふに彼等は道義の觀念を以て全く文學以外のものとなし其著作に就ては逍遙が所謂寫實小説の上乗なるものは求めずして道義の軌に合せむと云へる如き信念をだに有せざりしならむ。彼等の後に來りたるも

の所謂撥鬚小説あり所謂觀念小説あり然れども今日に到るまで小説文學の中をなせるものは依然として文學獨立論の上に立てる寫實小説なりとす。吾れば敢て是寫實主義を以て小説界今日の落寞を致したるものとなす。何となれば文學獨立論は即ち國民性情の蔑視を意味し國民性情の蔑視は即ち是の如き文學の非國民的なるを意味すればなり。非國民的にして其國民に歡迎せられしもの未だ曾て是あらざる也。

多くの人は今の小説の衰微を以て國民的嗜好の卑下に歸す是れ其末に走りて其本を忘れたるもののみ。文學は人の爲に存在す人文學の爲に存在するに非ざるなり。文學何が爲に人の爲に存在す人は是を要すればなり。何が爲に是を要す我を幸福ならしむるが爲なり。我を幸福ならしむとは何にぞ我性情の要求を満足するが爲のみ。然らば即ち國民的性情を満足せざる所の文學は是の如き國民と何の爲す所ぞ衰微落寞素より其所のみ。是根本的問題を拋棄して徒に趣味嗜好の高下を説く抑々末のみ。

試みに問はむ過ぐる十年間の寫實小説は果して何れの點に於て國民的性情を

解釋し、若しくは是を満足したりとするか。日本國民は快濶樂天の國民なり、然るに寫實小説は悲哀厭世の恨事を説く。日本國民は尙武任侠の國民なり、然るに寫實小説は涕淚柔懦の事蹟を語る。日本國民は世界の中に於て最も道義的情緒に富める國民なり、然るに寫實小説は却て彼等に向て非倫敗徳を奨む。日本國民は忠孝義勇を以て人道の大本となす、然るに寫實小説は一も君父を言はざるなり。日本國民は家系の繼承を重じ、國家の運命を懸念するに於て世界其比を見ず。彼等は君父の爲に死するを以て最高の名譽となし、國民の利福は獨り國家の昌榮の中に見出し得べきとを確信す、然るに寫實小説は却て彼の爲に情死を説き、民權を説き、平等を説く。花柳の情恨、市井の屠沽、寫實小説是を寫して往々其精巧を究む而かも國民的意識の深底を探りて其性情最後の琴線を打彈せしもの果て幾何ぞ。是を以て作家の技巧愈々精にして國民の是を去ること愈遠し。宜なる哉、今の小説が殆ど作家、評家の間にのみ賞翫せられ、國民を擧げて門外漢たるの奇觀あるや。

若し今の作家、評家に向て、矢野龍溪の『經國美談』、末廣鐵腸の『雪中梅』、『花間鶯』等の如き小説が、何故に爾かく國民の歡迎する所となりしかと問はば、想ふに彼等は國

的嗜好の卑下を以て答ふるならむ。然れども吾を以て是を見れば、是れ其の一を知て未だ其の二を知らざるもの、み國民は是等の小説によりて自己の性情の解釋せられたることを認めしが爲には非ざるか。八犬傳と忠臣藏とは兒童走卒も是を知らざるもの無し。蓋し是二者は今の作家、評家の所謂趣味下劣なるものならむ、而かも國民的文學として吾れは先づ是二者を推さざるを得ず。是れ決して脚色の巧妙、文辭の流麗等の末節によりて解釋せられ得べき現象に非ざるなり。是を今の小説の賣高多くとも僅に三千部を超えざるに比して、徐ろに國民的性情の勢力に想到せば、思ひ必ず半を過ぎむ。

今の批評家は村上浪六が所謂撥鬚小説の流行を以て、單調なる寫實主義の小説に倦厭せる讀書社會の一時の反動となす。是れ亦其の一を知て未だ其の二を知らざるものなり。當時紅葉一輩の小説の兒女の涕淚多くして丈夫の意氣に乏しく、柔弱平板、偏狹單調なる、素より所謂撥鬚小説の流行を招致したる一原因なるべし。然れども抑々又任侠義に勇み、而かも風流韻致に富める、三日月次郎、吉井筒女、の助一流の人物、性格が、ただ我國民性情と相近きものありしが、爲には、あらざるか。

蓋し尙武義勇は我國民の一特性なり。一言の然諾を重じ、甘じて身命を抛ち、己を知るものゝ爲に一死を顧みず、是れ豈所謂武士俠客の精神に非ずや。濶達物に拘らず、而かも意氣相感ずれば、死生を以て相許す、是れ慥に我國民の一部理想的人物なり。故に吾れは想ふ、浪六小説が一時那の如き大流行を極めしは、畢竟是一事國民性情を解釋して其肯綮に當りたるものあればなりと。今日、荊、澁、柿、園、諸、子の小説が、批評家の鑑賞甚だ喧しからざるに拘らず、紅葉、柳浪、諸子の作よりも遙に多くの讀者を有するの事實も、一部の理由亦是によりて解釋せられ得べきのみ。吾れは實に夫の國民的性情を蔑視して、徒らに讀者嗜好の卑きを嘆ずる今の俗々たる作家、評家の大膽なるに喫驚せず、むばあらざるなり。是れ皆寫實主義の唱道せる文學獨立論の弊害なり。

是弊害の最も明晰に表はれたるは、日清戦争の當時にあり。王師海を越て西に動き、國を擧げて國家的精神の大運動に熱中せし時、我が濟々たる小説家は果して何事を爲たりしや。我國家が國命を懸けて東洋の平和を争ひし時、彼等は其戀愛談に苦心するを以て文士の本分を知れりとなしたりき。兵は戰に臨て生還を期

せず、而して閩國の民唯其兵たらざるを恨みとし、一朝令の下るを待ちて商は牙籌を捨て、農は鋤鋤を抛ち、學者は其書と筆とを擱きて共に銃劍を握らむことを期せし時、彼等小説家は冷眼にして世上を看他し去り、一人の其筆に火して愛國義勇を唱へたるものあらざりき。偶々二流以下の小作家が戦争談を著すあれば、彼等は却て際物師として撥斥し去りたるに至りては、吾れは殆ど彼等小説家に國家的觀念の存否を疑はむと欲するなり。勢是の如きを以て戦争と文學と殆ど相知らざる爲して通過し去りたりき。想ふに當時の小説家は不幸にして我國家の没落到に遭遇するも、尙ほ其戀愛談の補綴に日も亦足らずとせしならむ、否らざれば中夜月明に乗じて亡國の殘府を訪ひ、是好詩的題目を與へたる上帝の惠を感謝せしならむ。あゝ國民は是の如き文學者と何の爲す所ぞ。彼等は何を以て實世間を賤しむか。ゲーテが其母國の運命に冷淡なりしを以て誰かアルント、キルナルル、ツケルト、シューランドを詩人ならずと謂ふか。世界の苦痛を歌ひたるレトナウは、熱心なる愛國家なりしに非ずや。吾れは我小説家の實世間に冷淡なるを見て、曾て洛陽少年の唱へたる文學亡國論の強ちに齊東野人の語に非ざるを認む。所

謂○寫○實○主○義○の○弊○是○に○到○て○極○ま○る○。而○し○て○其○端○を○啓○き○た○る○も○の○は○實○に○坪○内○逍○遙○が○『○小○説○神○髓○』○の○一○書○に○あ○り○。

吾○れ○は○茲○に○逍○遙○の○舊○著○を○難○ず○る○も○の○に○非○ざ○る○な○り○。實○に○彼○の○如○き○時○代○に○あ○り○て○彼○の○如○き○説○を○爲○す○矯○弊○の○立○言○と○し○て○寧○ろ○應○病○與○藥○の○旨○を○得○た○る○も○の○と○謂○ふ○べ○し○。唯○其○後○に○來○る○も○の○一○面○の○理○を○看○取○し○て○直○に○全○般○の○事○に○充○て○遂○に○一○世○の○文○學○を○誤○る○に○到○る○深○く○慨○嘆○す○べ○き○な○り○。

然○れ○ど○も○既○に○去○る○も○の○を○し○て○去○ら○し○め○よ○今○は○即○ち○是○極○弊○の○文○壇○に○對○し○て○其○根○本○的○革○新○を○斷○行○す○べ○き○時○機○に○あ○ら○ず○や○。是○を○爲○す○の○法○唯○國○民○性○情○の○滿○足○に○あ○り○。是○に○於○て○か○小○説○家○は○自○家○の○偏○狹○な○る○嗜○好○を○捨○て○去○て○國○民○に○就○て○其○意○識○を○檢○覈○せ○ざ○る○べ○か○ら○ず○。作○家○今○日○の○覺○悟○は○既○に○其○第○一○步○に○於○て○其○道○を○誤○れ○り○。其○技○愈○進○み○て○其○作○愈○行○は○れ○ず○畢○竟○非○國○民○的○文○學○な○れ○ば○な○り○。

(三十一年三月)

曲亭馬琴

今○の○時○に○當○り○て○日○本○文○學○の○爲○に○其○前○途○を○劃○せ○む○と○す○る○の○誠○意○あ○る○も○の○は○必○ず

や○先○づ○國○民○性○情○を○言○は○さ○る○べ○か○ら○ず○。

今○や○幾○多○の○小○ゴ○ッ○ト○シ○ェ○ッ○ド○は○到○る○處○是○れ○あ○り○然○れ○ど○も○未○だ○ミ○ル○ト○ン○を○拒○み○た○る○一○瑞○西○派○だ○に○あ○る○を○聞○か○さ○る○也○。安○ぞ○一○の○大○レ○ッ○シ○ン○グ○無○き○を○怪○ま○む○や○。

今○の○詩○人○小○説○家○は○果○し○て○我○國○民○の○性○情○を○解○す○る○か○。吾○人○が○彼○等○に○對○し○て○言○べ○き○所○唯○是○れ○の○み○。

セルヴンテス、カモエンスの詩人たるや、何故に英佛獨にあらずして特にイペール半島にありや。ゲーテ、シルレルの詩人たるや、何故に英佛以にあらずして特に獨逸にありや。抑もダンテは何故に英國の詩人たらずして以太利の詩人たるか。彼等の不朽なるは各々其國民的詩人として國民性情を發揮したりしが爲に非ずや吾人は是點に於て我曲亭馬琴を偉とせずむばあらざるなり。彼れの作一度び世に出づるや、當代の荒唐なる草雙紙、浮艶なる浮世草子、無趣味なる實錄、仇討物に倦厭せる社會は、翁然として是に赴くこと水の低きに就くが如かりしは何が爲ぞ。彼れの該博なる學識や、雄麗なる詞藻や、將又巧妙なる脚色や、素より其流行に力ありしならむ、然れども一世の風尚を化して文化以來の小説界に一生面を拓發した

るものは實に其の勸善懲惡の大主義に非ずや。彼れは是點に於て儘に文人功名の秘訣を解し得たるものなりき。

何を以てか是を言ふ。

彼れの小説は、今日より見れば、其技工の拙なるもの多きは言ふまでも無し。其事例の怪奇にして人物の不自然なる、又強いて地を作り、務めて理を構へ、時として老農故事を説き、俠客道を談ずるの奇觀を呈したる、將又務めて知を擧げて情を抑えたる、何れも小説の體を得ず。唯其の勸懲主義のあるあり、百年の後、凜乎として尙ほ生氣あり。實に彼れが唱道せる主義こそ、我國民性情の現世的道義的傾向を投射して尤も明晰なるものなりしなれ。殊に其の力を極めて描寫したる武士道の如きは、任俠氣に勇む大和民族の尙武的氣象を鼓舞し、讀者をして嚮慕興起の情に勝えざらしむ。實に彼れが小説は、幾多の缺陷あるにも係らず、其の國民的な點に於て長く後昆の翫賞に資すべきなり。

而して吾人の尤も馬琴に於て貴しとする所は、我國民が彼れの作によりて慰藉と教訓とを求むること、に於て同時に國民性情に尤も健全なる進歩の動機を與へ

得べき事あり。

借問す、今の小説家は是點に關して什麼の覺悟がある。嗚呼靈火一閃、國民性情の核子に點ぜよ。河嶽の流時、日星の光耀、其れ何者か是を壅塞するを得む。

(三十一年二月)

詩的の兩面と其利弊

誠に美はしきを美はしとのみ打見やりて樂み得べくむば、世に人の罪の如何ばかり少かりなむ。又物の美はしきを鏡の裏の姿とのみまもりて實世間の事にいさゝかも關はらざらむには、世の人のいさをしの如何ばかり微かなりけむ。人の心は一つにて、物の觀方には二つあり。美を樂むの情は、そを我が物にせむとする思ひと、相は變はれども體は同じ。其の埒や、もすれば外れて二つのもの互に交はる、げに人の罪もいさをしも共に是れよりぞ初まる。

吾れ史を讀みて人間の大事は美的空想の所生なることを思ふや久し。げに志高き人の美はしと觀む程のものは、現在の時と處とを離れて一往我理想の界に赴

くなり。夫の世事破れて補綴に遑無き時、かゝる理想の摸型に投じて世の有様を改造せむと企つる、所謂革命の幟を樹てしものこそ不世出の偉人として千古に稱へらるべけれ。すべて斯からむ人は、おのが理想をば美はしとのみ見て、靜に樂むべきに非ず、更にそを我が物にせむとて動けるなりき。

是れ詩歌、或は美的空想の利益の一面なり。

革命、自由、獨立の歴史の何れか、かゝるためしに非るべき。クロムエルは言葉無き詩人、其革命の空想は形なき歌なりき、彼れに代りて歌ひしものはミルトンなりき。其歌の響を反へしたる國民は、そを歌としてのみ讀まず、歌としてのみ樂まず、形ある生命ある人と世とをもて、是詩の理想を現はさむと務めたるなりき。

モンテスキュー、デルテール、ルソアの自然主義は誠に美はしき詩歌なりき。彼の時、デカールト以來の哲學は幾多の學系を産みたれども、人はたゞ新學語の送迎に忙殺せられんとし、倫理の標準は學說の浮動と共に萍の定めなく、宗教は其の新しきと舊きと、共に是を統一するの力無し。文學界に於けるセンチメンタリズムは益々是紛糾に油するのみ。あはれ是時「自然に歸れ」と唱ふ、誠に野に呼べる人の聲

なりき。帝王にも乞食にも同じ價を附くる程の平等と自由とをば、如何なる詩人が是よりも明に歌ひ得べきぞ。心の渴へたる時の人には、是れやがて精靈のバプテスマなりき。彼等は詩歌として是を樂むのみをもて足れりとせず、是世と是國と是人とを、是福音に稱ふものに造り更へむと望みたるなりき。所謂佛蘭西大革命は其結果なりき。されば是革命のまことの意味は、斷頭臺上のルイ十六世に在らず、ダントン、マラー、ロベスピエールにあらざ、將た又全歐洲の侮りとなりたる佛蘭西が忽ち起りて其政體を變更し、那の如き短日月の間に全大陸を其鐵蹄の下に踏みにじり、近くはカル、大帝の領土を超駕し、遠くは人をして羅馬帝國の全盛時代を想起せしめたる奈翁帝の大勢力にも存せず。まことは佛蘭國民の其血潮といのちとをもて綴りたる、形もある一篇の大叙事詩にてありしなり。

自由戦争時代の獨逸は、かゝる例しの幾個をば吾等に示めしき。まことに奈翁の苦しめより奮ひ起りて是國の獨立戦争を全うせし國民は、其のキルケルよりも其のアルントよりも、其のルツケルトよりも大なる詩人なりき。人は其の自ら想像したる詩中の人たらむとて、其劍を執りぬ、祖國の青山に其の一字を刻まむが爲